

アジアの人々の協働から学ぶ

XXXIII

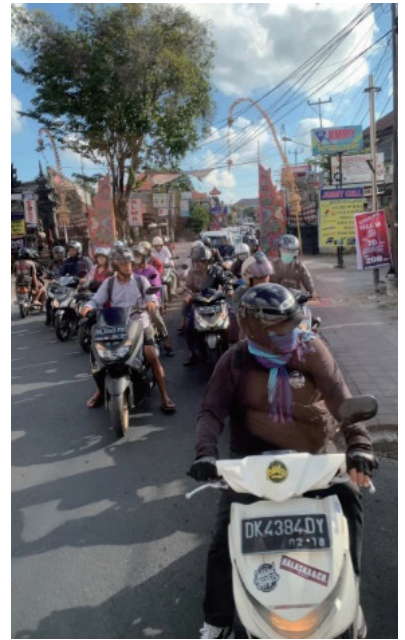


第33回国際ワークキャンプ報告書(インドネシア)

A REPORT OF INTERNATIONAL WORK CAMP (INDONESIA)

2019

桃山学院大学









IWC 33rd. テーマ

「一歩踏み出す勇気」

IWCは今年で33回目を迎えました。
参加者がそれぞれの目標や目的を持って
IWCのプログラムに挑み、
それがみんなの未来への第一歩になるという
願いを込めてこのテーマを掲げました。
これまで培ってきたIWCの歴史、思いを
受け継ぎ、私たちは飛び立ちました。

目 次

・ 第33回IWCテーマ『一歩踏み出す勇気』	1
・ 「変えることのできるものと変えることのできないもの」 第33回国際ワークキャンプ実行委員会委員長 社会学部 村 上 あかね	4
・ スケジュール	6
・ メンバー紹介	13
研修報告	
・ 事前研修	19
・ 現地プログラム	20
ホストファミリー	21
ホームステイ	22
入村式	32
ボランティアワーク	33
アスラマの環境と施設	35
アスラマの子どもたち	36
交流会 1・2	38
日曜礼拝	41
日本食パーティー	42
離村式	44
エバリュエーション	45
文化探訪	46
・ 事後研修	47
・ なんでもランキング	48
・ よく使ったインドネシア語	49

参加学生のレポート

【桃山学院大学学生】

「IWCで感じたこと」	隊長 中 川 皓 汰 ……	50
「ボランティアワークを通して広がった世界～考える～」	副隊長 平 野 隆之介 ……	52
「IWCでのかけがえのない経験」	副隊長 大 野 佑 也 ……	55
「私の行動、考えの変化」	原 田 健 斗 ……	58
「たくさんの笑顔との出会い」	長谷川 大 陽 ……	60
「IWCで感じたこと」	大 川 芽 衣 ……	63
「33期の仲間と新しい出会い」	中 村 彩 美 ……	65
「インドネシアの文化および生活について ～私が感じたインドネシア～」	海 津 龍 馬 ……	68
「IWCの体験について」	佐々木 琢 弥 ……	70
「バリの文化に触れて感じたこと」	滑 田 愛 ……	73
「インドネシア国際ワークキャンプに参加して」	尾 坂 惇 ……	75
「アスラマでの自分の変化」	福 留 美 緒 ……	78
「成長できた14日間」	布 藤 理 沙 ……	81
「国際ワークキャンプを通して感じたこと」	菊 池 安梨沙 ……	83
「インドネシアでの気づき」	百 溪 千 夏 ……	85
「初めての海外」	馬 場 絢 子 ……	87

【ディアナ・プラ大学学生】

I Gusti Made Dwi Wahyudi Wibawa ……	90
Luh Ayu Puspita Dewi ……	92
Putu Eric Darhendra ……	93
Fortunata Pascalia Clara Bethesda Sigit ……	95
Veranatha Kathleen Teller ……	98
Matius Lende Bili ……	99

引率者レポート

「第33回 IWCをふりかえって」	第33回国際ワークキャンプ団長 チャブレン 宮 嶋 眞 ……	101
「「安全地帯の外に出る」こと―第33回IWCに参加したみなさんへ―」	国際教養学部 森 田 良 成 ……	106
「第33回国際ワークキャンプ（インドネシア）に関わって」	学部事務課 村 上 諭 司 ……	108

変えることのできるものと変えることのできないもの

第33回国際ワークキャンプ実行委員会委員長
社会学部 村 上 あかね



この国際ワークキャンプ（IWC）は今年度で第33回となった。古い資料によれば、1959年に創立された本学が開学25周年を迎えたことを機に構想が持ち上がったという。1987年に初めての派遣が行われ、途中、テロやSARSによる中止（第18回）、病気による途中帰国（第30回）、関西空港の台風被害による滞在延長（第32回）を余儀なくされた時もあったものの、本学の中では長い歴史がある海外派遣プログラムの一つである。過去の参加学生、引率教職員、関係者から構成される「世界市民」のネットワークは、今年、創立60周年を迎えた本学の歴史に確かな足跡を刻んできた。このようなプログラムが桃山学院大学にあることに感謝したい。

今回は8月21日（水）から9月3日（火）の14日間にわたって、インドネシアのバリ島で活動を行った。宮嶋眞チャプレンを団長とし、学生16名、引率者として森田良成国際教養学部准教授、村上諭司学部事務課員の合計19名が現地へ赴き、現地帯同者およびディアナ・ブラ大学の学生6名と「協働」した。現地語でアスラマと呼ばれる児童養護施設的环境をよりよいものにするため、施設の外壁建設、施設内にある畑での農作業だけではなく、施設の改善点を提案するエヴァリュエーションも行った。学生たちが子どもたちと信頼関係を築くことによって、彼ら/彼女らの率直な意見を引き出したことは見事というほかはない。アスラマ（児童養護施設）の子どもたちや小中学校の児童生徒たちと空手や合気道、折り紙、ゲーム、歌やダンスで交流したり、バリ舞踊や音楽を鑑賞したり、ホームステイ先の家族や子どもたちとバーベキューをするなど現地の方々との交流、総領事館訪問、礼拝参加、市場やスーパーでの買い出し、文化体験など、盛りだくさんの内容と聞く。インドネシアならではの食事や入浴習慣、動物との関係も新鮮だったようだ。詳しい活動内容や感想は各自のレポートをご覧ください。

今年度は現地滞在期間および事前・事後研修期間の短縮や実施日時の変更など、新しい取り組みを行った。災害などのリスクを減らして円滑にプログラムが実施できること、さらに学生を始め関係者の負担を減らしてプログラムを持続可能なものにすることが目的であった。結果として、昨年度よりも参加人数が増え、ケガや疲労はあったものの全員が無事に帰国することができたことに安堵している。新しい取り組みによって生じた課題や残された課題は今後検討するが、「変えることのできるものを変える勇氣、変えることのできないものを受け入れる冷静さ、両者を識別する知恵」（「ラインホールド・ニーバーの祈り」より抜粋）を持ちながら、このキャンプが引き継がれてほしい。学生たちが自分を変えようと一歩踏み出す勇氣をもちながらも、お互いによく協力して成果報告会まで一人も欠けることなく活動をやり遂げたこと対して、毎年のことながら感銘を受けた。

8月の結団式では「観光客として楽しんだり、お客さんとして世話をしてもらったりするだけではなく、このプログラムの意味を考えてほしい」と述べた。厳しい社会の現実と直面すること、自分に何ができるかを考えて主体的に行動することは成熟した大人になるために必要な体験であり、今後の人生を歩むうえで大きな財産になったのではないだろうか。

毎年私たちを受け入れてくださるバリ・プロテスタント・キリスト教会、元ウィディヤ・アシ財団ディ

レクターのスイクラマさん、ならびにアスラムのスタッフを含めた現地関係者、温かくもてなして下さったホストファミリーには感謝の念に堪えない。

このキャンプの参加にあたり、学生たちは筆記試験と面接による厳正な選考を経たのち、事前・事後の研修と合宿に参加することが義務づけられている。異文化理解については大野哲也社会学部教授、小池誠国際教養学部教授、森田良成国際教養学部准教授、インドネシア語については由比邦子兼任講師にご指導いただいた。研修は4月26日から毎週行われ、講義を聞くだけではなく、インドネシア語の讃美歌「Hari ini」（この日は主が創られた）の練習をしたり、自分たちが現地で何をどうやって行うか話し合いや準備を重ねた。健康管理については、日本側は保健室の今井敏子学生支援課員、現地では看護師の石井美和さんに丁寧な対応をしていただいた。辰巳吉孝学部事務課庶務担当課長、村上諭司・朝倉康仁・中森一輝学部事務課員、玉沖さやか・柴田美希チャペル事務室員、そして国際ワークキャンプ実行委員会の先生方（アベル・A・ベレイラ国際教養学部准教授、梅谷進康社会学部准教授、小池誠国際教養学部教授、櫻井雄大経済学部講師、吉田恵子経済学部准教授）など、みなさまのお力添えにあらためて感謝申し上げたい。

このワークキャンプにはインドネシア側の政治情勢の変化や後継者の養成、日本側の引率者の確保など課題はあるものの、すでに第34回の準備が始まっている。来年度は参加者のジェンダー・学部・学年の多様性がさらに増すことに期待したい。最後に、ご対応いただいた在デンパサール日本国総領事館、バリ日本人会、奨学金を給付して下さる日本学生支援機構、本プログラムにご支援頂いている桃山学院大学教育後援会にも改めて御礼を申し上げるとともに、引き続きご指導とご協力をお願いする次第である。

スケジュール

【国際ワークキャンプ（インドネシア）日程表】

8月21日（水）

8:30	関西国際空港 集合
11:00 (所要時間6:45)	関西国際空港→ングラ・ライ国際空港 GA883便（時差 1 時間）
17:00	ングラ・ライ国際空港 到着
17:30	デンバサールに移動
18:30	ブリ・サロン・ホテル 到着
19:30	ディアナ・プラ大学の学生と対面
	夕食
21:00	ミーティング

関空からバリ島に向けて出発～～



ディアナ・プラの学生と初対面！
すぐに打ち解けました！！



8月22日（木）

7:15	朝食
9:00	在デンバサール日本国領事館に移動
9:50-10:50	在デンバサール日本国領事館にて聴講会
12:00	昼食
13:00	デンバサール→プリンピンサリ
16:30	ホームステイ先に移動
18:00	アスラマで子どもたちと交流
18:30	夕食

領事館にてバリについて沢山聞きました



8月23日（金）

7:00	朝の集い
7:15	朝食
8:30-9:30	入村式・定礎式
9:30-11:00	ボランティアワーク（石運び）
11:30	昼食
12:00-15:00	フリータイム
15:00	アスラマツアー & 子どもたちと交流
18:30	夕食
19:30	ミーティング

入村式後に集合写真パシャ！
ボランティアワーク頑張るぞっ



インドネシアで人気のダンスで
大盛り上がり!!!



8月24日（土）

7:00	朝の集い
7:15	朝食
8:30	ボランティアワーク（石・ブロック運び）
12:00	昼食
13:00-15:00	フリータイム
15:00	交流会の事前打ち合わせ & 子どもたちと交流
18:00	夕食
19:00-20:30	交流会
20:30	ミーティング

たくさん練習したダンスを披露
とても緊張した～



8月25日（日）

7:15	朝食
8:30	日曜礼拝
11:30	昼食
12:30-18:30	ホストファミリーとの交流 or 子どもたちと交流
18:30	夕食
19:30	ミーティング

教会で「島人ぬ宝」を歌いました



ボランティアワークも中間地点！
音楽にノリながら作業中♪



8月26日（月）

7:00	朝の集い
7:15	朝食
8:30	ボランティアワーク （農作業 & セメント運び）
12:00	昼食
13:00-15:00	フリータイム
15:00	小学校・中学校の交流会の準備 & 子どもたちと交流
18:30	夕食
20:00	ミーティング

明日からの交流会に向けて
最後の打ち合わせ



8月27日（火）

7:00	朝の集い
7:15	朝食
8:30	小学校で交流会
11:30	昼食
12:30-15:00	フリータイム
15:00	ゴミ拾い & 子どもたちと交流
18:30	夕食
19:30	ミーティング

子どもたちと一緒にゴミ拾い
ゴミの多さにビックリ！



小学校での交流会
どのクラス也大盛り上がり



8月28日（水）

7:00	朝の集い
7:15	朝食
8:00	ムラヤの中学校に移動
8:30	中学校で交流会・見学会
11:00	アスラマに移動
12:30	昼食
13:30-15:00	フリータイム
15:00	ボランティアワーク （ブロック運び）
18:00	夕食
19:30	ミーティング

中学校での交流会
実際に二人羽織を体験



8月29日（木）

7:00	朝の集い
7:15	朝食
8:30	ボランティアワーク (ブロック・セメント・砂運び)
11:30	昼食
12:30-14:30	フリータイム
14:30	日本食パーティーの準備
18:30	日本食パーティー
20:00	ミーティング

150人前のカレーを準備！
美味しくな～れ～



屋外で B B Q !!!!!



8月30日（金）

7:00	朝の集い
7:15	朝食
8:30	エヴァリュエーションのための ミーティング
11:30	昼食
13:30-15:00	フリータイム
15:00	アスラマの子どもたちにプレゼント
15:30	ボランティアワーク (石・ブロック運び)
16:20	子どもたちと交流
18:30	夕食
19:30	ミーティング

子どもたちに日本からの
プレゼント



8月31日（土）

6:00	オブショナルツアー (ヤシの木樹液採取見学)
8:00	朝食
8:30	記念碑作成
11:30	昼食
12:30-15:00	フリータイム
15:00	子どもたちと交流
18:00	夕食
19:00	離村式
20:30	ミーティング

ボランティアワーク終了！
みんなの名前を刻みました



ガムラン生演奏
ド迫力の演奏に感動



9月1日（日）

7:15	朝食
8:30	プリンピンサリ→アスラマ
12:00	昼食
13:00	アスラマで交流会
15:00	タナロット寺院に移動
15:30	文化探訪1
16:30	デンバサールに移動
17:00	ブリ・サロン・ホテル 到着
18:00	夕食
19:30	ミーティング

タナロット寺院の風は気持ちよかった！
貴重な経験もできた！！



9月2日（月）

7:00	朝食
8:20	ディアナ・ブラ大学に移動
8:30	ディアナ・ブラ大学を見学
9:30	バリ・プロテスタント協会に移動
10:30	エヴァリュエーション
11:30	アガペーフエスティバル
12:30	昼食
14:00	バリ日本人会に訪問
15:00	ヌサデュアに移動
15:30	文化探訪2
16:30-21:00	マタハリショッピングモールで フリータイム
21:00	ングラ・ライ国際空港に移動

大学の前で記念撮影！
大学はとても広かった！！



人生で初めてのアガペー！
食べ物やいろんな人たちに感謝



9月3日（火）

0:30 (所要時間7:00)	ングラ・ライ国際空港→関西国際空港 GA882便（時差 1 時間）
9:30	帰国
10:00	解散

お別れは寂しいけど…
また会いに来るからね！！



メンバー紹介

【桃山学院大学】



中川 皓汰（こうちゃん）



平野 隆之介（のすけ）



大野 佑也（ゆうや）



原田 健斗（けんと）



長谷川 大陽（たいよう）



大川 芽衣（めい）



中村 彩美（あみ）



海津 龍馬（かいつ）



佐々木 琢弥（たくや）



滑田 愛（あい）



尾坂 惇（おさじゅん）



福留 美緒（みお）



布藤 理沙（りさ）



菊池 安梨沙（ありさ）



百溪 千夏（ちなつ）



馬場 絢子（あや）

【ディアナ・プラ大学】



アディ



デウィ



キャトゥリン



エリック



クララ



マティウス

【引率教員】



宮嶋 眞



森田 良成



村上 諭司

研 修 報 告

事前研修（中川・中村）

選考に受かった私たちはインドネシアに出発するまでの約3か月間、毎週火曜の昼休みと3日間の合宿による研修を行った。私たちは名前も知らない人たちの集まりで、研修でお互いが話すことがほとんどなかった。しかし、6月1日（土）の研修で私たちの関係は大きく変わった。

その研修内容は、穂久先生によるチームビルディングだった。チームビルディングでは「コミュニケーションを通して解決する」というテーマをもとに、大縄やレンガなどの道具を使い、自分たちで体験しながら学ぶものだった。私たちに与えられた課題は、コミュニケーションを取り、協力しなければ解決できないものばかりだった。初めはぎこちなかった私たちも、コミュニケーションを交わし、課題を解決していくうちにどんどん打ち解けていき、その日の最後には朝とは違った、より親密な関係になった私たちがいた。そして合宿では、先生方による講義で、インドネシアの基礎知識や異文化理解、ボランティアについて学んだ。その中でも、由比先生には3日間かけてインドネシア語を教えてもらった。この内容により、現地で自己紹介や挨拶を怖がらずにすることができた。その他の時間では、インドネシアの歴史を勉強したり、現地で行う交流会の準備やダンスの練習をしたりした。

これらの事前研修により私たちには団結力が生まれ、かけがえのない仲間となっていった。そして知識もつき、万全の状態ワークキャンプに臨むことができた。



現地プログラム



【ホストファミリー】

ホームステイはアスラマのあるブリンビンサリの家庭で11日間過ごした。
メンバーが2, 3人のグループに分かれ、各家庭にお世話になった。

- 1、中川 皓汰・アディ
- 2、佐々木 琢弥・エリック
- 3、大川 芽衣・デウイ
- 4、滑田 愛・馬場 絢子・クララ
- 5、百溪 千夏・布藤 理沙
- 6、中村 彩美・キャットゥリン
- 7、原田 健斗・尾坂 惇・マティウス
- 8、海津 龍馬・長谷川 大陽
- 9、平野 隆之介・大野 佑也
- 10、菊池 安梨沙・福留 美緒

ホームステイ（中川・アディ）

私はアディとペアになりホームステイをした。私たちのイブ、バパツはいつも忙しそうだった。イブは、家の中で服を作ったり、デザインしたりしていた。バパツは朝早くから仕事に行っていた。そのため私は、あまりコミュニケーションをとれずにいた。どうしたらいいのかわからず不安が募った。しかし、日曜の午後のホストファミリーとの交流の時間に「Let's talking!!」と私に言ってくれたのでその不安はすべて吹っ飛び、楽しく話すことができた。

私がお昼ごろに家に帰った時に、イブがいつもインドネシアのお菓子を出してくれた。これまでに食べたことのない味だったけれど手が止まらず、アディの分まで食べてしまったこともあった。それぐらいおいしかった。

一番印象に残っていることは、私が体調を崩したときにイブがあたたかい紅茶を作ってくれて、バパツは仕事に行く前に私に「大丈夫か？」と声をかけてくれたことだ。まさかそんなにも心配をしてくれるなんて思ってもいなかったからだ。私はそれが本当に嬉しかった。

短い期間だったけどアディと一緒にイブ、バパツのところにホームステイができてよかった。また会いたい！



ホームステイ（佐々木・エリック）

家には、お父さん、お母さん、おばあさんが住んでいた。お父さんは、少し日本語を話せて、毎晩おかえりと言ってくれたので、緊張がとれた。お母さんは、日本語はわからなかったが、いつも話しかけてくれて困っていることはないかなど聞いてくれて過ごしやすい環境をつくってくれた。毎日見送りをしてくれて元気をもらえた。また、番犬を2匹飼っていて昼はおとなしいが夜は毎日吠えてきた。家の外には、カカオ豆やコーヒー豆を干していて、普段見ることがない光景を見ることができた。部屋は、前に娘さんが使っていたそうで、とてもきれいで、鏡台やすごく可愛いピンクのベッドと抱き枕の様なものが置いてあった。ベッドは、2人で寝るのには少し小さかった。バスルームは、水洗式のトイレと桶とシャワーがあった。とてもきれいに使われていたので、水のシャワー以外は、快適に過ごすことができた。もう一度訪れたいと強く思うほど、楽しく泊まることができた。



ホームステイ（大川・デウィ）

私のホームステイ先はお父さんお母さん娘息子の4人家族だった。子ども2人はとてもシャイでほとんど話せなかった。お母さんと一緒にいる時は何とか少しだけ会話が出来たが、ほとんどご両親としか会話できなかった。

お母さんは私がアスラマに行くと言うとバイクで送ってくれたり、洗濯物を移動させてくれたり、スリッパを貸してくれたり、毎朝お茶を入れてくれたりすごく歓迎してお世話をしてくれて嬉しかった。毎朝お茶と一緒に出されるお菓子の中でお芋を薄くスライスして甘くあえたのが1番美味しくて、最終日にそれを沢山くれたので持ち帰って私の家族にも食べてもらったら美味しいと言っていたので、日本人の口に合うのかも知れない。

お父さんは挨拶したらいつも笑顔で返してくれて優しい方だった。

大変だったことは家族全員英語が通じなかったことだ。身振り手振りで言いたいことを伝え、WiFiの調子が良くなかったので翻訳機能も使えず、単語を並べるだけのインドネシア語で会話をしていた。それでも嫌な顔もせず私が伝えたい事を理解するまで付き合ってくれた。

4人ともすごく私を歓迎してくれて充実した10日間だった。



ホームステイ（滑田・馬場・クララ）

私たちは日本人学生2人とインドネシア人学生（クララ）1人の計3人でホームステイをした。私たちのホームステイ先はイブ（お母さん）とパパ（お父さん）の2人暮らしだった。イブとパパはあまり英語が話せなかったので、クララがよく通訳をしてくれて助かった。家には、犬と鶏と魚がいた。その犬は他の家の犬と比べて最初からとても人懐っこい性格で、とてもかわいかった。イブは家の横にある売店を経営していた。その売店は近所の人がよく集まる憩いの場だった。私たちもワークの後によくアイスやお菓子を買いに行っていた。イブは朝早くから夜遅くまで働いていて、あまり話す機会が無くて残念だった。1度家の庭の掃除を手伝った際に、お菓子やジュースをくださり、とても優しいイブでした。また、仕事を休んでまで私たちが開催した日本食パーティーや離村式にも来てくれた。カタコトのインドネシア語を話したらとても喜んでくれ、私たちまでとても嬉しい気持ちになった。ブレーカーが落ちるなどハプニングもあったが、私たちを優しく受け入れてくださったおかげで、楽しくプリンビンサリ村で過ごすことができた。

イブ、パパ、ありがとうございました。



ホームステイ（百溪・布藤）

私たちのホストファミリーはネネ（おばあさん）さんという元英語の先生が一人だった。また、たまにネネさんの息子がいたり、民泊もやっているようでいろんな人が出入りしていた。日曜礼拝の時に、教会でパプアの歌を歌ってくれたパプアからの訪問団も泊まっていた。だから、すごくにぎやかだった。その上に、猫がいて、滞在中に子犬がやってきた。猫は「プス」と呼ばれていて、とても社交的で夜中に勝手に部屋に入ってきたり、ネネさんが作ってくれたご飯をつまみ食いしたりと私たちを癒してくれた。部屋は綺麗だったが、窓が空いているタイプで虫がずっといる状態なのでハエ対策や虫対策のものがあれば助かったのと思った。

ネネさんには本当にお世話になった。疲れて帰ってきた私たちにみかんや水を用意してくれたり、私たちの洗濯物を乾きやすいところに移動してくれたり等、細やかな気配りに助けられた。その中でも2つ印象に残っている出来事がある。1つ目は部屋にトッケイ（トカゲ）が出てきた際に、夜だったにも関わらず私たちのためにトカゲを追い出して、「大丈夫」だと声をかけてくれたことだ。このおかげで安心して寝ることが出来た。2つ目は村を離れる最終日の朝にピサングレン（揚げバナナ）をご馳走してくれたことだ。まるで本当の祖母ができたような気持ちだった。どちらも私たちにとって良い思い出である。このワークキャンプ中に、ネネさんの思いやりの心に触れることが出来たことに感謝の気持ちでいっぱいだった。ありがとうございました。



ホームステイ（中村・キャトゥリン）

IWCに参加するか迷っていた際、1番の心配がホームステイだった。言語も文化も違う国で、知らない人と過ごしていくことは想像できないことで、自分が本当にやっていけるか不安だった。何人で泊まるかも、どんな家族と過ごすかも、現地に行ってみなければ何もわからない状態だった。不安だったのは私だけではなく、みんなも同じだった。

インドネシアに行って、インドネシア学生とホームステイを希望すればベアになれると聞いて、私は希望した。日本人の方が安心できるし、自由にできるけど、私はインドネシア語をもっと頑張りたいと思った。私とベアになったのはキャトゥリンという子で、英語がとても上手だが日本語は全く話せない。最初はキャトゥリンと話すのも難しかったけど、何日かすればよく話すようになり、一緒に日本語とインドネシア語を言いあったり、キャトゥリンの話もたくさん聞くことができ、それはそれはとても充実した時間だった。私の拙いインドネシア語やキャトゥリンやホームステイの家のお姉ちゃんの通訳で家族とも話すことができ、自分が思っているよりもとても楽しい時間だった。言語の違いよりも、虫の多さや水しか出ないシャワー、手洗いの洗濯などの方が私にとっては大変なことであった。

私はホームステイをしたことがなく、インドネシア語も本当に少ししか話せず、最初は不安しかなかった。しかし実際に体験してみて、本当に充実した濃い時間だったし、また家族のみんなに会いたいと思うほどである。勇気を出して一歩踏み出してみることは本当に大切であると感じた。



ホームステイ（原田・尾坂・マティウス）

私たちのホームステイ先ではインドネシア学生1人と日本人学生2人で過ごした。ホームステイ先の家はとても広くて少し驚いた。初めは、ベッドが1つしかなく、3人で同じ1つのベッドで寝ることに戸惑いを感じていたが、数日たつとお互いの仲もよくなり、何も気にせずに寝ることができた。洗濯は、洗濯機がなかったために毎日手洗いだった。普段は感じることもない洗濯機のありがたさを痛感しつつも、手洗いのスキルが日に日に上達しているように感じられた。また、お風呂はシャワーからお湯が出ないことが1番の驚きだった。私たち日本人学生は現地のお風呂に慣れていないこともあり、時間がかかってしまった。でも、同室のインドネシア学生は私たちを優先してくれた。彼の心遣いがとてもうれしかった。ホームステイ先で1番苦労したことは、イブと会話をしようとしても、英語が通じないことだった。コミュニケーションをとれないことにもどかしさを感じながらも、毎日積極的に話しかけていった。結局最後まで苦労したが、明らかに初日よりコミュニケーションはとれるようになったと思う。慣れないことが多く精神的にも大変だったが、ホームステイ先のイブと一緒に過ごしたインドネシア学生のおかげでとても楽しく、良い経験ができた。



ホームステイ（海津・長谷川）

私たちのホームステイ先は全体の中で一番遠く、徒歩で片道およそ20分かかる場所にあった。夜に帰宅する際には、他の家の番犬たちに吠えられながら、怯えて帰った。そのため、私たちは帰り道のことは「デスロード」と呼んでいた。

ホームステイ先はゲストハウスの様であった。部屋には、1台のベッド、物置台と小型の扇風機があるだけで、バスルームには、ヘッドの無いシャワーと無洗の洋式トイレがあった。これだけを聞けば、悪いところばかりのように思われるかもしれないが、ここでのホームステイは、とても過ごしやすくホストファミリーからの愛情をいっぱい感じた。ホストマザーは、お茶やお菓子、ヤクルトを毎日欠かさず出してくれた。他にも、自分でするはずだった洗濯をしてくれて、洗濯物を畳んでくれもした。ホストファザーは、毎晩家に帰ったときに出迎えてくれ、私が拙いインドネシア語で「おやすみ」というと、笑顔でそれを返してくれた。また、話すことが難しいインドネシア語だったので、翻訳をした後、手紙にして渡したら伝わったので、自分の意思を工夫することで伝えることができてうれしかった。

特に印象に残っている出来事は、ホストマザーと会話をしていた時、会話が頭打ちになったために携帯の翻訳アプリを使うと、翻訳アプリの音声为谁の声かわからず、何度も私に「これは誰がしゃべっているのか」と聞いてきたことである。



ホームステイ（平野・大野）

私たちのホストファミリーはお母さん、お父さん、息子さん、娘さん、おばさん、おばあさんの6人で暮らしていた。ホームステイ中にホストファミリーの娘さんの誕生日があり、一緒にお祝いをした。家には洗濯機や水洗トイレ、テレビ・ラジオなどがあり、生活には困らなかった。しかし、マンディ（水浴び）をする時に水道の蛇口には、ホースやシャワーヘッドがない状態だった。そのため、水桶に水を溜めて頭や体を洗っていたので初めは慣れず、大変だった。しかし、後日ホースやシャワーヘッドを付けてくれたのでさらに過ごしやすくなった。

ホストファミリーとの1番の思い出は、お父さんと息子さんと私たち4人で家の畑仕事の手伝いをしたり、近くのビーチやダムに行ったりしたことだ。庭には畑があり、私たちはそこで肥料運びなどの軽い農作業をさせてもらった。また、ヤシの木から実を採ってくれて、ココナッツジュースや中のゼリー状の実まで食べさせてもらった。その後に、車でビーチやダムに連れて行ってもらい観光することでもできた。徒歩では行けない場所に連れていってもらい、貴重な体験ができて良い思い出になった。また、ホストファミリーとの交流が深まるきっかけにもなったのでとても嬉しかった。お母さんは、毎日欠かさずにあいさつをしてくれたのが心に残っている。

離村式の日には、お父さん・お母さん・息子さん・娘さんの家族みんなで来てくれたことに心の底から感謝した。式の中で拙いインドネシア語だったが感謝の思いを伝え、みんなで写真を撮ることができて、短い間だったが家族の一員として迎えてくれて、とても嬉しかった。



ホームステイ（菊池・福留）

私たちがプリンビンサリ村に着いた時に子どもたちが重いキャリーケースを運んでくれた。家はアスラマから1番近く、家族は小さな子どもが1人と大きな犬が2匹と鶏がいるホームステイ先でとても笑顔で暖かく迎えてくれた。すぐに案内された部屋は大きなベッドが1つでとても綺麗だった。鏡は1つしかなく朝は鏡の取り合いになった。私たちがワークに行っている間にイブは部屋を綺麗に整理してくれ、私たちが洗った衣服はいつも丁寧に干してくれた。私たちがワークなどで疲れていたら気遣って「休んでね」と声をかけてくれたり、いつも笑顔で迎えてくれたのでたくさんの元気をもらえ、自然と笑顔になることができた。時間が合うときはいつも笑顔で話しかけてくれ、言葉が通じにくくてもとても楽しい時間を過ごすことができた。私たちの帰りが遅くなってもずっと待っていてくれて、私たちの顔を見てから眠るというやさしさに毎日触れとても嬉しかった。お風呂は水しか出なかったが、とても綺麗だった。初日にドライヤーをしたらブレイカーが落ちてしまい迷惑をかけてしまった。夜に帰ると家の大きな犬が吠えてきたが3日もたつと吠えずに迎えてくれるようになった。アスラマでの生活が安全に楽しく過ごせたのは間違いなくホストファミリーの方々のおかげだと思う。ありがとう。



入村式

ワークキャンプ3日目の8月23日に入村式が行われた。

私たちは、前日の夕方にプリンピンサリ村に到着していた。しかし、改めて入村式をするとなると、とても緊張した。その緊張は、村の人たちが日本人である私たちを受け入れてくれるのかという不安と、アスラマのために私たちにできることを頑張ろうという高揚感からくるものだった。不安からくる緊張はすぐに取り払われた。それは村の人たちが私たちを明るく迎えてくれたからだ。入村式は、プリンピンサリ教会の牧師様からのお話と祈り、賛美歌を歌う礼拝の形式で行われた。また、リーダーの中川がインドネシア語を交えながら、村の人にこれからお世話になることの挨拶とボランティアワークの決意表明を代表して行った。

入村式の中で定礎式も行われた。定礎式はボランティアワークの開始と安全を願う儀式で、私たちはボランティアワークが行われる現場に移動した。そこでは、予め掘られている溝に塀作りの土台となる石を置き、その周りにセメントを塗ることで石と石の間にある隙間を埋めていくという作業をした。終了後、みんなに麦わら帽子が配られて、入村式と定礎式が終わり、ボランティアワークの開始が宣言された。



ボランティアワーク（菊池・平野）

私たちはボランティアワークで主に、プリンピンサリ村にある児童養護施設、アスラマの敷地を囲う塀の建設の基礎工事、農作業の手伝い、アスラマ周辺のゴミ拾いを行った。ボランティアワークは、ワークキャンプ3日目の朝の8時から始まった。ワーク内容は、山積みになっている多くの大小様々な石を土台の基礎に使用するために、バケツリレー方式で1列に並んで運び、力に自信がある人は1人で運んだ。そして、石を運ぶだけではなく、運んだ石を積み上げて固めるためのセメントをバケツに入れたものや、塀の部分となるセメントで作られたブロックをバケツリレー方式で運んだ。いざ始まってみると、石を運び出して5分も経たないうちにすごい汗をかき、思っていた以上の体力を使い、疲れを感じた。正直これを約2週間毎日朝から行くと考えると、身体も気持ちも持つのかと不安になった。しかし、学生たちは思っていた以上に大変だとは言っていたが、ネガティブな発言は耳にしなかった。ワークをしている最中も、インドネシアの学生と交流している人が多くいた。例えば、「この石は重い」だとか「軽い」、「普通」だとか、「頑張れ」、「気をつけて」という単語をインドネシアの学生に習って、リレーする時に、次に渡す人に声をかけあったりしていた。また、遊んでいる時に足を怪我したり、重いものを持ちすぎて腰を痛めてしまったりした学生たちは、ワークが出来ない中自分たちには何が出来るのか考え、ワークをしている人とは別のことに取り組んでいた。私は、そのような仲間の姿を見ることでとても勇気づけられ、私も負けていられないと思った。私は、ポジティブに考えることができる仲間と一緒にワークができ、このメンバーとならば約2週間頑張ることができると思い直すことができた。

農作業のボランティアワークでは、インゲンの房からタネを取り出す作業と取り出したタネを土に埋めていく作業、茄子の苗を畑に植える作業、トウモロコシのタネを土に埋めていく作業をした。農作業のワークをしたのは1日だけだったが、作業中にみんなとゆっくり話をすることができたワークだったので、とても有意義な時間であった。タネを埋める際に、自分の感覚ではきっちりと等間隔に埋めるのが一般的だと思っていたが、向こうの人は大雑把に埋め、間が空いていると感じたらそこに追加のタネを埋めていたので、自分との考え方の違いに驚いた。農作業のボランティアワークは、初めての体験で慣れないことが多かったが、見様見真似だったり、周りと相談しながら行うことで、新しいやり方を共有することができ、日本ではできないような貴重な体験をすることができた。

ゴミ拾いのボランティアワークは、アスラマの子どもたちと一緒にアスラマ内とアスラマ周辺の道路でゴミ拾いを行った。ゴミは主にお菓子の袋などのプラスチック類が多かった。子どもたちが食べたお菓子の袋などをポイ捨てしているのが原因のようであった。プラスチック類のゴミだけでなく、中にはおもちゃや、ガラスなどのゴミもあった。子どもたちは裸足やサンダルで遊び回るため、危険であると感じた。その現状を改善するために、アスラマ内のゴミ箱をもっと増やすべきだと感じた。しかし、手伝いをしてくれた子どもたちは率先してゴミ拾いをしてくれた。そして次の日からゴミ拾いを継続してくれていたのも、子どもたちにとって、誰かがお手本になって一緒に問題を解決しようとする中で、自主的に行動するようになり、継続しようとする心が生まれることに繋がるのだと感じた。

私がボランティアワークを通して感じたことがある。それはボランティアとは単に無償で重い石を運んだり、塀を作ることや、インゲンやトウモロコシなどの種を植える農作業をする行為の事だけではなく、もちろんその行為も重要だが、重い石を運ぶ時や疲れてきた時に、頑張れと声を掛ける優しさや、仲間が頑張っている横で、自分には何が出来るのか探そうとする積極的で協力的な姿勢がボランティアのことをいうのだと感じた。



アスラマの環境と施設（大川）

～お風呂～

（マンディーと言い、日本のように湯船につかるのではなく、水浴びを指す）

お風呂は子どもが1人で入り、水浴びができるスペースで、トイレと一緒に設置されている。正直言ってあまり綺麗とは言えず、衛生的に良くない印象を受けたお風呂場は改善点の一つであると感じた。子どもたちに「お風呂に入ったか？」と聞くと、大多数はきちんと水浴びをしたが、明らかに髪が濡れてないのに「入った」と嘘をつく子がいたり、入ってもすぐ出てきたりと、お風呂が好きではないのかなという印象を受ける子どもが数人いた。

～遊び場～

アスラマには運動場・バスケットコート・そして大型の遊具があるエリアがあり充実していた。

しかし、地面には鋭利な石やガラスなどが落ちていて、裸足の子どももいるので危険だと感じた。それらを子どもたちと一緒に拾ってる時に、私が個人的に多いなと思ったものは、タバコの吸殻である。なぜ、タバコを吸わない子どもたちの遊び場にその様なものが落ちているのかと疑問に思った。大人がポイ捨てしているという予想はついたが、その様な事を手本になるべき大人がしているから、子どももお菓子のゴミなど平気で捨てるのではないかと思った。

～子どもたちの部屋～

男子寮と女子寮の外壁にはカラフルなデザインの絵が描かれていて（シンガポールの学生が描いたと聞く）、一部屋大体5、6人用である。

女子寮にしか入っていないので、女子の部屋のレポートになるが、好きなアイドルの写真（TWICE BLACK PINK BTSなど）や家族の写真、過去のIWCの写真が飾られていて、楽しそうだった。

女子は年齢の離れた子を同じ部屋にすることで、年上の子が年下の子の面倒を見るという習慣を身につけさせている。男子をそうすると、年上の子が威張ってしまったり、いじめたりするので、男子は年齢が同じ子を同じ部屋に生活させていると聞いた。



アスラマの子どもたち（布藤）

子どもたちについての印象は「積極的」ということである。当初、アスラマに行くまで、子どもたちの多くは家族から離れ淋しい思いをいただき、自分の殻に閉じこもっているのではないかと心配していたからだ。しかし、実際に子どもたちと遊んでみると、笑顔が絶えない人懐っこい子どもたちばかりだった。アスラマを訪問した初日から子どもたちは私たちに話しかけてくれすぐに名前も覚えてくれ、日が経つにつれて何度も声をかけてくれたり、一緒に遊ぼうと手をつないでくれたり、流行っているゲームを教えてくれたり、本当に私たちによくしてくれた。言葉の壁はもちろんあったが、子どもたちはインドネシア語が喋れない私たちにもインドネシア人学生にも分け隔てなく喋りかかってくれたので、楽しい日々を送ることができた。

すごく穏やかな子どもたちばかりで仲良くなった子から全員が手紙や髪飾りなどを貰ったりした。最終日別れが悲しくて泣いてしまった時、子どもたちが「Don't cry」とか「keep smile」と励ましてくれたことは印象に残っているし、とても思いやりがある子どもたちなのだったと思った。女の子は全体的に大人びていると感じた。例えば、日本人メンバーの中に自分の好きな人が出来ると、「I love you forever!」を日本語で伝えていたり、InstagramのIDや電話番号を聞いてきたりした事である。男の子のうち中学生以外はまだ子どもらしさを感じた。例えば、兵隊ごっこや木登りしているところを見せてくれたりなどである。中には手紙をくれた子もいた。

子どもたちは親が近くにいないが、共同生活の中で、上級生が下級生にマナーや行儀を教えるということを知らず知らずのうちにやっている。例えば、掃除をするときは掃除をする、遊ぶときは遊ぶ、勉強するときは勉強するといった切り替えをきちんとすることだ。これを年齢に関係なく、大人たちに言われる前に自らまじめに行っていることに驚いた。私にとって忘れがたい出来事がある。それは子どもたちが喧嘩をしていた時に大人が仲裁するのではなく、自分たちで解決する姿を度々見かけた時だ。これは子どもにとって簡単に出来ることではないし、大人でも難しいと思う。すぐに解決することができるこのアスラマの子どもたちはやはり、ここで生きた生活の中で人間関係の訓練を受けているからなのではと実感することができた。

子どもたちと関わっている中で印象に残った事は、子どもたちが私に「将来の夢は何か」と聞いてきたことだ。私はまだはっきりとは決まってないので、子どもたちに将来の夢を聞き返すと、「シェフ」「医者」「教師」「ダンサー」と即答してきた。私が彼女たちくらいの時、将来の夢なんて無かったのに、彼女たちはもう夢を持っていることにとても感動した。

私は今回アスラマの子どもたちと実際に触れ合ってみて、自分のもつ見方や考え方が必ずしも正確ではないということに気付かされたし、大きな学びを得たと思う。ワークキャンプに参加し、アスラマの子どもたちと大切な時間を過ごした私たちはこの子どもたちが今後も幸せに成長し暮らせることを願う。



交流会 1（長谷川）

事前準備

交流会についての事前準備のほとんどは、ダンス「グッキー」の練習だった。練習の時間はあまりとれず、授業終わりや合宿中に集中して行った。そのほかの事前準備は、「じゃんけん列車ゲーム」で使うじゃんけんの説明をするため、パワーポイントを作成したことや、プログラムを進める上で必要だと思われた司会のセリフを考え、それを通訳として司会役になってもらう、ディアナ・プラ大生に伝えるために英語版を作るといったものだった。

交流会の事前準備の特徴としては、現地に行ってみるまで不確定な部分が多いといったことだった。交流会のプログラムの順番も前日にアスラマの人と相談して決めた。

交流会本番

交流会当日は、以下のプログラム順に進めた。

1. 祈り
2. アスラマの子どもたちの民族ダンス
3. ディアナ・プラ学生の民族ダンス
4. 桃山学生のダンス
5. アスラマの子どもたちのダンス
6. ディアナ・プラ大学学生の民族ダンス
7. 交流会の司会者発表
8. 桃山での生活紹介動画
9. 手洗い指導の動画
10. じゃんけん列車
11. 空手の形と演武
12. 桃山学生の歌
13. 終わりの歌

交流会は1時間半の予定で、時間に余裕があると思っていたが、プログラムが終わるごとに子どもたちが毎回興奮して騒いだので、思っていたより時間がかかった。そういうこともあり、省略したプログラムもあったので、それが少し反省点である。

特に盛り上がったものは、アスラマの子どもたちのダンスやディアナ・プラ大生のダンス、じゃんけん列車だった。インドネシアのダンスは彼らにとって非常に馴染みやすく、盛り上がりやすかったのではないと思う。反対に私たちの「グッキー」や、歌った「島人ぬ宝」は、インドネシアの人たちにあまりなじみが深いものではなかったので少し盛り上がりには欠けたのではないかと思った。だから、これからはインドネシア人が聞いたことや見たことのあるような日本の歌やダンスを披露するのが良いと思う。

次回に向けてのアドバイス

事前準備では、交流会を行う場所の雰囲気や広さなどを考慮したうえでプログラムの内容を考えるのが良いと思う。交流会本番は、予想以上に時間の配分などがうまく行かないことがあるかもしれないので、時間調整の利くプログラムを数個作っておけば、そのような事態にも対応できると思う。また、思い切ってカットする部分も考えておけばよいのではないか。実際に「海の声」を歌うつもりにしていたが時間が押したために歌わなかった。



交流会2（原田）

小学校訪問では①折り紙のグループ、②空手の演舞と二人羽織のグループ、③紙皿レースと数拍手のグループ、④ハンカチ落としとフルーツバスケットのグループといった4チームに分かれ、中学校訪問では①折り紙と空手の演武と二人羽織のグループ、②紙皿レースと数拍手とハンカチ落としとフルーツバスケットのグループといった2チームに分かれ、現地の子どもたちと交流した。

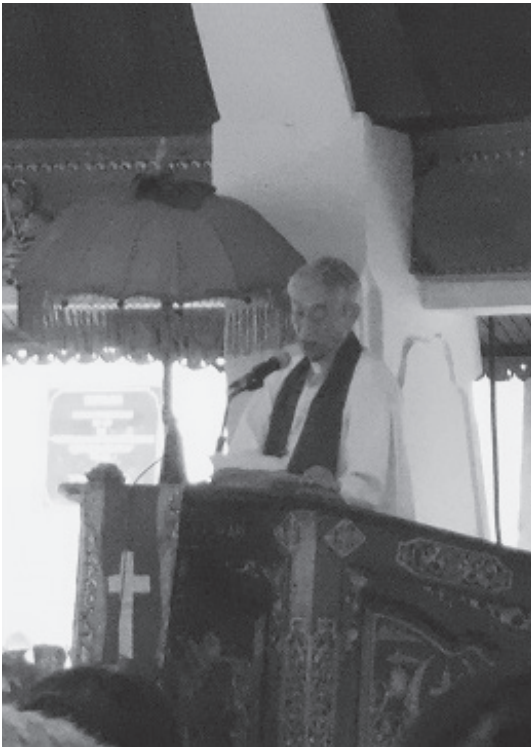
事前準備はとても大変でさらにそれらが現地の子どもたちに気に入ってもらえるのが心配だった。しかし、私たちの想像以上に子どもたちは楽しそうに取り組んでくれた。その姿を見て喜びと達成感が湧き、疲れが吹き飛んだ。

高校生と大学生がいるアスラマ訪問では私たちが到着すると、ガムランというバリの伝統的な楽器で隣の人の話している声が聞こえないほど大きな音で演奏をして迎えてくれた。そして日本人の学生とインドネシアの高校生大学生がお互いに事前に準備してきたものを披露しあった。私たちはダンスと歌と二人羽織と演舞と合気道を披露し、インドネシアの高校生大学生は森山直太朗の「さくら」を歌い、さらに日本の人気アニメである「妖怪ウォッチ」のエンディング曲「ようかい体操第一」のダンスと、バリの伝統的な踊りを披露してくれた。インドネシアの高校生大学生が「さくら」を日本語で歌ってくれたことや、お客を歓迎する伝統的な踊りをお客をその踊りの中に引き込みながら踊ったりしてくれたのを見て、現地の方々からのおもてなしの気持ちが伝わり、とても感動した。



日曜礼拝（百溪・福留）

バリで初めての日曜日、私たちは朝早く起きて礼拝のために教会へ向かった。バリの教会は私たちの知っている西洋的な雰囲気とは全く違ったのではじめは教会と気づかないほどだった。中に入ると教会はとても広く村の人たちがどんどん集まってきた。IWCのメンバーの中には初めて礼拝する人もいた。まず、しおりのようなものが配られた。しおりには何をどの順番でするのか、何分かかるかまで詳しくわかるものだった。礼拝が始まると歌や牧師様のお話で笑う場面がたくさんあった。さらにチャブレンの話にはみんなが爆笑というほど笑っていた。礼拝は厳かなものだと思っていたが、そうではなく楽しかった。私たちが礼拝に行った日には私たち以外にも遠くパプアからプリンビンサリの教会に訪れている人もいた。そして私たちは日本で練習してきた歌を披露した。日本の歌で全く知らないはずなのに村の方みんなが笑顔で聞いてくれるのが嬉しかった。さらに歌の最後には拍手をしてくれた。礼拝の最後はみんなで歌を歌って終了した。2時間ほどあった礼拝だったがとても短く感じた。そして私たちの礼拝に対するイメージが変わった瞬間だったと思う。



日本食パーティー（海津・佐々木）

私たちは150人分のカレーライスと焼きそば、焼き肉を料理してアスラマと村の皆さんに食べて頂いた。

材料は現地調達で、朝（10：00）に、ヌガラという隣町まで買い出しに行った。バザール（市場）は路地裏にあり、とても賑わっていて日本のスーパーなどで私たちが行かう買い物とは全く違う光景で見るものすべてが新鮮だった。商品には基本値札は無く、量り売りが主流であった。現地の人たちと会話をしながらの買い物は海外ならではのと思った。

〈日本から持って行った物〉

焼き肉のたれ	5本（3種味が異なるもの）
カレールー	3kg（2種異なるルー持参）

※カレールーは現地の人たちに人気が高く、余っているものは無いかと聞かれた。

アスラマに戻った後は調理を開始した。コンロが4口、鍋は大きいのが2つ、フライパンは何個かあり、アスラマの調理スタッフに作りたいものを伝えたらアドバイスをくれたのでスムーズに進められた。

材料（料理別）

・チキンカレーライス

材料	分量
鶏肉	5 kg
カレールー	3 kg
ナス	20本
人参	30本（7 kg）
玉ねぎ	50個（7 kg）
ピーマン	20本
ジャガイモ	30個（7 kg）

・焼きそば（ミーゴレン）

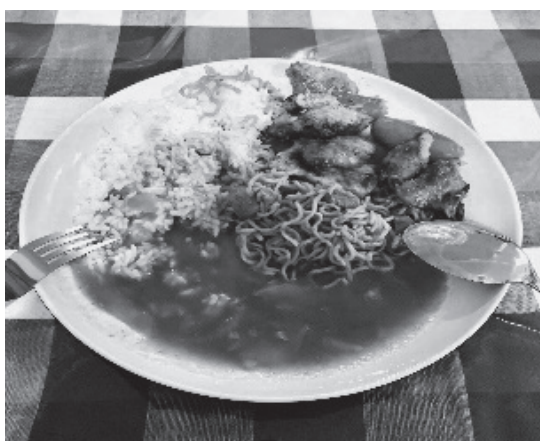
材料	分量
豚肉	10kg
鶏肉（ムネ）	10kg
ソーセージ	200本
焼き肉のたれ	5本

・焼き肉（BBQ）

材料	分量
豚肉	2 kg
焼きそば	1箱（40玉入り）
小松菜	11束
パプリカ	2 kg

※肉を買うときは種類（鳥・豚・牛）を選び、尚且つ部位まで伝えないといけない。そして鳥・豚・牛の順に（家庭でもよく使われる順に）手に入りやすい。

1日を通して色々な人たちが日本食パーティーに参加して、用意を手伝ってくれた。1人では難しかったことも仲間と協力したからこそいい結果となった。そしてアスラマの調理スタッフの人たちと楽しく調理できたのは最高の思い出である。



離村式（百溪）

8月31日の離村式の前、私たちはホストファミリーが来られるまで、自由時間が与えられた。この時間が、メンバー各々が子どもたちと自由に遊べる最後の時間となった。普段通り子どもたちと楽しくボール遊びをするメンバーや、子どもたちとの別れが悲しくて泣いているメンバー、それにつられて泣いている子どもたち、様々な気持ちをメンバーそれぞれが抱いて、非常に心に残った時間となった。

離村式はとても暖かい雰囲気の中行われた。この離村式は、村長さんや牧師さんが来てお話をしてくださったり、皆一緒になって歌を歌ったり祈ったりしながら進んだ。キャンプの最初のころはインドネシア語で歌われる歌に戸惑っていたが、入村式や日曜礼拝を経験したこの頃になると、特に違和感なく耳を傾けられるようになっていたし、繰り返し歌われる印象的なフレーズは口ずさむことが出来るようになっていた。そして、お世話になったホストファミリーの方々にIWCのメンバーそれぞれが書いた手紙を読み上げる時間があった。その手紙は日本人学生も引率の先生方やインドネシア学生に聞きながら、インドネシア語で書いたものだ。それを読み上げ、手紙を渡し、ハグをした。この瞬間ホストファミリーへの感謝と寂しさが同時に込みあげてきた。ホストファミリーとメンバーはそれぞれの家庭ごとに記念撮影をし、一緒に美味しい夕食をいただき、おしゃべりをして楽しんだ。夜も更けてきたので、名残惜しみながら再開を約束して別れの挨拶を交わした。



エバリュエーション（大野）

キャンプ最終日に、私たちはウィディヤ・アシ財団の本部でバリ・プロテスタント教会の主教様や財団総主事様にも出席いただき、今回のアスラマでの活動において私たちが感じた素晴らしい点や改善すべき点を伝えるエバリュエーションを行った。

素晴らしい点としては、アスラマの置かれている環境、子どもたちの規則正しい生活、礼儀正しさ、自主性などを挙げた。アスラマでは子どもたち一人一人がこの先成長し活躍していくための基礎を作る良い環境が整っていると思われた。

しかし、素晴らしい点だけでなく改善して欲しい点もあった。それは、子どもたちの食事の栄養面、遊び道具の少なさ、ゴミなどの環境衛生面、図書室の本の数、歯磨きや手洗いなどの衛生面、施設の安全面での不安などであった。例えば食事の栄養面では主食のご飯はほぼ満たされているが、おかずが少ないなど、子どもの成長に直接影響するのではと思われる内容もあった。また、施設の安全面では地面のでこぼこしている場所や床が濡れている場所もあり、子どもたちのためだけでなく訪問客の安全面のためにも早急に対応してほしいと訴えた。また観光村としてアピールしているプリンピンサリ村全体の環境についても犬の放し飼いなどの改善を訴えた。

私たちはこれらの素晴らしい点も改善して欲しい点もしっかりとアスラマを運営するウィディヤ・アシ財団の方々へ伝えることができたので今後活かしてもらえるよう願っている。



文化探訪（大野・滑田）

プリンビンサリ村でのワークを終え、帰国の前日に文化探訪としてタナロット寺院を、そして最終日にヌサドゥアを訪れた。

タナロット寺院はバリ・ヒンドゥー教の寺院で、波の浸食で出来た海岸にあり遠くから見ても近くから見ても美しく神聖な場所だった。潮の満ち引きによって寺院までの道が現れたり消えたりする所で、今回は干潮時だったので歩いて寺院まで渡ることができた。ここでは特にお布施を払い米粒を額につけてもらおうと拝観することができるというところが印象に残っている。

ヌサドゥアにはプロテスタント、カトリック、ヒンドゥー、仏教、イスラムの五つの宗教の教会や寺院が1つの場所に集められていた。プロテスタント教会は改築中のため、本来の様子を見ることは出来なかったが、他の教会や寺院は中に入って見ることができた。同時に様々な宗教の教会を見ることにより、より一層宗教ごとの特徴を感じることが出来たので貴重な経験となった。インドネシアの、宗教を大切にし、お互いの宗教に寛容な一面を、目の前で感じ取れる素晴らしい場所だった。それぞれの教会や寺院が隣同士に並んでいる風景は不思議な感じがしたが、信仰の違いで争ったりしないで仲良く共存している本来の宗教の姿について考えさせられる良い機会となった。



事後研修（馬場）

秋学期が始まり、毎週火曜日の昼休みにワークキャンプの事後研修を行った。研修内容は、このキャンプを支援していただいた教育後援会の報告会で発表するパワーポイントと原稿、そして、毎年キャンプのまとめとして作り上げる、この報告書の作成だ。ワークキャンプ中に行ったプログラムをいくつかの項目に分け、それぞれ担当者を割り当て各自で原稿と報告文の作成を行った。それぞれ自分の担当だけではなく、他の担当の人と意見交換したり、みんなにアンケートをとったりして、互いに協力して報告書を作成していった。そして、報告会の本番に向けて何度もリハーサルを行った。

大学祭中に行われた報告会では、ワークキャンプ中に行ったプログラムの紹介はもちろん、各自のインドネシアでの発見や実際に行ってみたいの感想、それぞれが今後に取り組みたいことについての発表を行った。私たちが体験したプログラムを淡々と発表するのではなく、その時どのように感じたか、感想を交えることでよりわかりやすく、興味をもってもらえるように工夫をした。

事後研修を通して、時がたってからも鮮明に思い出すことが出来るインドネシアで過ごした2週間は、私たちにとってどれほど貴重で大切な経験であったかということを再確認することができた。





【モテモテランキング】

- 第1位 けんと&ゆうや
(2人に票が集中したため1位のみ)

【持って行って良かったもののランキング】

- 第1位 日本のお菓子
第2位 延長コード
第3位 お土産&ファブリーズ&虫除け&物干しロープ

【驚いたことランキング】

- 第1位 星が綺麗
第2位 ハエの多さ
第3位 犬

【美味しかった食べ物ランキング】

- 第1位 焼き鳥
第2位 ミーゴレン
第3位 シンコンゴレン&バナナ

【困ったことランキング】

- 第1位 ハエが多い
第2位 寝相が悪い&お腹を壊した&マンディ
第3位 肌が荒れる

よく使ったインドネシア語

- | | |
|-----------------------------------|------------|
| ・ b a g u s (バグース) | ➡ 良い、素晴らしい |
| ・ c a p e (チャペ) | ➡ 疲れた |
| ・ p a n a s (パナス) | ➡ あつい |
| ・ e n a k (エナック) | ➡ 美味しい |
| ・ s e m a n g a t (スマンガッ) | ➡ 頑張れ |
| ・ l u c u (ルチュ) | ➡ 可愛い |
| ・ a p a ? (アパ?) | ➡ なに? |
| ・ t e r i m a k a s i h (トゥリマカシー) | ➡ ありがとう |
| ・ h a t i - h a t i (ハティハティ) | ➡ 気を付けて |
| ・ m a k a n (マカン) | ➡ ご飯 |

参加学生のレポート

IWCで感じたこと

経営学部 2年次生 中川 皓汰



私がこのプログラムに参加しようと思ったきっかけは、春休み期間中に参加した「インド異文化・ボランティア体験セミナー」でこの国際ワークキャンプ（以下IWC）に参加したことのある先輩から話を聞いたことだ。子どもと楽しそうに笑って映っている写真を見せてもらった時、子どもと遊ぶことが好きな私は「私もこの体験がしたい!」と強く思った。

私は今回で桃山学院大学の海外研修プログラムに参加するのが三回目である。留学先に着いた時の最初の楽しみは、空港の独特な匂いだ。匂ったことのない匂いや日本ではあまり匂うことがない海外特有の匂いを嗅いで「私は、日本ではない国に来たのだ。」という気持ちになる。その気持ちになったときの高揚感がとても好きなのだが今回はなかった。そういう気持ちにはならなかったが、早速インドネシア人の気質に少し触れることができた。それは、ホテルに向かうバスを待っているときだ。待っている場所の横が両替所でその中から私たちを見ている人がいた。それに気づいた私は、笑って手を振るとその人は同じように返してくれたのだ。私はそれがとても嬉しかった。また、手を振ると応えてくれるインドネシア人の気質に少しほっこりした。

そこからバンに乗ってホテルに移動した。車から見たのは、バイクの多さ、車間距離の近さ、左側通行ということもあり日本車が多いなどが見えてきた。これらに対してインドネシアすごいと思う人もたくさんいるだろう。しかし私は、タイ、インドとこれまでに見たことがあったため私は「インドネシアも一緒だ」と思った。

ホテルに着くとすでにインドネシア人の学生6名が待機してくれていた。いきなりインドネシア語を使う機会ができ、拙いインドネシア語で「ナマ サヤ コータ」（訳：私の名前はコータです）といったら逆に日本語で自己紹介してくれたのが嬉しくて印象的だった。その後、食事をする際に勇気を出してインドネシア人の学生の一人を呼ぶことができた。上手くコミュニケーションをとれるか心配だったけどエリックはとてもフレンドリーで話しやすかった。由比先生から教わったインドネシア語を少しでも使うと通じて嬉しかった。基本の会話は、英語を使った。私は、英語の単語のボキャブラリーが少なく上手く伝えることができなかった。しかしエリックは、それを理解しようとしてくれたためとても助かった。一日目にインドネシア人の学生全員とは話せなかったが一步踏み出してエリックを食事に誘うことができ、たくさん話すことができて良かった。

次の日は、在デンパサール日本国総領事館へ行った。今年も訪問を受け入れていただいたことが嬉しかった。なぜなら、疑問に思ったことを直接質問できるからだ。一番印象に残っているのは一番疑問思っていた至る所にインドネシアの国旗があること。それは、8月17日が独立記念日のためこの時期は多いとのことだった。他にも首都について、日系企業に関すること、日本との国交のお話など様々なことを聴くことができてインドネシアに興味を持つきっかけとなった時間だった。午後からはプリンビンサリ村に向かって出発した。

プリンビンサリ村に着いた時の第一印象は、とても自然豊かで空気が綺麗ということだった。そ

して私たちのボランティア先で子どもたちが過ごすアスラマに着いた。アスラマも同じく自然豊かで想像以上に綺麗なところだった。着いてすぐに皆子どもたちと遊んだ。次の日に聞いたことだが子どもたちは、家庭崩壊や母親がいない、貧しいなどの色々な困難な事情を抱えている。しかし、子どもたちからは全くそういう風には感じられず、むしろ私たちよりも元気だったのでそういった事情など全く気にすることなく関わることができた。初日は、サニーという3、4歳ぐらいの女の子が懐いてくれて私の手を引っ張り、走り回って遊んだ。初日なのにも関わらず怖がらず、一緒に遊ぼうと手を引っ張ってくれたことが嬉しかった。その後、ホームステイ先に向かった。

私は、インドネシア人の学生のリーダーのアディとペアになった。英語も話せないし、逆に迷惑をかけないかなと心配だった。話してみるとやはり私の英語はあまり通じなかったので翻訳のアプリを使って話した。恋バナをして照れているアディは今でも目に焼き付いている。恋バナって世界共通の話題だということがわかった。他にも、いつもマンディ(水浴び)をする時いつも先を譲ってくれるなどアディがとても気を遣ってくれたので助かった場面があった。そのため特に問題なくとても楽しく過ごせた。

三日目は、入村式をしてボランティアワークを開始する初日だった。私は、隊長だったので入村式でスピーチをした。インドネシア語で自己紹介をし、そのあとは日本語を翻訳してもらった。インドネシア語の自己紹介は何回も練習していたためうまく言うことができたのでよかった。そして、入村式が終わるといよいよボランティアワークが始まった。今回のボランティアワークは壁を作るお手伝いであった。まず私たちがしたワークは壁を作る土台となる石を運ぶ作業であった。石運びはみんなが一列に並んで運んで行くリレー方式で運んだ。ほとんど上半身のみを使って石を次の人へ渡していたがそれだけでも汗がとても流れた。インドネシアで感じた日差しはとても強かったので日中はとても暑かった。だんだんと疲れが出てくるが、みんなそれぞれが「Semangat(頑張っ

て!)」など鼓舞する声を掛け合って盛り上げた。黙々とするのではなく、皆それぞれが互いに声を掛け合い、交流を深めながらワークができ雰囲気がとてもよかった。ボランティアワークが終わり、昼食を食べた後は、いつも約2時間程度の空き時間がある。その時間は、ホームステイ先の家に帰ってワークでかいた汗を流すためにマンディをしたり、アイスを買って食べたり、集合時間よりも早くアスラマに行って小学生以下の子どもたちと遊んだり、お昼寝をしたりと自分のしたいことをすることができる時間でとても自分に合っていてよかった。

四日目の夕食の後、交流会があった。これは、アスラマの子どもたちとインドネシア人の学生たち、そして私たちが出し物をして一緒に楽しむものだ。私たちは「GOOD LUCKY!!!!!!」を踊った。ダンスは練習してきたのでうまく踊ることができた。しかし、あまり盛り上がりなかった。邦楽はわからないから盛り上がりにくかったのかなと思った。その後の佑也と太陽の空手の出し物は子どもたちが興味津々で盛り上がっていた。他にもじゃんけん列車も盛り上がっていたので本当に良かった。交流リーダーの健斗と太陽がインドネシアに着いてからの短い期間でインドネシア人の学生のアディとクララと打ち合わせをし、臨機応変に動いてくれたおかげでこんなに楽しい交流会にすることができたのだと思う。

五日目は、ボランティアワークがない日で日曜礼拝に参加した。それを通して思ったことが二つある。一つ目が、私の礼拝のイメージと違う。私がギャップを感じたのは、笑う場面がたくさんあったことだった。私のイメージは、誰も話してはいけないような空気のところであるというものだった。二つ目が、村の人々は互いに仲良しで子どもが色々な大人のところへ行ったりしていた。そういったところに異文化を感じた。その日の午後は、ホストファミリーとの交流の時間だった。これまでババツ、イブとあまり話す機会がなかったので話してみたいと思っていた。そんな中、ほとんどのホストファミリーは特にこの交流の時間に何もしないということがわかった。ババツに思

い切って尋ねてみると「Let's Talking!」と言ってくれたので私はとても嬉しかった。日本のことを話したり、バリ島のことを聴いたり、日本人の英語の発音の話をしたりとても充実した時間だった。

七日目に小学校に行って交流会をした。四班に分かれ、各グループに分かれて出し物をした。私たちのグループは、紙皿リレーをした。インドネシア人学生のキャスリン、マティウスの協力もあり小学生の子どもたちを楽しんでもらうことができたのでうれしかった。小学生との交流でわかったことは、私がインドネシアのジョコ・ウィドド大統領に似ているということ。最初は戸惑ったがこれはインドネシアの人々と仲良くなれる最強の武器だと思った。実際に次の日の中学生との交流会で自己紹介をする時に「ナマ サヤ ジョコウィ」と言うので笑いが起きた。想像以上にうけたのでうれしかった。その日の夕食後の振り返りの時間に整体師の方に腰を見てもらうとこのままだと寝たきりになると言われた。そんなにも体のコンディションが悪いと思っていなかった。私の当たり前の状態がダメということで次の日からボランティアワークをしてはいけないことになった。

次の日からは惇と一緒に違うワークをした。その時間は、自分のペースでワークができ惇と感じたことやこれからの事を話したりすることができた貴重な時間だった。その日の午後は、日本食パーティーがあった。その準備をしている途中から体調を崩してしまったので休んだ。パーティーが始まる頃にはみんなと合流することができた。少ししんどさは残っていたがイブ、パパッをはじめたくさんの人たちと話すことができた。コミュニケーションを取る際にはじめにジョコウィを使うととても笑ってくれるので掴みは完璧だった。

プリンビンサリ村で過ごす最終日に離村式をした。そこではそれぞれがお世話になったホームステイ先のイブ、パパッに感謝の手紙を読んだ。短い期間だったけど一緒に過ごした時間はとても楽しかった。だから、手紙を読んだ後のハグがとても寂しく思った。

その後、私が一番仲の良かったグッディとその

弟のミサエルにも感謝を言いました。するとグッディが「Don't forget me」と車のおもちゃを私にくれた。それは、改めて今日で終わりだなという気持ちと私をそれだけ思っていてくれて嬉しいという感情が入り混じった。

次の日の朝、出発時間まで子どもたちと遊んだ。その時はまた会えるから寂しくないと思っていたが、今このレポートを書いている瞬間の気持ちはとても寂しい。アスラマが恋しくて仕方がない。いつか必ず会いに行きたいと思う。またプリンビンサリを出発した次の日にも別れがあった。それは、インドネシア人の学生たちとの別れだ。マティウスは車の中から出てこないぐらい泣いていた。二週間でこれほど仲良くなれるなんて思ってもいなかった。そう思うことができるほど素晴らしい人たちに会うことができたこのプログラムに感謝。

ボランティアワークを通して広がった世界～考える～

社会学部 2年次生 平野 隆之介



始めに

私は、第33回国際ワークキャンプの一員として8月21日から9月3日の間、インドネシアのバリ島で過ごした。桃山学院大学の学生16人とディアナプラ大学の学生6人の計22人の学生が参加した。今回のワークキャンプのテーマである「一歩踏み出す勇氣」を目標にして、積極的に現地での体験に触れていこうと思い参加した。また、参加

するうえで考えながら行動することを目標としたワークキャンプ全体を通して多くのことを学んだ。そのなかで、私がワークキャンプに参加しようと思ったきっかけであり、活動の大半を占めたボランティアワークについて私が感じたことや学んだことについて述べていく。今回のワークキャンプでは、壁の建設のボランティアワークと農作業のボランティアワークを行った。

ボランティアワーク

まず始めに、壁の建設のボランティアワークについて語っていく。私たちがこのボランティアワークで行ったことは主に石運び、セメント運び、ブロック運び、砂運びだった。石運びでは大小さまざまな石を土台の基礎とするために側溝の周りに置いていく作業した。距離の遠さや重さの違いがありみんなでの協力が不可欠なワークだった。セメント運びでは壁の端っからバケツにセメントを入れて運ぶため、距離が徐々に遠くなり一人一人の負担が増えていくワークだった。また、一度運び終わったバケツは持ち帰らないと作業が滞ってしまうので役割分担が大切になったワークでもあった。ブロック運びはワークの大半を占めるものだったが、これもセメント運びと同じようなワークだった。最後に砂運びだが、このワークでは砂山を別のところに移し替えることをした。ワーク最終日の頃にした作業だったのでみんなが積極的に動いていたのが印象的だった。このボランティアワークを通して学んだことは一人一人がみんなを思いやることの大切さだ。私は、ほかの人にも言えることだが、自分なりの基準を持っている。自分にとっては楽な作業がほかの人には大変な作業となることもある。初日のワークの時、私は慣れない作業ということもあって自分のことに精一杯で、周りまで見るができなかった。しかし、それを反省点として次のワークの時からは周りを見ながら、また声をかけながら作業していると、それまでは見えていなかった状況が見えるようになった。そこで気づいたことがほかの人にもみんなを思いやることでより強い連帯感と助け合いの精神が芽生えてくということだ。私たちが

ボランティアワーク中に多く使った言葉で「SEMANGAT」（スマンガット）という言葉がある。この言葉はインドネシア語で「頑張って」という意味がありディアナブラ大学の学生に教えてもらった言葉だ。私たちは互いにこの言葉を掛け合った。みんなが励ましあう環境で作業ができたことで、とても元気よく効率的に作業できたことにつながったと考える。その結果として、壁の建設のボランティアワークは予定よりも早く終わり最終日に余裕を持つことができた。また、ボランティアワークをする中で音楽の持つ力の凄さについて感じた。私たちは作業中によく音楽を流していた。それは、邦楽やインドネシアの音楽、他の国の音楽などさまざまなジャンルの音楽だった。なぜ、音楽の持つ力が凄いのかと感じた理由は、どんな音楽でもそのリズムに乗れることだ。作業を続けていると当然のようにみんなも疲れが溜まっていく。しかし、疲れていても音楽が流れていると、その疲れが吹き飛んだかのようにみんなが明るく活き活きしながら作業をすることができていた。違う国の言葉で歌っているから言葉の意味は分からなかったが、それでもリズムに乗ることができた。だからこそ、明るく楽しい雰囲気を作った音楽の持つ力が凄いということを改めてボランティアワークを通して感じることができた。

次に、農作業のボランティアワークについて語っていく。このボランティアワークで行ったことはインゲンの鞘からタネを取り出す作業と取り出したタネを土に埋めていく作業、茄子の苗を畑に植える作業、トウモロコシのタネを土に2,3cmの穴を掘り、その中に埋めていく作業をした。農作業のワークをしたのは1日だけだったが、みんなとゆっくり話しながらできたワークだったのでとても有意義な時間だった。私はインゲンの房からタネを取り出す作業とそれを土に埋める作業をした。このボランティアワークで感じたことは初めての経験に対する喜びだった。私は農作業を今までしたことがなく、したことがあるのは収穫ぐらいのものだった。だから作られたものしか見たことがなく、作る工程に関しては知らないことが多かった。インゲンは房の中に多くのタネが入っ

ていたのだが、作業を進めるにあたって学生同士で効率の良いやり方を教えあうことができた。タネを埋めるときに私自身の感覚だとキッチンと埋めるのが普通だと思っていたが、向こうの人は大雑把に埋めていき、間が空きすぎていたらそこにタネを埋めていて、自分との感覚の違いに驚いた。また、タネを埋めたところに成長の補助のために竹の棒を刺していったが、土に刺さり易くするために先端をナタでとがらせていた。その体験をさせてもらったが、初めはコツがつかめずに時間がかかっていたが回数を重ねるごとにうまく削れるようになって、なれない作業でも徐々に上手くなっていき嬉しかった。農作業のボランティアワークでは、初めての体験で慣れないことが多かったが、見様見真似や周りとは話し合いながらやることで新しい発見を共有することができたので、日本ではできないような貴重な体験をすることができた。

私は今回の国際ワークキャンプで、副隊長とワーク隊長の役職をもらった。副隊長としての仕事はあまりなかったからワーク隊長として来ているという自覚の方が強かった。だから、インドネシアで過ごす中で、ワーク隊長として自分には何ができるのかをたくさん考えながら日々を送ることが多かった。まず、ワーク隊長になって、どのように行動するのかを考えるときに自分の中で決めたことがあった。それは自分のイメージするリーダーの姿を実行しようということだ。私が思うリーダーとは、率先してみんなの先頭に立つような人間である。リーダーは自らの行動で周りを引っ張って行き、指示を出すばかりで動かないようなことではいけないと考えている。だから私は、今回のボランティアワーク中は誰よりも周りの仲間を見ながらみんなの助けになるように頑張った。これが実際に出来ていたかはみんなの評価だから自分では分からないが、自分のイメージするリーダー論を実行できたと思う。ワーク隊長として行った仕事はボランティアワークの前にその日に行う作業予定を職人さんに聞きに行き、その内容とやり方を伝えること、休憩時間の確認をすることだった。毎日、作業のスケジュールを考えな

がら働くみんなに分かりやすく伝えようとしたり、みんなの疲労を考えながら時計とにらめっこしたりしていたのは大変だったが、それが自分の力になっていると実感出来たし、考えるのが楽しくなっていった。しかし、ボランティアワークをやる中でリーダーシップを発揮して、周りのみんなを助けようと思うと同時に周りのみんなにとっても助けられていることもすごく感じた。それは、作業を説明するときに桃山の学生とディアナプラの学生に説明するために日本語と英語を使って説明をすることがあったが、私は上手く英語で伝えることができなかったで、その時に英語で上手く伝えてもらい予定の確認がスムーズにいき、休憩時間が終わって作業が再開するときには私だけではなく他の人も声をかけてくれた。そのおかげですぐに作業が再開でき、周りのみんなに助けられた。ここで感じたことは、自分がリーダーシップを発揮するには周りの人と一緒に行ったり、支えられたりすることとても大切だということだ。どちらかだけが強い状態だと、バランスが悪くなってしまい上手く作業が回っていかないと感じた。

最後に、私が国際ワークキャンプ中に一番思い出に残っていることについて語っていく。それはボランティアワークの最終日に行ったプレート作りだ。なぜ、プレート作りが一番思い出に残っているのかというと、プレートが記録に残るものだからである。私はワーク隊長として、今年度の国際ワークキャンプのプレートをデザインから考えることになった。デザインを考えるにあたって私は以前のワークキャンプで作られたプレートのデザインを参考にするために見た。そのプレートは彫りが浅かったため、文字が薄くなっていて読み取りづらくなっていることと、参加者の名前が彫られていないというものだった。私はみんなと作るプレートが何十年と形に残るように、文字をより深くより大きく掘ることと自分たちが第33回国際ワークキャンプに参加したという記録が残るように一人一人の名前をプレートに入れようと考えた。こうしてプレートのデザインが完成した。そして、実際にプレートに文字を入れていく作業を

しているときに自分たちのやってきたことが形になっていくのが嬉しかった。そして、プレートに文字を彫り終えたときに今回のボランティアワークが終わったのだという達成感に包まれた。私は彫り終えた後もその場に残り、文字がより鮮明になるように彫っていた。その時に今までのボランティアワークが思い出されてとても考え深かった。自分の記憶だけでなく記録にすることができたことが本当に良かったと思った。

まとめ

私は今回の国際ワークキャンプで、「積極性」と「考える」ことの2つの目標を持って過ごした。そのどちらも自分にとってプラスに働いた。積極的にみんなと関わることができたことでボランティアワーク中もスムーズに進むことが多かった。また、常にどうしたら良くなるのかを考えることで相手の立場に立って物事を捉えることができた。この2つの目標を達成できたことで自分が成長できたと感じたし、次のことに挑戦しようとする気持ちも芽生えた。出発の前よりも一回りも大きくなった姿で帰ってくることができた。

IWCでのかけがえない経験

社会学部 1年次生 大野 佑也



動機

私がこの第33回インドネシアワークキャンプに参加しようと思った動機として、特別インドネシ

アへの思い入れや、ボランティアワークに対しての気持ちなどはほとんどなかった。目標にしていた大学や滑り止めとして受けていた大学にも行けず、受験に「失敗」したという思いが入学時の自分の正直な思いの中、このIWC33に参加してこの「失敗」という言葉の意味を改めて考え直すことができた。「ミスして立ち止まったり後退してしまったらそれは失敗なのかもしれないけど、ミスしてそれを修正したり別の形で挑戦することでそれはまた新たなものを生み出すきっかけとなり、成功へと近づくことが出来る。」という考えをこの活動で得て、自分のこれまでやこれからの行動を見つめなおすことが出来た。この肯定的な選択が出来たこともIWC33のおかげだと思う。今ではインドネシアやほかの東南アジアに対する思いも高まり、さらにボランティアワークに対しても以前より積極的に参加したいと考えるようになった。

インドネシアの風土

初めての東南アジアで、さらに赤道直下の国ということもあり僕にとってのインドネシアは情報の世界でしか知らない程度だった。日本にいるときに知ったことは乾季と雨季があったり、蚊の感染症や狂犬病について聞かされて不安に感じていたりなど、自分の中で勝手にイメージを膨らませた状態での出発だった。いざ行ってみると、気温はそれほど高くなく、日差しが強い日はあるものの乾季のため湿度が日本より低いおかげで、想像していた以上に過ごしやすかった。また、虫に対しても蚊が少なくハエが多かったことに驚いた。数日もすれば虫にも慣れ、ほとんど困らなくなった。交通に関しては、車よりもバイクが多く、また交通ルールの違いも多かったりなど、日本よりも危険な運転もよく見られた。その他にも驚いたこととして、各家庭や学校などの施設には現大統領と現副大統領の写真が飾ってあるところに愛国心を感じることもできた。

ブリンビンサリ村

バリ島の中心、デンパサール市から車で5時間

ほどのところにあるプリンビンサリ村に僕たちはホームステイやアスラマでの交流、ボランティアワークをするために訪れた。プリンビンサリ村はバリ島の中でも珍しいキリスト教の村で、バリの文化と融合したキリスト教の教会や儀式はとても綺麗で印象的だった。この村には教会のほかにもアスラマや小学校などがあり、うまく村の人と互いに支えあっていると思った。犬に吠えられたり追っかけられたりして怖かった時もあったが、それ以外は村の人たちも優しく売店などもあってとても暮らしやすく毎日を気持ちよく過ごすことが出来た。気づいたこととして、村の至る所にバリ・ヒンドゥー特有の「割れ門」があり、統一感がありとても良いと感じた。ほかにも家の窓の上に5センチぐらいのすき間があって風通しが良かったことや、家の庭に東屋の様なものがあり休憩ができたりと昔から受け継いできた知識や風習が生かされていると感じた。また、村には教会を中心に十字に伸びた街路があり、教会近くの交差点ではたくさんの人たちとすれ違うことが出来て面白いと思った。

アスラマの子どもたち

アスラマでの体験は、このIWCの活動の中で特に印象に残った体験だった。まず、初めて村に着いてアスラマへ行ったとき、子どもたちが自分たちを迎えてくれ挨拶をしてくれた時の感動は今までに感じたことのない感情だった。それは自然と涙が出そうになるような感覚で、普段の日本の環境ではなかなか味わえないものだった。その時はなぜこのような感覚になったのかあまりわからなかったのだが、アスラマの子たちと接していくうちにこの感覚は子どもたちの純粋な気持ちからくる笑顔のせいだと気づいた。

アスラマの子たちとは初めに遊んだ時からすぐに仲良くなり、交流会では自分たちのことをよく知ってもらいさらに仲を深めるきっかけとなった。仲良くなったものの全員の名前を覚えるのは大変で、初めのほうはメモしたり一緒に写真を撮ったりして覚えていった。その後も名前を呼んだ時の子どもの笑顔を見るのが嬉しくなってもっ

と覚えていくようになっていった。最後の日に互い別れを惜しんだ瞬間は、僕のかげがえのない大事な思い出となった。

交流会

このIWC33で僕たちはアスラマでの交流会や小学校、中学校、高校・大学のアスラマと計4回の交流会を行った。交流会では現地の人たちが披露してくれるほか、自分たちで歌、ダンス、じゃんけん列車、空手の演武などを行う場合と、各班に分かれて2人羽織・空手、紙皿リレー、フルートバスケット、折り紙などをする場合とがあったが、どちらもうまくいったと思った。これは自分たちが何度も話し合って作ってきた部分と、インドネシア学生によるインドネシア語での説明、そして何より聞く側の子どもたちの前向きな姿勢によってできたと思っている。特に空手の演武をしてそのあとに子どもたちに体験してもらう時の子どもたちの意欲には感心した。

私が交流会で特に感動した瞬間は、高校・大学のアスラマでのアスラマの人たちによる合唱で森山直太郎さんの「さくら」を歌ってくれた時だ。インドネシアの曲を歌ってくれるのかと思っていたのでその時は言葉に表せないぐらい嬉しかった。

ホームステイ

プリンビンサリ村でのホームステイでは、とにかく初めはコミュニケーションをとることが大変だったが、覚えてたのインドネシア語を使ったりすると喜んでくれるので、インドネシア語を覚えることに貪欲になることが出来た。他にも畑で土運びを手伝わせてもらってから庭で採れたヤシの実の食べ方を教えてもらったり、近くのビーチやダムにも連れていってもらい貴重な経験をさせてもらった。生活面で、基本的に困ることはなかったのだが、初めの数日はマンディに慣れるのが大変で、さらに水浴び用のホースもなく結構不便だったのだが、一週間がたったころにホースとシャワーヘッドを付けてくれてかなり生活しやすくなった。ここまでたくさんのことを私たちのた

めにしてくれてすごく感謝していたので、最後の離村式の時には、これまでの感謝を思う存分伝えることが出来て良かった。

ボランティアワーク

ボランティアワークでは石運びやブロック積み、インゲン豆から実を取り出す作業、ナスの苗植え、トウモロコシの種まき、ゴミ拾い、セメント運びなどをした。とても印象に残っている場面は、石運びやブロック積みなどのチームワークが大事な仕事の時にインドネシア語で励ましあったり応援しあったりするのが楽しかったことだ。例えば、Semangat! (頑張って!)、Hati Hati! (気を付けて!) などインドネシア語を覚えていきながらディアナブラ大学の学生のほか、現地の職人さんともコミュニケーションをとれていい雰囲気だったと思った。ゴミ拾いでは、アスラマの子どもたちに自分たちが暮らしている場所をきれいに保つ気持ちを身に着けてほしいという思いで行った。しかしゴミ拾いをしているとプラスチックゴミが多かったり、タバコの吸い殻が落ちてたりと、日本の自分たちが住んでいる場所の現状と似ていたのだ。確かに僕は、日本で率先してゴミ拾いをしているわけではなかったので、これからの自分の態度を見直すいい機会になったと思った。ナスの苗植えやトウモロコシの豆まきでは、みんなで手分けしながらきちんと育つのか不安もありながら作業していたが、アスラマでの最終日に畑を確認すると、立派な芽が出ていて不安が解けると同時に心が和んだ。また、小さい頃に庭の植物をいじるのが好きだった思い出が蘇ってきたので懐かしく思えた。

インドネシア料理

インドネシア料理は、定番のナシゴレンやミーゴレンなどのほかサテと呼ばれる肉の串焼きやフライドチキンに似たもの、さらに肉じゃがに似たものなど日本人なら馴染みやすい料理が多いと思った。味付けは濃いめが多く、そこに辛い調味料のサンバルをかけて食べることが多かった。食べ方は右手にスプーン、左手にフォークでスプー

ンにまとめてから口に運び食べる。初めは右手でフォークを持って食べるほうが楽でしたが、次第に右手でスプーンを持つほうが食べやすくなった。

文化探訪

IWC33では文化探訪としてタナロット寺院やヌサドゥアに行った。タナロット寺院は波の浸食で出来た場所にあり、潮の満ち引きによって景観が変わったり、遠くから見ても近くから見ても美しく神聖に感じた。お布施を納め米粒を額につけて祈祷してもらおうと拝観することができるというところが面白かった。ヌサドゥアにはプロテスタント、カトリック、ヒンドゥー、仏教、イスラムの五つの教会が一つの場所に集まっていた。インドネシアでは国の行政機関に宗教省があるように、とても宗教に寛容な国で、ここはその寛容さを目の前で感じ取れる素晴らしい場所だった。それぞれの教会が隣同士に並んでいる風景は不思議な感じがしたが、いつかどの国でもこんな風景を見ることができ不思議に感じないぐらい平和な世界を訪れたらいいなと思った。

ディアナブラ大学の学生

このIWCの活動の中で、インドネシアにいた期間生活を共にしてきたディアナブラ大学の学生とは二週間で作った仲とは思えないぐらいの深い友情が生まれたと思う。会う前にはここまで仲良くなれるなんて思っていなかったのだが、ワークを真剣に取り組んでいくうちに互いに大事な存在になりとてもいい関係になった。最後にディアナブラの学生と別れる時の瞬間はいつまでたっても忘れないだろう。またいつか必ず会いに行って、これからもずっと友達という関係を大事にしていきたい。

最後に Terima kasih

このIWC33での貴重な経験は多くの人たちが関わってくれたおかげでとても充実したものとなったので関わってくれた方々や応援してくれた方々への感謝の気持ちは大事にしていきたい。あ

とはこの経験をただの良い思い出で終わらせないで、これからの自分の進む道に役立てることが自分なりの恩返しになると思ったので、この先も多くのことに挑戦していきたい。

私の行動、考えの変化

経済学部 2年次生 原田 健斗



この国際ワークキャンプに参加してみて心からよかったと感じた。参加させていただけたことにより、プリンピンサリ村の為とか子どもたちの為といった誰かの為にと思って毎日過ごすことができたからである。私がこのように感じられたのも、私の力ではなく先生、家族、ホームステイ先の方々、アスラマの子どもたち、一緒に国際ワークキャンプに参加した仲間など、たくさんの周りからの支えがあったからである。

私は国際ワークキャンプに参加させていただけたことでインドネシアの生活と日本の普段の私の生活との大きな違いを実感することができた。私は大学での座学の東南アジアの講義を通して、東南アジアの国はどんな感じが分かった気持ちであった。しかし想像とは違うことばかりであった。まず日本だったらきれいなウォシュレットのあるトイレ、お湯がちゃんと出るお風呂、ハエも全く見ることがない。私の働いている飲食店では、売れ残ったまだまだ食べられる料理や食材を捨てる。この他にもきりがないほど違いを感じた。もちろん私が過ごしたインドネシアの生活ではこんなこ

とはあり得ない。その違いを体験して驚きと同時に、国際ワークキャンプに参加する前の自分の行動や考えが恥ずかしいと感じた。参加する前の自分の行動として、コンビニや自動販売機で買った水を飲みきれなくなったからといってゴミ箱に捨てたり、ご飯に虫がちょっとだけ止まっただけで、捨てていた。家事の手伝いもあまりしていなかった。しかし、プリンピンサリ村では水も食料も貴重である。私の日本の生活のように捨てることなどあり得ない。また、子どもたちは誰かが作業をしていると何も言わずに自分から手伝いをする。その手伝い一つにしても、大人の私たちでも見逃しそうな細かいことに気づいて、さらにそれを楽しそうにやってくれる。私ができていないことを子どもたちが当たり前にやっていて、本当に恥ずかしかった。参加する前の自分の考えとして日本人はどの国の外国人よりも気遣いや思いやりがあるとか、どの国の外国人よりも真面目であるなどの私の勝手なイメージを持っていた。私は大学に行くときに御堂筋線を使うのだが、その際に外国人の観光客の電車のマナーの悪さからこのように考えていた。しかし、国際ワークキャンプに参加し、現地の方々と関わることでそれはただの私の偏見であったのだと気づくことができた。私はプリンピンサリ村でマティウスというインドネシア人の学生と私を含め日本人の学生2人でホームステイをした。そのホームステイ先での私たちの部屋のベッドは驚くことに1つしかなかった。私はそれを目にした時、正直なところ絶望感に陥った。その夜、私はキャリーバッグの中身を整理していた為、学生3人の中で1番遅くに寝ることとなった。ベッドに入ろうとした際にマティウスが僕たちを気遣いベッドの端っこの狭いスペースで寝ていた。そのおかげで私は窮屈な思いをせずに寝ることができた。また、マンディ（水浴び）の際も日本人の私たちは慣れていなくて、時間がかかるのにも関わらず優先して入らせてくれた。アスラマの子どもたちは私が汗をかきながら作業をしていると、うちわであおいでくれたり、重たい荷物を持っていたら代わろうとしてくれた。アスラマに遊具を作りに来ていたオーストラリア人の男性

は僕の単語だけを並べた片言の英語にも嫌な顔ひとつせずと頑張って理解してくれようとしてくれた。そのような思いやりや気遣いを受けて私は自分の外国人に対するイメージがかわり、日本人だから思いやりや気遣いができるというような考えは絶対にしてはいけないと思った。

子どもたちと関わることでいろいろと学ぶことができた。学ぶことが出来たことは4つある。1つ目はワークの時間に子どもたちと学生と一緒にプリンビンサリ村のゴミ拾いをした時に、私はある10歳の男の子と一緒に作業をした。その男の子とはその時、話すのが初めてであった。男の子はその時初めて話した私に対して、自分からコミュニケーションをとったり、次に回る場所の指示とか、どこにゴミが多くあるのかとか、プリンビンサリ村の建物の説明もしてくれた。また、私のゴミ袋がいっぱいになって重たいので代わりに持とうとしてくれたり、溝は汚いからといって私に対して「入らなくていいよ」と声をかけてくれる気遣いをしてくれた。男の子からしてみると私はとても歳の離れた人に見えるはずであるのだが、自分から率先して歳が上の私に対してコミュニケーションをとったり、気遣いをする姿に私は感心した。私の場合、初対面で私より歳が上の人と関わる時に相手の気持ちを考えすぎて、自分からコミュニケーションをとったりすることをためらってしまう。その男の子が私に対してしてくれたことはとても勇気のいることであったのだと感じた。また私は彼から年齢や初対面かどうか関係なく、自分からもっと進んで行動することの大切さを学んだ。

2つ目は私はアスラマの掃除の時間にある小学四年の女の子と一緒にヤシの葉の葉脈を束ねて作られたほうきを使って落ち葉やゴミを拾っていた。その女の子は慣れた手つきで手際よくやっていた。しかし女の子はほうきから出たヤシの葉の葉脈の一本が出るたびに一回一回ヤシの葉の葉脈の束に直していた。先程まで手際よく作業をしていたが葉脈一本がでる度に束の中に直す女の子の姿から私は物を大切に扱う大切さを学ぶことができた。物を大切に扱うことが正しいことなど正直

誰でも知っていることだと思うが、私は出来ていない。なぜ私は物を大切に扱うことが出来ないのかというと自分のものでないからだとか、効率がかえって悪くなるとかというような考えがあるからだと思う。私は日本の忙しい生活の中からおのずと効率ばかりを考えてしまい、物を大切に扱うという当たり前の考えが出来なくなっていた。それを気づかせてくれた彼女の行動にとっても感謝する。

3つ目は私はアスラマを離れる前日にある女の子が私に対して手紙を渡そうとしてくれた。しかし彼女は恥ずかしかったからその日は手紙を渡すことが出来なかった。アスラマを離れる最終日に彼女は手紙を渡してくれた。私は彼女は内気な性格であるに関わる中で知っていた。それにもかかわらず、勇気を振り絞って手紙を渡してくれたという彼女の行動に感動した。彼女の行動から私は人にはそれぞれ個性があり、自分にとっては簡単なことであるが、ある人にとっては難しいこともあり、ただで難しいからといって逃げていては駄目だと学ぶことができた。私は普段自分に向いてないと思うと途中でやめようとすることがある。例えば、英語が話せるようにはなりたと思っていても、周りと比べて自分はセンスがないと感じて、勉強をしようとししない。私は彼女の行動から学んで、帰国してから毎日少しずつ私が苦手としている英語を勉強している。毎日やり続けることで時にはやりたくないと感じるときもあるが、あの時の彼女の行動を思い出すと「逃げていては駄目だ」と思い返すことが出来る。

最後の4つ目は子どもたちとの遊びの時間に男の子4人と女の子1人と私とでバレーボールをしていたときのことである。ある女の子はバレーボールがうまく思うようにできなくて落ち込んでいた。そして、遊びの時間が終わり私はボールを片付けたり、他で遊んでいる子どもたちに「遊びは終わり」と言いに行っていた時、先程私とバレーボールをして遊んでいた4人のうち1人の男の子が落ち込んでいた女の子に対してバレーボールを教えていた。その光景を見て私はいつもの自分を思い出した。私は普段、人が何かで悩んでいて本

当は手助けをしてあげるべきであるが誰かがやってくれると考えしまう時がよくある。しかし、1人の男の子は困っていた女の子に対して他の誰かに任せず、自主的に教えていた。普段の自分の態度が恥ずかしくなった。

最後に、私は年下で自分と文化も違い言葉もあまりうまく通じない中、身振り、手ぶりや表情で気持ちを伝えて子どもたちと遊んだり、話をしたり、一緒に行動することによって、私は相手が考えていることを読み解く力がついたと思う。私がそのように思うようになったのは言葉の分からない私に対して、一生懸命コミュニケーションをとろうとしてくれた子どもたちのおかげである。日本から離れてインドネシアに行き、たくさんの体験をすることで、日本の中では気づけなかった考え方や、普段私たちが当たり前に行っている当たり前ではない行動に気づくことが出来た。このことから、外国という外からの視点で日本を見ることが日本の中にいるときよりもよく日本が見えると感じた。そして、20年間生きてきた上で当たり前に行っていた行動や正しいと思っていた考えを今一度、見直してみるという考え方を国際ワークキャンプに参加させていただけたことにより発見することができた。参加する前はそのような考え方などしたこともなかった。参加していなかったら一生このような考えはしていなかったと思う。考える上で答えが見つからないということもあるが、やはりまず考えてみるということが大切なのではないかと思う。

たくさんの笑顔との出会い

社会学部社会福祉学科 1 年次生 長谷川 大陽



はじめに

私が第33回IWCへの参加を決めた理由は、これが大学生活での思い出となり、今後の人生の糧になるかもしれないといったようなものではなかった。志望校へ行けず、このままでは駄目だと思って何かへ取り組もうと思った矢先、第33回IWCのチラシを見て参加したというのが実際のところだった。

ブリンビンサリ村とホームステイ

関西国際空港を出発し、デンパサール空港に到着して、プリサロンホテルで一泊した後、車でおよそ4時間かけブリンビンサリ村に到着した。入村して最初に思ったことは「ハエが多い。」ということだったが、私が想像していた以上に村は整備されており、規模も小さいとは感じなかったため、驚くことも少ないのではないかと思った。ホームステイ先と2人又は3人組のグループを発表され、ホームステイ先へと車で送ってもらった。ホストファミリーに出迎えられ部屋へ入ってみると、驚いたことに、そこには1台のベッド、小型の扇風機と物置台しかなかった。続いて浴室を紹介され、便器の横にあるシャワーで便を処分しろという旨のことを、インドネシア語で伝えられたような気がした。これも普段の私の生活ではありえないことだったので、驚きを隠せなかった。

その晩、シャワー（便を処分するシャワーとは

別もの)をしたが、事前研修で伝えられていた通り水しか出なかった。この時に初めて湯が出るのが当たり前ではないのだと感じ、日本での普通の生活がなんと恵まれているのかと思わずにはいられなかった。ルームメイトがシャワーをしていた途中、頑丈でなかったシャワーのヘッドの部分が壊れてしまい、残りの10日間をホースのみで過ごすこととなってしまった。しかし、これには1日で慣れた。

翌日からのホームステイ先での生活は、鶏の鳴き声で起床し、ホストマザーからお茶とお菓子を頂いた後、アスラマ（ワークの拠点となる児童養護施設）へ出発するというものだった。ホームステイ中、一番大変だったのはアスラマまでの道のりで、片道15分ほどを毎日歩くことは苦痛だった。多い日には25,000歩以上歩いた。特に夜に帰宅するときは、道中にいる番犬たちに吠えられ、追いかけて恐怖を感じるなど良いことがまるでないように思えたが、長い道中には売店が多く、アイスなどを買って食べながら帰ったことや、村の人々と挨拶をしながら歩けたなど、悪いことばかりではなかった。

毎日の見送りと出迎えをしてくれ、洗濯もしてくれたホストファミリーの御好意には感謝をし、忘れてはならないと思った。

ワークについて

アスラマでのワークは、壁づくりのためのブロックなどのパケツリレー、農作業とごみ拾いの3種類だった。

パケツリレーは日本人学生、インドネシア人学生とアスラマの関係者などが1つの列を作り、インドネシア語でお互いを鼓舞したことで団結力を強めることができ、インドネシア人学生との距離もより近くなったのではないかなと思う。作業中、積まれたブロックの隙間からサソリが出てきてはじめは驚いたが、子どもたちが慣れた手つきでサソリを仕留めたのを目の当たりにして、サソリに慣れてしまい、気づくと自分もサソリを仕留めていた。

休憩のとき初めて冷えた飲み物をインドネシア

で飲み、あまりのおいしさに感動した。普段の生活では当たり前のことだったので、ここでも驚かされた。

農作業では、インゲンの苗を植える作業とトウモロコシの種を植える作業を行った。どちらも初めての体験で疲れたが、トウモロコシの種がピンクだったことや、日本人なら気になるような、畑の所々に落ちていたごみを気にしていなかったなど、異文化を肌で感じる事ができてうれしかった。

ごみ拾いでは、アスラマの遊び場や周辺道路のごみを子どもたちと共に拾った。アスラマ（プリンペンサリ村）には、お菓子を包装しているプラスチックごみなどが多くあった。そのため、毎日子どもたちは掃除をしていたが、掃除の仕方や、やる意味がよく理解できていないのか、アスラマのあちこちにごみが残っているようなことがしばしばあった。そこで、次のIWCからは掃除に関するプログラムを考えてもらい、子どもたちのごみに対する認識力を強めてほしいと思った。

ワークを原因とする大きなケガや病気がなかったことは、休憩をまめにとり、集中を切らせることがなかったからだと思う。そのため、休憩の指示をしてくれたワーク隊長には特に感謝している。

アスラマの子どもたち

アスラマに着くまでは、子どもたちと仲良くなれるかどうかを不安に感じていたが、アスラマに着くとその不安はすぐに消えた。子どもたちとはすれ違うたびにハイタッチをしたり、悪戯をしてくる子どもを追いかけてたりとすぐに仲良くなった。子どもたちはすぐに名前を教えてくれたが、難しい発音の名前が多くて覚えるのに苦労した。それでも名前を呼んだ時の子どもたちのうれしそうな顔を見ると、私もうれしくなりできるだけ多く覚えようと思った。子どもたちの中には、私の名前言いながら空を指して「たいよう」という子がいて、日本語を知っていることに驚いたのと、覚えられやすい名前なのではないかなと思った。

子どもたちと遊んでいるうちに、人見知りがち

な、小学校低学年のサンドゥルと一緒にいる時間が多くなった。彼は周りの子どもたちが遊んでいてもそばで見ているだけで、1人で静かに座っているだけのことが多かった。そのサンドゥルが近づいてきて名前を呼んでくれたときや、一緒に居て楽しそうに笑ってくれたときはうれしかった。離村のときに彼にインドネシア語で「また会いに来る」と伝えたら、笑顔で「ありがとう」と返してくれたことなど、私が彼にできたことは小さいことだったかもしれないが、お互いにとって良い思い出になったと思う。

仲の良くなった子どもの1人と話したときに、その子どもが去年のIWC参加者の名前を1人ずつ言っていき、「彼らは元気か」「彼らとは友達か」と聞いてきた。他にも、去年行っただと考えられるプログラムの内容を楽しそうに話してくれ、IWCが子どもたちの思い出に残り続ける本当に意味のあるプログラムだと感じ、参加できたことを非常にうれしく思った。自分の名前が、来年のIWCで子どもたちに話されることを願っている。

また、ワークで疲れて休憩したいと思う時でも、子どもたちが寄ってきて話しかけて来てくれると思わず笑顔になり、全力で遊んだ。それ故、子どもたちの生活を支えるためのボランティアで来ていたが、逆に子どもたちに支えられていると感じた。

交流会と学校訪問

私は交流係の1人として、交流会のプログラムの順番を事前にミーティングで決め、司会役を務めるなど初めての経験を多くさせてもらった。交流会は予想以上に時間が押してしまい、各プログラムの時間を削るなどの臨機応変な対応が求められたが、事前に作成したプログラムの内容を見直すことで、時間を超過することなく、すべてのプログラムを終わらせることができた。交流会では、通訳として司会を務めてくれたインドネシア学生の英語力、理解力、そして場を盛り立てる能力が非常に高いと感じた。すべてのプログラムが盛り上がりながら進んだと思うので、交流会は成功したと思う。

小学校訪問は4チームに分け、各チームで様々なプログラムを行った。これも各チームにインドネシア人学生が司会役として就いてくれたため、順調に進んだ。私のグループでは空手や二人羽織といった、日本人にとって馴染み深く、インドネシアの子どもたちに受けの良さそうなものを行った。実際にこの2つは大受けし、どちらも積極的に体験してくれた。

中学校訪問の際は、1つしかなかったクラスを2クラスに分けて、4チームを2チームにするなどの対応をし、小学校訪問のときと同じように行った。結果的には成功させることができたのではないと思う。

交流会と学校訪問では、英語でミーティングを行ったことや、今までに知ることがなかった自分を知ることができたので非常に良い体験、思い出になった。

そのほかのプログラム

IWCでは様々な体験をさせてもらったが、日曜礼拝に参加できたことと日本食パーティを行えたこともまた、強く印象に残っている。

日曜礼拝は、プリンビンサリ教会で行われた。教会の中に入ると、天井が高く、壁がなく風通しの良い建物だったので、年間を通して気温の高いバリの気候に合った建物だと思った。これまでに礼拝へ行っただことがなく、少し堅苦しい印象を持っていたが、礼拝が始まると皆で歌ったり、貴重な話を聞いているときに爆笑したりと印象とは随分違った。礼拝の終盤に「島人ぬ宝」を大勢の参列者の前で披露したが、快く聞いてくれた。中にはスマートフォンで動画を撮ってくれていた参列者もいて、うれしかった。また、礼拝の終わりに周囲の人たちと握手をして「Happy Sunday!」と言いつつのも、プリンビンサリ村ならではの文化なのではないかと思った。

日本食パーティでは、プリンビンサリ村の人たちに人気のあるカレー、焼き肉とミーゴレンを振る舞った。私の役割は肉を切ることであった。これまでに見たことのないような量の肉を見て驚いたが、黙々と切り続けた。バーベキューのときは、

アスラマの関係者の方たちと協力して焼いた。暑がっていると、子どもたちがうちわで扇いでくれたのでうれしかった。

まとめ

私にとって第33回IWCで過ごした2週間は、毎日が驚きばかりで新鮮だった。日本での普段の生活では体験することができないであろう、鶏の鳴き声で目を覚まし、番犬たちに追いかけられ包囲されるといった異文化体験。自由時間中、インドネシア学生と日本の歌やインドネシアの手遊びを教えあったといった異文化交流。

IWCでの体験を振り返ったとき、最初に思い出すのが2週間の中で出会った人たちの温かさである。すれ違うたびに笑顔で挨拶してくれた村の人たち、ワーク中に笑顔で協力してくれたアスラマの方々、朝早くに笑顔で見送ってくれ、夜遅くに笑顔で出迎えてくれたホストファミリー、そして、笑顔で側にきてくれ、涙を流して別れを惜しんでくれたアスラマの子どもたち。彼らは皆、全く違った場所からやってきた私たちのことを温かく歓迎してくれた。これは、これまでの先輩方がプリンビンサリ村の人々に信頼され続けた賜物なので、大切にしなければならぬ。私たちにとっては1回きりのIWCだが、彼らにとっては毎年のことなのである。

IWCに参加しないと得られなかった出会いが多くあり、自分の生活、将来に対して深く考えるきっかけにもなった。今回の体験を素晴らしい思い出だけに留めることなく、次の一歩につなげることが私の使命だと感じた。プリンビンサリ村で出会った人々のことは決して、忘れない。

IWCで感じたこと

国際教養学部 2年次生 大川 芽衣



出発まで

筆記テスト、面接を経て合格を手にした16人のメンバーと初めて顔合わせをした日を皮切りにインドネシア出発までの事前研修がスタートした。初めは友達もいなくて、話せそうな人もおらず、「あ〜こんな関係でインドネシア行って大丈夫かな。でも、1人で行って1人で何か学んで帰ってくればいいか」なんて思っていた。事前研修では学校のお昼休み6月1日、8月5日6日7日で行った合宿でインドネシア語、宗教、文化、生活、感染病などインドネシアについての知識を身につけた。しかし、6月1日に行った研修は特殊で授業ではなく「チームを1つにする」というのがテーマで様々なグループワークを通してメンバーと打ち解けていった。

インドネシア到着

8月21日関空の4階中央コンコースに同じユニフォームを着て集合しインドネシアへ出発した。1日目はホテルに宿泊してそこでインドネシア人学生の6人と合流した。初めて夜ご飯を一緒に食べた時は緊張して、しかも英語でしか会話が出来ないため自分の言いたいことを言えなく悔しい想いをしたことを覚えている。その日の夜ミーティングで宮チャプ「ホームステイする時インドネシア人学生とペアになりたい人は挙手して」と言った時、私は自然に手を挙げていた。理由は恐らく

16万円も払ったんだし、日本人なんていつでも話せるからせっぴくならインドネシア人学生にした方が価値あるだろうといったものであろう。

2日目は日本領事館に訪問して千葉総領事による講義を聞いてから、約3時間かけてバスで移動しプリンピンサリ村へ到着した。移動している時はインドネシアに交通ルールはあるのか？と思わせる程運転が危険だった。プリンピンサリ村にはアスラマと呼ばれる児童養護施設があり、8月22日～9月1日までの主な活動場所でもあった。そこから徒歩5分ほどでホームステイ先があり、ペアのインドネシア人学生と私を受け入れてくれた御家族の元に行った。私が日本で最も不安に感じていたのは生活面である。だから、このホームステイ先の環境がこの14日間の私のテンションを左右すると感じていた。部屋にはダブルベッド、大きな鏡、窓、コンセントがあった。次にトイレである。これは出来る限りの最悪の条件を想像してから日本を出発したのにも関わらず、その最悪を超えていた。水洗トイレではなく横にある大きな水槽に貯めた水を汲み、便器に水を足して流すというやり方である。その部屋にはシャワーのようなものが付いており、そのシャワーでお風呂に入るのだから出るのがお湯でもなく、ぬるま湯でもなく、水である。その隣にある小さなベビーバスを使い、手洗いで服を洗い、トイレと同じ空間で歯を磨くという生活が始まった。

3日目からはボランティアワークが始まり、現地の職人の方と協力しながら塀を作っていた。その塀作り自体はセメント運んだり、ブロックや石をバケツリレー方式で運んだり、そのワークの最中に日本語とインドネシア語の勉強をしながら作っていたので時間は早く過ぎた。

アスラマの子どもたち

日本にいる時からこのアスラマのことを聞いていたのである程度どんな場所か想像出来たし、児童養護施設という事で親がいなくて、心が不安定な子どもたちが沢山いるんだろうなと勝手に思っていた。実際地元の児童養護施設にいる子どもたちはとても荒れている。しかし、アスラマの子ど

もたちは凄く積極的に我々日本人学生とインドネシア人学生に話しかけてきてくれて、名前を覚えようとしてくれた。実は私は子どもはすぐ泣くしワガママだし可愛げが無いという理由からあまり好きではない。でも、アスラマの子どもたちは凄く接しやすく言葉の壁があってもお互いコミュニケーションがとれてるような気がして、子どもたちと過ごす時間がIWCの中で1番楽しかったと思う。むしろだんだん子どもたちに情が湧いてきて可愛いと思うようになったし、写真も子どもたちとのものが1番多い。日本にいる時特に私は悲しいという感情が無いというか表に出さなかったが、ふと子どもたちとお別れの日を思うと感じたことの無い悲しさを感じた。お別れの日が近づくに連れて私はもっと沢山子どもたちとの思い出を残したいと思うようになり、たくさんの写真を撮った。子どもたちも写真に積極的に写ってくれて嬉しかった。特に仲良くなった子どもたちから手紙やうさぎ、女の子の人形、モンスターズインクのぬいぐるみ、髪飾りを貰って、私も何かお返ししたいと思って手紙を返したりしてお互い言うのはThank you とかTerima kasihなど簡単な感謝の気持ちを伝える言葉であったが、どの子どもも絶対に笑顔になってくれたので本当に嬉しかった。私は人前で泣くのが苦手な我慢したり、素直に涙が出なかったりしたが、お別れの前日やお別れの日子どもたちが泣きながらハグしてくれたりした時、最初は泣きたくなく我慢してたが、もらい泣きしてしまった。私が人前で泣いたのは本当に覚えてないくらい前で、このIWCに参加して感情が豊かになったとミーティングで報告したがそれは子どもたちのおかげであると考えてる。

インドネシア人メンバーについて

私はホームステイ先のペアにインドネシア人学生を希望し、10日間インドネシア人学生と生活を共にすることになった。最初はお互い緊張していたが言葉は交わすけどそんなに多くを語らない感じであったが、だんだん打ち解けていくうちに英語であるが何とか伝えたいと思い、頑張って会話をした。その女子学生はデウィさんという人でと

でも積極的に日本語を学ぼうとしていた。例えば、朝私に「〇〇は日本語でなんて言うの？」って聞いてきて、それを直ぐにを使ってアウトプットしていた。インドネシア人学生6人とも凄く接しやすくって優しいし、いい人たちだなんて思っていた。事前研修でインドネシア人は時間にルーズという話を聞いていたが、本当にそう感じる事がいくつかあった。例えば、夜の11時なのに友達のアジア人学生のホームステイ先に行っていたり、他の日は夜帰ってこなかったり、朝風呂が長かったり、時間を守りたい私にとってはそれが凄くストレスであった。しかし、早めにアラームをセットしたり、夜道電灯も薄暗くすぐく吠えてくる犬がたくさんいる中1人で帰るのに慣れてくるとそんな生活が普通になってきて、夜1人で寝るのもむしろ広いベッドを1人で使えるからラッキーなどと思っていた。IWC最終日ショッピングモールで買い物をした後その出口で手紙交換をしてお別れ会をした時私はデウィさんに感謝の気持ちをつづった手紙を渡した。その時デウィさんがハグしてくれたので思わず涙が出て来て、2週間しか一緒にいなかったのにまるで昔からの友達であったかのように思えて、あんなにストレスを感じたり途中でインドネシア人学生とペアになったことを後悔した事もあったけど、この時は心底デウィさんがペアで良かったなと思った。デンパサール空港で本当の最後の別れの時、みんな別れを惜しむようにハグしたり写真を撮ったり何かを伝えたりしていた。この14日間で彼らと出会えて沢山学ぶことがあったし、こちらも日本語を教えたり文化を教えたりして、これが異文化交流なんだろうと思い本当に感謝しかない。

日本人メンバーについて

初めの方の事前研修では「おはよう」としか会話が無く、学校ですれ違っても気づいてない振りをしたり、気付いても「あっ…」みたいな感じであったが、いざインドネシアに行って全員でワークとか他の活動をしていると素の自分で話せたり、一緒にいて楽しいと思うようになっていった。私は1年生の頃に仲良くしてた友達と価値観

が合わず、途中で1人で行動するようになり自然に友達ではなくなっていったり、2年生になってからの友達も1人しかいない。それは別に私にとっては苦ではなかったが、今回のIWCに参加した日本人メンバーとはずっと友達でいたいと思える仲間である。このメンバーだからワークも交流会も日本食パーティーも成功したし、毎日充実していたんだろうなと思う。

最後に

私はこのIWCに参加した事でたくさんの事を学び体験した。例えば、ホームステイ先のシャワーが水で服は手洗いでトイレも水洗ではない事。子どもたちと関わることで感情が豊かになった事。この体験と学びは私を大きく成長させ、日本がいかに恵まれているかを改めて知れた。これからこの体験を残りの学校生活や就職活動また人生に役立てていきたい。本当に参加して良かったと思える2週間であった。

33期の仲間と新しい出会い

国際教養学部 2年次生 中村 彩美



2019年8月21日から9月3日までの2週間、第33回インドネシアワークキャンプが行われた。日本人学生16名、ディナブラ大学のインドネシア人学生6名で行われた。私たちはみな、自らの意思で、それぞれが何らかの目的や目標を持ってこのプログラムに参加した。IWCに参加しようと

一歩踏み出したみんなは、私の誇りである。1年生はまだ入学してすぐにもかかわらず、勇気を出して参加したのだ。みんながみんなできることではない。1人1人の勇気が集まったこのメンバーだからこそ素晴らしい2週間の体験になったのだ。

IWCでの2週間で得られたものはたくさんあった。その中で何が特によかったかを聞かれれば、私は「みんなに会えたこと」だと答える。IWCというプログラムは毎年桃山学院大学で行われているプログラムであり、毎年違うメンバーである。少しタイミングが違えばこの「出会い」はなかった。第33回のIWCに参加したからこそこの出会いは、私にとって本当に大切なものになった。

私が大学に進学した理由に、ボランティアをしてみたい、異文化体験をしてみたいということがあった。私は国際教養学部で、第二言語が必修であり、インドネシア語を選択した。しかし、インドネシア語を専攻している学生は比較的少なく、なぜインドネシア語を専攻したのかと必ず聞かれる。私は入学当初からこのプログラムを知り、私の目的であるボランティアも、異文化体験もできるのではないかと考えた。私は特にやりたい言語もなく、このプログラムに参加したいという理由でインドネシア語を選択したのだ。私はこの選択をしたことを本当に良かったと考える。大学でインドネシア語を約1年半学んでいたが、私はまだ1度もインドネシアに行ったことがなかった。学んではいたが、実際にインドネシアの方と話したことがなかったのだ。私はインドネシアに行って、インドネシア人学生との交流やホームステイが少し不安であった。英語が得意という訳ではないし、インドネシア語が聞き取れるのか、話せるのかも不安で少し怖かった。しかし、不安に感じる必要は全くなかった。やはり実際のインドネシア人同士の会話は全然聞き取れないし、わからないこともたくさんあった。だが、仲良くなりたい一心でインドネシア語で頑張って話しかけると、インドネシア人学生たちはわかりやすい単語を使ってゆっくり私に伝えようとしてくれて、私も意味を理解することがあった。初めてインドネシア語を使い、そして理解できた時や、伝わった時の喜

びはとても大きかった。インドネシア人学生がほめてくれたり、みんなになんとかでも意味を訳してあげたりできたのは本当にうれしかった。私とちなつ以外はインドネシア語を学んだことはなく、事前研修で習ったくらいであった。しかし本当に驚いたのが、帰るころにはみんなインドネシア語が少し喋れるようになっていたことや、理解できるようになっていたことである。日本で授業を受けて勉強しているのと、現地でインドネシア語に触れながら勉強するのとでこんなにも差があるのかと身に染みて感じた。みんなのすさまじい成長は、新しい仲間や、ホストファミリーと仲良くなりたい一心でのものであると考える。話せたら便利だから、必要になってくるだろうからなどの理由で勉強に打ち込むのは難しい。しかし、大切な人たちと話したい、もっと伝えたいし理解したいと思うみんなの気持ちと努力は素晴らしいものであった。そして私はインドネシア語をもっと勉強したいと思った。私がお世話になったホストファミリーのお母さんは、英語もそれほどわからなくて今回はあまり話すことができなかった。お姉ちゃんが英語を話すことができ、お母さんとお姉ちゃんに訳してもらいながら少しは話せたが、次に行くときは面と向かってもっと話がしたいと感じた。言語の壁は気持ちやジェスチャーでカバーできるが、言語の壁を少しずつでも壊していきたいと強く感じた。

次はワークである。今回のワークでは、昨年に引き続き壁を築き、農作業も少しした。壁は私たち学生がブロックや石、セメントをバケツリレー方式で運んで現地の職人さんが壁を作っていくってくれる。このワークはとても簡単な仕事である。しかし、ブロックや石が重く、日差しもあり、自分が思っているよりも体が疲れていることが多かった。最初はみんなおそろいのつなぎに気持ちも高まり、疲れも見られなかった。しかし毎日やっていくとやはり疲れがたまっていき、みんなの行動がおそくなることや、集中力の薄れがみられるようになり、ワーク隊長の話聞いていない人が出てくるなど、空気が悪くなることもあった。その反面、みんながお互いに頑張ろうなどの声を掛

け合ったり、森田先生が流してくださったJKT48の曲をみんなで歌ったりしながらお互いに気持ちを盛り上げて楽しんで頑張ることができた。石を運ぶ際に、インドネシア語をインドネシア人学生に教えてもらって、私たちが日本語を教えて、「軽い」「重い」などをお互いの言語で言い合って勉強しながら取り組むこともした。そして、アスラムの子どもたちも学校がお休みの日は私たちのワークをとともに手伝ってくれた。私たちは子どもたちが大好きで、共にワークをすることでとても励みになった。もし施設の人に手伝ってきてあげてと言われても、めんどろうだと感じる子もいるだろう。それにもかかわらず、いやな顔せず手伝ってくれたことに、私たちはとても心が温くなったのだ。そして、私たちが何不自由なくワークに取り組むことができたのは、それを準備してくれた人があるからである。職人さんは、私たちがワークをしていない時間も、私たちが知らない時も、多くの仕事をしてくださった。本当に感謝でいっぱいであった。私たちは私たちに職人さんに関わりたくてみんなが思い、覚えてたのインドネシア語で声をかけた。私たちの気持ちが伝わったのか、話しかけてくれる職人さんもでき、壁が完成した際には職人さんも含めてみんなで写真を撮った。これは私たちが初めてだと聞いた。今回のワークは関りを大事にし、みんなで作り上げた壁である。

私がこのプログラムで特に大切な時間だと感じたのが、1日の終わりに全員でする振り返りの時間である。これは、ボランティア活動日誌に1日の出来事を書き、それぞれが感じたことや考えたこと、明日への改善点など様々なことを書き、それを5人ほどで集まり話し合い、最後に全員と共有するという時間である。私は以前国際センターのBSPというプログラムに参加した。その際も毎日振り返りや学んだことを記入し提出していたが、自分の感じたことを書いたに過ぎなかった。しかしこのプログラムの振り返りは、お互いに感じたことを全員と共有する時間がある。プログラムの体験内容が違うため、話の趣旨が違うということもあるが、私はこの振り返りでより学べたこ

とが多かった。今までの経験も、考え方も感じ方も違う仲間たちと、同じスケジュールで同じことをしているにも関わらず、それぞれ違った見方をし、違った意見が出てくる。特に私が印象に残っていることが2つある。

1つ目は、インドネシアだからこう、日本だからこうと決めつけないことが大切ということである。アスラムでゴミ拾いをしている際に、子どもたちが毎日掃除をしているにも関わらずゴミが多いことに気づいた。プリンビンサリ村でもたばこのゴミが目立った。これはよくないし、改善すべきだと話に上がったが、日本はここよりも本当にきれいか、日本にこの問題はないのかと聞かれば日本の都会のほうが十分汚いのだ。私たちはこのことで、ただこの村のここがよくない、インドネシアのここがよくないとそれだけで終わらせるのではなく、日本でもインドネシアでも、これできていないところはあるからお互いが直すべきだというように考えるべきなのだと気づくことができた。全員でゴミ拾いをし、考え話し合ったから気づくことができたのだ。2つ目は、子どもたちが強いということである。私たちが行ったアスラムは、日本の児童養護施設のような場所である。子どもたちが施設で暮らしている理由の多くは貧困が原因で、家族もいて、兄弟もいるが、家にお金がないため十分な食事や物を与えてもらうことができずアスラムで暮らしている。周りから見れば、可哀想などと考えるだろう。しかし子どもたちは私たちが想像する以上に強い心を持っていた。確かに私たちにずっとくっつき、かまってくれてちょっかいをかけてくるなど、両親と暮らしていない分寂しい気持ちは持っているかもしれない。しかし、子どもたちは毎日を一生懸命過ごしている。恵まれた生活ができて私たちより何倍も頑張っていた。子どもたちとお別れの時も子どもたちは「泣かないで、またすぐに会える」と泣いている私たちに言った。私たちは我慢できずに泣いてしまっている中、また会えると信じて慰めてくれる子どもたちを見習わなければならなかったと感じた。私たちは毎日のミーティングでここでは書ききれないほどの学びを得たのだ。

私たちは2週間インドネシアで過ごし、ココナッツを目の前で取ってもらい食べたことや、ものすごい数のハエと過ごすことや、毎晩番犬に吠えられるなど日本ではできない経験を多くした。小学校や中学校を訪問し、インドネシア人学生と授業をするなど日本でもしたことのない経験をした。そしてこれからもお互いを高めあっていくことのできる仲間ができ、インドネシアに大切な人、家族のような存在、大切な友達ができた。私はこの2週間が毎日とても濃い時間で、もう1か月ほどいるように感じていた。インドネシア人学生の人たちとは元から仲のいい友達だったかのように、ホストファミリーは第2の家族のようで、お別れがないようにまで感じたほどであった。そんな濃い時間は私にとってとても大切な時間であり、思い出になった。この2週間で経験したこと、新しく生まれた考え方などを大切に、これからは生かしていく。

インドネシアの文化および生活について～私が感じたインドネシア～

社会学部 2年次生 海津 龍馬



日本とバリのアスラムの違い

ワークキャンプに参加して沢山の色々な体験をした。日本にいたらできないような体験ばかりで、一日一日が新鮮なものだった。その中でも特に印象深かったのが、アスラム（児童養護施設）での生活である。アスラムでの生活は10日間というと

ても短い時間だった。しかし、私にとって素晴らしい一時となった。

初めてアスラムについたときの印象はとにかく広いという事である。日本の児童養護施設でも広いところは広いが、最近では小規模化がされているため、減多にみることはない。そのことを差し引いても、日本の施設よりも大きいと思った。男女で宿舎が分かれており、一部屋に平均5～6程度のベッドと、各一人に一個のクローゼットがあり狭いという印象はなかった。部屋に比べると遊び場が広いと感じた。遊び場はバスケットコート4個程度入る広さで、子どもたちはそれぞれの遊びを楽しんでいた。バスケットボールやバレーボール、サッカーにバトミントン、中には木登りをする子や、手遊び（日本でいうアルプス一万尺）をしている子もいた。みんな各々に自由時間を過ごしていて、運動はしているものの、本当にリラックス、楽しんでいる様であった。私自身そんなに体を動かすのは得意な方ではないし、体力も無いに等しいですが、子どもたちの笑顔や、ジェスチャーを見ると自然と元気も出てきましたし、私もまるで子どもに戻ったように無邪気に楽しむことができた。

私たちが主な活動をしたアスラムは5歳から12・13歳程度の子どもたちが生活している場所で、小学生を中心に構成されていた。中学生・高校生になると別のアスラムへ移動になるそうだ。生活の拠点も学年が上がるにつれて変わっていく。小学生は自然の中でのびのびと育つように地方にアスラムが設立されており、中学生になると町の生活に少しずつ慣れていくように郊外へ。高校生・大学生になると市内のアスラムに移動になるようである。アスラムに来るほとんどの子どもたちは貧困が原因だという事だ。バリ島の北部やジャワ島は岩石地が広がっており、植物が育ちにくい環境にある。なのでそこに住む50%の人々が貧しい状況にあり、子どもにまともな食事を食べさせてあげられないからと、施設に預けるそうだ。この状況を聞き、日本とは入所の理由が大きく異なっていると感じた。日本の児童養護施設に入所するほとんどのケースはDV、ネグレクト、性的暴行

などが挙げられる。ほとんどのケースが親が悪いというものだ。対してバリのアスラマは親や子どもに非があるというわけではなく、環境が大きく影響していることがわかる。こうしてみると豊かで物があふれている日本よりもまだまだ開発途上のバリのほうが豊かのように感じる。アスラマを運営するための資金の面も気になったので施設長に直接聞いた。すると、資金は企業やNPO、国やアスラマを卒園したOB・OGから支援があるそうだ。また、施設で働いている職員も子どもたちのためにいろいろな支援を行っていた。子どもたちや施設管理の書類手続きを行う事務スタッフ、野菜や施設内の動植物の管理を行う農業スタッフ、採れた野菜を調理する調理スタッフ、子どもたちに生活の基礎やマナー・ルールを教える指導スタッフ、沢山の支えや支援があり運営されていることがわかった。

プリンピンサリの環境と改善策

アスラマのあるプリンピンサリ村はとても穏やかなところで観光村のひとつになっているようだ。村の入り口には大きな門（アーチ）があり、装飾が施されており、ここから先がキリスト教の村なのだという事を少し感じた。また、村の道は十字架を意識して作られており、直線か右か左に曲がるだけと交通面でも整備されており、道に目立つようなごみは落ちていなかった。しかし、溝に降りてみるとたまっているごみもあったので、表面だけで判断するのではなく、きちんと向き合ってから判断することが大切だと感じた。村には教会立の小学校が1校と売店が2、3店舗、そして教会があるだけだ。教会はキリスト教らしさがありつつも、バリの文化や様式を折衷して作られており、天井は高く天窓から太陽の光が差し込みとても幻想的だった。また、壁が一切設置されておらず柱のみのつくりとなっているので風通しもよく、居心地がよかった。神聖でありながらもどこか心が落ち着くような場所だった。そこでは私たち日本人は「島人ぬ宝」を歌った。現地の人のもちろんだが、その時はパプアからのお客さんもおり、最後に盛大な拍手をもらった。良い経験

ができたと感じた。

その他にも様々な体験をワークキャンプ中にはしたが、私の中で思い入れ深かったのが、エバリエーションのためのミーティングだ。私たちは10日間プリンピンサリ村のアスラマでホームステイをさせていただいた。その生活の中で最高だった経験や、初めて経験することで戸惑ったこともあった。その中でも特に改善すべき点を日本人学生16人とインドネシア人学生6人の計22人で考えたことがとても思い出深かった。私たちはまず初めにプリンピンサリ村（以下アスラマも含む）のいいところを挙げていった。何個か同じものは出たものの、大抵の項目が同じだったのでみんな考えていること、感じていることは同じなのだと改めて認識できたのはよかった。反対に改善すべき点は同じ系統のものが出たにせよ、少しずつ違っていたりと各それぞれが改善すべき点が異なっていることがわかった。改善点で全員の意見が一致したのは、食堂の調理場のハエが多いという事である。しかし話し合いの最中には金網をつけるから余計にハエが目立つのではないのか？といった意見もあったので、日本人間でも価値観の違いがあることを再認識した。

価値観・文化の違いというのは本当に理解するのが大変だなと感じた。エバリエーションのためのミーティングの最中にも「ほんとにそれは改善すべきことなのか？」と疑問の声も上がったからだ。日本人や外部の人からしたら改善すべき点はいくつもあるかもしれないだろう。しかし、現地の人からしたらそれが「当たり前」なのだ。そんな当たり前を外部の人たちが改善すべきだ!!ということはほんとに正しいことなのか私自身もわからない。その考えは今もそうだ。外部の人間が改善すべきだというのではなく、施設内（現地）で働いている人に聞くことが本当の支援なのではないかと思うからだ。自分の意見を発信していく事が重要なことだと理解したうえで、次は相手が言っていることを理解することが重要だと感じた。相手の価値観や文化を理解することで自然と受け入れることができるようになると思う。そういったことをエバリエーションのためのミーティ

ングで私は感じた。

「学んだこと」と「これから」

インドネシアへ訪れて、またIWCの学生と毎晩ミーティングをしていった中で私が一番大切にしたいと思った言葉があった。「疲れても休まないのが日本人。疲れたら休むのがインドネシア人」という言葉だ。まさにその通りだと感じた。日本人は疲れていたとしても仕事があったら自分が無理してでも働く。体が限界に達したら最後は心が限界に達して崩壊してしまう。インドネシア人は疲れたら疲れたとって休む。一見さぼっているように見えるかもしれないが、とても大事なことで気づかされた。体が疲れていたら回復するまで休憩してまた働く。心が疲れることは無いのだ。この言葉で、自分の気持ちに正直になることが大切だと学んだ。バリの地でこの言葉を聞いてから気持ちが楽になり、これまでいろいろなことに追われていて、心に余裕がなかったが、余裕もできたし、多少の事では物怖じしなくなった。これが私の一番大切にしたい言葉である。

最後に、アスラマを訪問し子どもたちと沢山の時間触れ合って、改めて自分の今の生活が豊かであるという事を感じた。水道をひねれば飲める水が出てくること、お風呂に入れば温かいお湯が出てくること、日本にいたらわからなかった・知らなかった経験をたくさんすることができた。これで終わるのではなく、私は次のステップとして私自身に今何ができるのかを考えていこうと思っている。勉強に恵まれている環境だからこそ、一生懸命頑張ることはもちろん、その他にも学校外でのボランティア活動も積極的に参加していきたいと思った。自分にできることは少ないかもしれないし、バリにいる子どもたちにとったら関係のないことかもしれないが、今自分にできることを精一杯頑張っていく事がアスラマにいる子どもたちの励みや力になるものだと考えている。

IWCの体験について

国際教養学部 2年次生 佐々木 琢弥



インドネシア初日、ホテルまでのバス移動で急ブレーキの回数に驚き、外を見てみると交通量が多いにも関わらず車間距離がほとんどない。そこをすり抜けていくバイクの量や車線、センターラインがあまり機能していない道を目の当たりにし、インドネシアに来ていることを改めて実感したとともに2週間事故なく無事に帰れるのかが不安になった。

ホテルでは、ディアナ・プラ大学の学生6人と食事をした。そこではお互い話したい気持ちはあるが、言語の違いで思うように話せない。しかし、全員があきらめずにジェスチャーなどで少しでも話そうとしていていい刺激になった。

二日目のバス移動の時、外を眺めていると家の前に花の乗ったお皿が置いてあるのが見えた。その花は、「canang」というバリ・ヒンドゥー教のお供え物である。チャナンは、地面より高いところに置いてあるのが善の神への捧げ物で、地面に置いてあるのが悪の神への捧げ物である。善の神だけではなく悪の神にも捧げ物があるのはバリ・ヒンドゥー教の善と悪が共存しているという考え方だと知り、宗教について興味を持った。

少し進むと建物が減り、ココナッツなどの木や畑が増え、一気に自然豊かな環境になった。

ブリンビンサリ村に着くと、アスラマの子どもたちがインドネシア語だけではなく、英語を使ったり、ジェスチャーを使ったりして積極的に話そ

うとしてくれて嬉しかった。自分から積極的に動くことは、相手もうれしいし、自分にとってもいいことがたくさんあるということに気づいたので、日本に帰ってからの生活で積極的に行動しようと思うようになった。

ホームステイ先の両親はとても歓迎してくれ、カカオの実、コーヒー豆を作っているところなど見せてもらいすごくいい経験になった。お父さんが、日本語で挨拶をしてくれて一気に緊張がとけたが、もっとインドネシア語を勉強しておけばよかったと後悔した。ホームステイ先のメンバーは、インドネシアの学生のエリックとなり、お互いの言語を教えあったりして、たくさん交流して文化なども知ることができて、すごく良い経験になった。

ブリンビンサリ村での初めての夜、たくさんさんの発見があった。まず、街灯が少ないので星がきれいに見えプラネタリウムに来ているように思うほどの星の数だった。次に、家までの道で、昼間はおとなしかった番犬たちが夜になると活発になり、足元まで吠えながら走ってきて、すぐに囲まれ、獣のにおいや威圧感などで威嚇をしてきた。ただ、犬の目を見ずに堂々と歩いていけば、襲われることはない聞いていたので、なんとかそれを実行し乗り越えることができた。この日、初めて番犬の本当の意味を知った。最後に、シャワーは水しか出ないということを聞いていたが、浴びてみると思っていたよりもはるかに冷たくて、日本のお風呂屋さんの水風呂ぐらいの冷たさだった。蛇口をひねればお湯が出るのが当たり前の日本がどれだけ快適な生活か改めて感じた。

ブリンビンサリ村は鶏が多くいて毎朝鶏の鳴き声で起こされる。また、トッケイというヤモリの声でも起こされる。朝は眠たいのでシャワーを浴びるとお湯が出ないことを忘れ、水を被り心臓が止まりそうになる。

三日目は、初めてのワークでアスラマの壁づくりのための石運びだった。だんだんと壁ができていくのを見ると嬉しくなりもっと役に立ちたいと感じた。壁は、大きさの異なった石にセメントを流し固めて土台を作っていた。現地の職人さんは、サンダルや裸足で作業していたのでセメント

がついているなど危ないと感じた。この日のワークは午前だけで午後からはアスラマツアーがあった。アスラマでは、マンゴーやココナッツなど果物やトウモロコシなどの食材を植え、鶏や豚まで飼っていて、食料の足しになることと植物や生き物について身近に学ぶことができる環境で良いと思った。動物や植物がたくさんあるところは、日本ではなかなかないので自然について学ぶことは大事だと感じた。

ツアーの後には自由時間があり、アスラマの子どもたちとボールなども使って遊んだ。言葉は通じなくてもお互い楽しめたのでスポーツは一つの交流のきっかけになる大事なものだと思った。言葉を使わなくても通じ合える一番簡単なものと感じた。子どもたちは、バレーボール、サッカー、キャッチボールなど上手で私のミスが目立っていた。バスケも上手だったがルールがバラバラで合わせるのが難しかった。また、メンバーの子が子どもたちの名前を覚えて仲良くなっていたので、私は名前を覚えるのが苦手だが、次の日は一人でも多くの名前を覚えようと思った。この日も犬の威嚇とシャワーに苦しんだ。

四日目は、午前中はワークで三日目と同じ内容だったが、この日は土曜日だったのでアスラマの子たちも手伝ってくれて、交流して楽しみながらワークをした。午後は、夜にある交流会の準備でダンスや歌の確認や司会で話す内容をインドネシアの学生に通訳してもらうための打ち合わせなどをして、どうしたら伝わりやすいかみんなで考えた。交流会では、アスラマの子どもたちによるダンスやインドネシアの学生によるダンスの発表があった。ダンスはインドネシアの伝統的なダンスは指先まで細やかに動かしていてとてもきれいだった。子どもたちみんなが手拍子や掛け声などしてすごく盛り上がっていた。私たちのダンスの時もわからなくてもノリノリで踊りやすかった。見ている側の反応一つでとてもしにくくなったり、しやすかったりするということを実感し、ただ見ているのではなく一緒に雰囲気を作ることなどしてみようと感じた。

五日目は、日曜礼拝に参加した。礼拝はずっと

祈って堅苦しいものだと思っていたが、参加してみると祈る場面もあるが、歌を歌う場面がたくさんあり、思っていたのと全然違っていった。朝5時に村にきたパプアの方たちも礼拝に参加していて、礼拝の大事さが分かった。午後は、ホームステイ先と交流の時間だった。英語があまり通じなかったので少ししか話ができずもっと話をしたいと思った。また、こうた君のホームステイ先にも行き、お父さんとも話した。英語を話してくれて村の家は庭に木などたくさん植えているので自然が豊かになっているなどたくさん村について知ることができ、とても興味を持った。その後は、アスラマに戻り、子どもたちや学生らとインドネシアVS日本のバスケの試合をして楽しんだ。

六日目は、ワークは壁作りではなく、種と苗を植える農作業の手伝いだった。苗植えでは、軽く穴を掘って埋めていたが、少し掘ると土の中に大きな石が埋まっていたり木の根があったりあまり土の質は良くないと感じた。種植えも、トウモロコシの種2、3個を、間隔を適当に空けて埋めていくというものだった。2、3個埋める理由はそれだけ埋めていたら一個は育つだろうという考えで、日本人がいかに効率良く育つかを考えるのとは違っていった。

七日目は、小学校に行き交流をした。インドネシアの小学生は静かな子は少しいるがすごく元気な子が多く、何をしても盛り上がる。しかし、授業が始まるとちゃんと話を聞いてくれるのでメリハリが付いていて驚いた。帰る前には、たくさんサインを求められ、いつの間にかサイン会が始まっていた。有名人になった気分ですごく嬉しかったが、すごく大変だと感じた。その後は、アスラマでゴミ拾いをみんなでした。子どもたちはゴミを見つけるのがとても早くてすぐにゴミ袋がいっぱいになった。ゴミはお菓子のゴミなどがとても多く、ポイ捨てする子が多いことがわかった。ポイ捨てをしないように教えていくことが必要だと感じた。

八日目は、中学校の訪問をした。学生はみんな落ち着きがあり、あまり交流の時間がなかったが協力してくれたおかげでお互いすごく楽しむことができた。二日で小学校と中学校を訪問して気づ

いたことは、小学生の積極的なところなど良いところと中学生のメリハリがあることなど成長の過程を国は違うけれど同じ姿を見ているようだった。日本では、小中学校に訪問する機会がないので貴重な体験になった。

九日目は、午前中は日本食パーティーの買い出しに市場に行った。市場は野菜や果物は店先に山積みになっていて中には、溝に落ちていて独特なおいを放っていた。肉も建物の中で置かれていて衛生面など心配になるものが多かった。野菜などは重さで値段をつけており、量り方は天秤を使って量っていた。日本では見られない光景ばかりで発見などもでき、とても楽しかった。日本食パーティーは準備がうまくいくか心配だったが、最終的においしくでき、子どもたちやホームステイ先の家族の方を笑顔にすることができ、大成功だった。

十日目は、ミーティングをたくさんし、どういうことを学んだのかと感じたことを話し合った。このIWCで人それぞれ感じたこと学んだことは違うが、みんな視野が広がりたいさんの人に支えられているということを改めて感じていた。

十一日目は、プリンビンサリ村での活動が最後の日だったので、たくさん遊んだり、話したりした。離村式では、ホストファミリーに感謝の気持ちを伝えることができ嬉しかったが、もっと伝えたいこともありインドネシア語を勉強してもう一度行き、自分の思いを伝えたいと思った。子どもたちからは、毎日笑顔と元気や新しい発見を貰った。

十二日目、朝みんなに見送られプリンビンサリ村を出発した。すごく悲しく何かを失った気持ちになるぐらいたくさんさんの豊かな出会いがあった。この日はデンパサールのアスラマに行き、伝統的な音楽などたくさん文化に触れることができた日になった。しかし私は、体調を崩しほとんど交流できなかった。ホテルに帰ると高熱が出ていた。海外で熱を出すと色々日本とは違うのですごく不安で熱が下がらなかったらどうしようという怖さもあった。海外で体調を崩すととても怖いので体調管理が一番大事だと思った。

インドネシア最終日、朝起きると熱が下がって

いてとても安心した。食欲もあり、治っていたのでプログラムに参加することができた。この日はディアナ・プラ大学、教会、日本人会というたくさん場所を訪問した。それぞれあまり時間がなく、建物の説明などで終わってしまいもったいないと感じた。バリには、異なった宗教の建物が並んでいるところがあり、このように宗教が違っていても対立を起こさないようになっていけばいいなと感じた。

夕方は、ショッピングモールで買い物をし、インドネシアの学生と最後の夕食を楽しんだ。

行く前は、ボランティアとは、貧しいところ、人が足りないところに手伝いに行くことや助けに行くことという感覚でいたが、行ってみると自分たちが助けているのではなく、たくさんの方に支えられて、色々なことを教えてもらっていることに気が付いた。ものを大事にすることや、思いやりや支えに感謝する心を忘れかけていた。便利な生活に慣れすぎてたくさんのことを失っていた。人と話す時間より携帯を触っている時間が長いことなどは、時間や学ぶきっかけを無駄にしていることだと気づき良かった。もっと感謝して、私も誰かを支えられるようになり、笑顔にしていきたい。

バリの文化に触れて感じたこと

国際教養学部 2年次生 滑田 愛



私はこの国際ワークキャンプに参加して、たくさん新しい発見があり、いろいろなことを学ん

だ。

まず、バリに到着して感じたことは、バイクの交通量がとても多いと思った。車の中から見ていると、たくさんのバイクが追い越して行き、信号待ちのバイクもとても多く、日本ではあまり見ない光景でとても驚いた。そして初日の夜ホテルで始めて現地の学生と会って一緒に晩ご飯を食べた。初対面でしかも日本語が通じない相手ということで、最初はとても緊張していた。いざ食事が始まるとみんな積極的に話しかけてくれて頑張って伝えてくれようとしてくれたりして、とても楽しく食事することができた。私も事前研修で学んだインドネシア語を話したらとても嬉しそうにしてくれて、私もとても嬉しい気持ちになった。お互いの言葉がわからなくても、話したい、仲良くなりたいという気持ちを大事にすれば、話すことが出来るし仲良くなれるということに気付いた。

ブリンビンサリ村に到着して、アスラマの子どもたちと初めて会った。子どもたちはとても元気で、「what's your name?」と名前を聞いてくれたりする子もいてとても驚いた。みんな積極的に話しかけてくれて、名前を覚えようとしてくれたりしてとても嬉しかった。ホームステイ先の方とも会った。いろいろなバリのお話しをしてくださったりして、暖かく受け入れてくださって嬉しかった。この日の夜水浴びを経験した。日本ではすぐにお湯が出るので完全にそれで私自身慣れていたが、冷たい水しか出なくて最初はとても驚いた。バリの夜は冷え込むのでとても寒かったですが、日本での当たり前がとても恵まれていることに気づいた。

私はインドネシア人の学生と日本人学生と3人でホームステイ先に泊まった。そのインドネシア人学生の子は、日本語をとっても熱心に勉強していて日本語もとても上手で驚いた。彼女は日本語を独学で勉強していて、毎日書く日誌も日本語で書いていて驚いた。毎日ホームステイ先に帰ってからも日本語の教科書を開いて勉強していたり、常に日本語の教科書を持ち歩いていて分からなかったらすぐに調べるなどとても努力していた。日本

のドラマやアニメが好きでそのことがきっかけで日本語を勉強するようになったそうなのだが、少しでも興味を持ったらすぐに行動に移して勉強しようとする姿勢がすごいし、彼女は勉強を苦には思っていないところや、熱心に勉強する姿を見てとても尊敬するし、私ももっと勉強しなければならないという刺激も受けた。

次の日からいよいよワークが始まった。この日は午前中だけでしたが、石を運ぶという普段あまりしない作業だったということもありとても疲れた。でも作業中に現地の学生たちとお互いの言葉を教え合いながら行っていたので楽しく作業ができた。そして現地の職人の方たちは、私たちが休憩している間にもずっと作業をしていたことに驚いた。事前研修ではインドネシア人はマイペースな性格ということを知っていたので仕事などもゆっくり進めて行くのかなと勝手に思っていたが、黙々と作業をしている姿を見てこの国の人はこういう性格だと判断するのではなく、やはり1人1人性格は違うし、実際に接してみないとその人の本当の性格は分からないな、と思った。

午後からは子どもたちと一緒に遊んだ。サッカーや追いかっこなど、みんなとにかく元気で驚いた。またアルプス一万尺の手遊びを知っている子もいた。毎年このIWCの参加者の方たちが来ているからきっとその人たちに教えてもらったんだろうと思うが、1年以上前のしかも違う言葉の遊びをずっと覚えているということは、そのときの思い出がとても楽しかったんだろうなと思ったし、私も子どもたちとそういう関係になってもっと子どもたちと思い出を作りたいと思った。子どもたちは基本英語で話しかけてくれるが、それでも意思疎通できなかったり、子どもたちが伝えようとしてくれていることが分からなくて困ったりしたが、それでも楽しく遊ぶことができたのは、やはりお互いに仲良くなりたいたいという気持ちがあったからではないのか、と思う。子どもたちと別れる時に、手紙やプレゼントをくれたり泣いたりしてくれる子どもたちもいてとても嬉しかったし、少しでも子どもたちにとって良い思い出になっていたらいいなと思う。

また、現地の日曜礼拝にも参加した。私自身日本でも普段あまり礼拝などには参加する機会がなかったが、参加する前までは礼拝は静かにしなければならないイメージだった。でも実際に参加してみると、お話しの途中で笑う場面があったりと私が想像していた礼拝とは違って、驚いた。私たちも歌を披露したときは笑顔で聴いてくださっていて現地の人たちはみんな温かい人たちだと思った。礼拝が終わった後にはたくさんの人と握手をした。一緒に写真も撮ったりして、正直日本では知らない人と写真を撮ったり握手したりすることはなかなか無いので、日本とはまた違った文化を味わうことが出来た。またアスラマからホームステイ先まで帰って来る途中で現地の人とお話しをした。最初話しかけられたときはとても驚きしたが、「この村に来てくれてありがとう」とか「日本にも行ってみたい」と話してくれて、日本に少しでも興味を持ってくれていたことが嬉しかった。日本では通りすがりの人に話しかけることはないし、話しかけられたこともないのでまた日本ではあまり味わえないような体験ができた。改めてとてもバリの人たちは温かい人たちが多いと思った。

現地の小学校と中学校を訪問した際には、私たちのグループは空手と二人羽織を披露した。みんな二人羽織を見るのは初めてだったと思うが、とても楽しそうに見てくれて嬉しかった。また、二人羽織をやりたい人を募集したときに誰も手を上げなかったらどうしようとか不安に思っていたが、みんな積極的に手を上げてくれて嬉しかった。二人羽織は言葉が通じなくても出来ることなので、やはり言葉の壁があっても通じるということを実感した。またもう一つ驚いたことは学校の授業の始まる時間がとても早いということである。中学校の時間割を見たら朝7時から数学と書いてありとても驚いた。一緒にホームステイ先で泊まっていた現地の学生の子も普段から5時に起きると言っていたので、とても驚いた。日本とバリではこういうところも違うのか、と実感した。

アスラマで日本食パーティーをした際には、カレーとBBQをした。準備のときから現地の学生

や普段アスラマでご飯を作っている職員の方たちも手伝ってくれたりして、バリの地で日本食を作ること、少しでも日本のことを知ってもらえたような気がして嬉しかった。また、その日本食パーティーまではあまり職員の方たちとお話する機会がなかったが、カレーを煮込んでいる時に話しかけてくれたり、一緒に写真を撮ろうと言ってくれたりして、とても仲良くなることが出来た。アスラマの子どもたちも美味しそうに食べてくれた。またホストファミリーも来てくれて一緒にご飯を食べた。私のホストファミリーは普段売店を経営していて話す機会が少なかったが、日本食パーティーを通してたくさん話しができてよかったし、少し恩返しが出来たと思う。

またプリンビンサリ村のアスラマとは別の高校生、大学生の生活するアスラマにも訪問した。そこでも交流会を行った。私たちは日本の曲で踊ったが、そのアスラマの学生たちはバリの伝統的な踊りを見せてくれるだけでなく、日本語で森山直太朗さんの「さくら」を歌ってくれたり、妖怪ウォッチのダンスを踊ってくれるなど日本語の曲も披露してくれた。私たちがそのアスラマに滞在したのは3時間くらいだったが、その短い時間のために日本語の曲やダンスを覚えて披露してくれたことはとても嬉しかったし感動した。また、バリの伝統的な楽器であるガムランやダンスも教えてもらった。ガムランは鉄琴みたいな感じかなと思っていましたが、両手で違う動きをしなければならなくてとても難しかった。ダンスも指先までとても細かい動きがあったりして難しかった。バリの伝統的な楽器やダンスなどを間近で見ることができ、バリ文化の新しい体験もさせていただいてとても良い経験になった。

バリで2週間過ごしてたくさんのお会いがあった。最後に空港で特に現地の学生6人と別れの挨拶をしたときは、悲しい気持ちもあったが6人と友達になれてよかったという満足感で満たされた。また日本人のメンバーもこの16人ともワークキャンプを通して、とても仲良くなることができた。最初は全然知り合いもおらず、2週間みんなと過ごすことができるか不安だったが、自分たち

の気持ちを共有することで新しい一面を知ることができた。この国際ワークキャンプでの出会いや経験は私にとって宝物だし、決して忘れないと思う。また、新しい目標も見つけることができた。それは、子どもたちと関わる職業に就くことです。現在、英語の教員免許を取るための授業を取っているが、今まではなんとなく授業を受けているだけだったが、この国際ワークキャンプで子どもたちと関わったことで、とても海外の教育に興味を持った。この経験を活かして次のステップに進もうと思う。

インドネシア国際ワークキャンプに参加して

国際教養学部 1年次生 尾坂 惇



IWCに参加した理由

私がこのプログラムに参加しようと思ったのには二つ理由がある。

ひとつめは自分の将来にプラスになると思ったからだ。私は今、英語の教師を目指して日々、勉強している。遅かれ早かれ、世界の中でインドネシアを含む東南アジアの地位は確実に高くなっていくに違いない。英語の教師として教鞭をとった際に、少しでも現地での実体験を持っていることは確実に自分にとってアドバンテージになると思ったからである。それは例えば、自分がインドネシアで体験したことを、生徒にフィードバックすることができるということだ。

ふたつめは、自分の視野を広げるチャンスであると思ったからだ。もともと私は今まで、パスポートも持っておらず、海外に行ったことはなかった。今回が初海外になるが周りからは、「初海外がインドネシアってちょっとイレギュラーだね」と言われることもあった。しかし、もともと人と同じことをするのがあまり好きではないことと、子どもたちと触れ合えることに惹かれて参加を決意した。

カルチャーショック

いざ、インドネシアに到着してみると衝撃の連続であった。教科書や、本を読むだけでは気づけないこともたくさんあり、まさに「百聞は一見に如かず」のという言葉がぴったりであった。

例えば、交通事情に関して驚いたのは日本と同じ左側通行であることだ。海外といえば、ずっと右側通行のイメージがあり、左側通行なのは日本だけかと思っていた自分がいたことに気づかされた。また、走っている車やバイクのほとんどが日本製であることにも驚いた。バイクが多いことは高校の時に習ったので知識としてはあったが、乗っている人たちがどういう格好をしているのか、どんな運転をしているのかは知らなかった。一部（とはいってもやや多かったが）の人はヘルメットをかぶらず、子どもを含む4人乗りをし、スキマが少しでも空いていれば車間距離など気にせず、詰めていく。正直、自分の想像をはるかに超えていた。また、市街地を走っているときに日本の企業や、世界的に有名な企業のロゴがあちこちに見えた。場所によっては街路樹が熱帯性の樹木なことを除けば、ほぼ日本と変わらないと感じられたところもあった。一方でプリンピンサリ村に向けて街から郊外に向けて走っていくとまた別の世界があった。少しうっそうとした林を抜けると、一気に周囲が明るくなり道の両側にどこまでも広がる青々とした田んぼが一面に広がった。よく見れば、稲が刈り取られている場所もあれば、黄金色に輝いている場所もあった。「教科書でよくみるのはこれか」と思った。そして、ふとあることに気づいた。道路がきちんと舗装されている

のである。中学・高校のときには「東南アジア諸国はまだ発展途上国である」と習っていたので、勝手に郊外では道路は舗装されず、砂利道を想像していたが違ったのである。いかに自分の知識が浅はかでミクロのことしか見ていないのかと気づかされた。

到着10分で

さて、そんなこんなでプリンピンサリ村に着くまでに様々な衝撃を受けたのだが、到着してからも衝撃を受けることが多々あった。

村に到着すると、次々と子どもたちが、それぞれ初めは少し照れ臭そうにしながら、私たちの方によって来た。すかさず、3日間しか勉強していない、カタコトのインドネシア語で話しかける。中には英語を話す子もいたが、小さい子は英語で会話ができない子たちもいた。しかし、お互いが打ち解けるのにそう長い時間は必要なかった。気づけばあちこちで、みんな子どもたちと遊んでいる。私もある男の子と追いかけてこをしようとしてその子の方へ近寄った。遊びはじめた瞬間、ひとりで盛大に滑ってしまった。ここで笑い話になればよかったのだが、不運なことに右足首を激しく捻ってしまった。激しい痛みを感じながらも、なんとかゆっくり歩いて、看護師の石井さんに診てもらった。当初、捻挫だと思っていたので湿布を貼り包帯で足首を固定してもらった（後日、帰国してから骨折と靭帯損傷と診断された）。まだインドネシアについて2日目、村に到着して約10分しかたっていないのに、歩くことも厳しいような状態になってしまったのだ。これには衝撃というよりも、ショックを受けた。あと12日間、子どもたちと走って遊ぶこともできず、みんなと一緒にワークをすることもできず、なにより普通の生活を送ることもままならないことがとても悲しかった。

その晩、ホームステイ先の玄関に一人で座ってずっと自分を責めていた。初海外ということもあり、注意力が散漫になっていたこと。男の子にいいところを見せようとしてか調子にのってしまったこと。これからみんなと同じ行動はできないこ

と。「なんで捻挫をしてしまったんだ」と悔しく泣いた。

しばらく泣いた後に、「でも、起きたことはもう仕方ない。今の自分にできることはなんだろうか」と前向きに考えることにした。そして自分が事前の役割分担でカメラ係となっていたのに気づいた。みんなと一緒に行動できないことを逆に、みんなの写真を撮ることができるのではないかと思えた。

次の日から、できる限りたくさんの写真を撮り始めた。時には、みんなが楽しそうに子どもたちと遊んでいるのをみると、少しつらい思いになることもあった。しかし、写真を撮るにつれてみんなの笑顔を見ることがとてもうれしく感じるようになってきた。また、「自分が一番全体（みんな）のことを見させてもらっているのではないか」ということに気づき、とてもうれしく感じた。プリンビンサリ村出発の前日までに撮りためた写真は、6000枚近くになった。せっかくここまで撮りためた写真をどうにかして活かすことはできないかと考えた末に、ムービーを作成することにした。インドネシアの学生に観てもらい、少しでも記憶に残してほしいと思ったのである。早速、空き時間を利用して写真の選択を始めた。作業は大変になるだろうと覚悟してとりかかったが、思いのほか楽しかったと同時に寂しくもあった。写真一枚からその時の情景が細かに思い出される。みんなよりも一足早く思い出にふけていた。しかし、同時に子どもたちと過ごす時間は少ないということ意識するようにもなった。そして最終日、インドネシアの学生になんとか完成したムービーを空港に向かうバスの車内で観てもらった。動画を観ている最中に笑ってくれたり、涙を流してくれた時に「ああ、やっぱりムービーをつくってよかったな」と思えた。

IWCを通して

今回のプログラムを通して気づかせてもらったことはたくさんある。

英語が必ずしも通じるわけではないこと。生活様式が日本とはまったく異なること。日本がいか

に整備された国であるかということ。子どもたちの笑顔は不思議な力をもっていること。言葉が通じなくても、心で通じ合うことはできること。自分が知っていることは、実際のほんの一部なこと。挙げればきりがないほどたくさんのことに気づかせてもらった。その中で最も自分にとって大切なことと思ったことについて述べたい。

8月30日にここまでの生活を通して自分が学んだことについて考えるプログラムがあった。日本では普段時間がなく、じっくりと自分と向き合うことができたのは非常に有意義だった。そこで自分が考えたことは次のようなことだ。

まず、自分の目の前に起きてくる出来事はすべて神様からのプレゼント、自分を成長させるための題材なのである。そして次に、その出来事について深く考えることが必要である。ここでのポイントは、『なぜ』その出来事が起こったのかということよりも、「今の自分にできることはなにか、どうすればいいのか」を考えることのほうが重要ということである。起こってしまったことはどんなに後悔しても、もとに戻すことはできない。だからこそ、今の自分にできることを考えることが大切なのである。そして最後に、実際に行動に移し、他の人々に表現することである。ここでの表現とは、実際に体を動かし表現すること、言葉で表現すること、文字にして表現すること、映像にして表現することなどもそうである。以上のことを自分に再度当てはめてみれば、今回のプログラムで一番大きな出来事はやはり足首を捻ったことである。そこで、自分のしたことを後悔しても元に戻すことはできない。だから「今の自分にできることは何か」と考えた末に、カメラ係として写真を撮り始めた。そして最終的に、撮りためた写真を利用してムービーという形で表現したということである。

今回のプログラムを通して気づかせてもらえたことは自分にとって、とても大切なことであり一生役に立つものであると確信している。しかし、それは当然ながら一人では到底気づくことのできないものであった。たくさんの人々の支えのおかげであることは疑いの余地がない。ここでは感謝

の意を述べたい。

感謝

まずは、親へ感謝しなければならないだろう。このプログラム参加に関して金銭面のみならず、心の面も含めて様々なサポートしてもらった。また、怪我をしたことを伝えたと帰国の日に、朝早く岡山から車を走らせて関西空港まで迎えに来てくれたこと。そしてそのおかげですぐに病院で診察を受けることができたこと。本当に感謝しているし、ここまでしてもらったんだから必ず有意義なものにしなければならないとも思えた。

また、引率の先生方、現地スタッフのみなさんにも様々な面で支えてもらった。怪我をしたために、一人では自由に行動できず、みんなと別行動となったときに車を出してくださったこと。みんなと同じようにワークができなかったときに、座ってできる作業を教えてもらったりと本当に様々な面で支えてもらい、非常に心強かった。

アスラムの子どもたちからもたくさんのことを教えてもらった。子どもたちと接する中で、笑顔には不思議な力があること、日本で忘れていたことを子どもたちが教えてくれた。疲れているときや、少し落ち込んでいるときに子どもたちの笑顔を見ると元気づけられた。だからこそ、いつも笑顔でいる子どもたちが最後のお別れの時に目に涙を浮かべてくれたことはとても印象に残っているし、自分も目頭が熱くなった。

そして最後に、このプログラムと一緒に参加したメンバーに感謝したい。それぞれが一步踏み出す勇氣を持っていて、常に新しいことにチャレンジし、それぞれが自分にできることを精一杯していた。だからこそ、お互いがいい刺激になったと思う。また、怪我をして自由に動けないときにサポートしてくれたし、自分もみんなと同じプログラムに加わりたくて無理をしていたときに諭してくれたり、落ち込んでいるときに励ましてくれたりしたことが本当にうれしかった。最高のメンバーでインドネシアに行けたと確信している。

このワークキャンプが自分の視野を広げるチャンスになったことは間違いない。これからの自分

の人生にプラスとなるよう学んだこと、気づいたことを大切にしつつ周囲に表現していきたい。

アスラムでの自分の変化

社会学部 1 年次生 福留 美緒



私は海外に行くことが初めてでもなかったし、今まで子どもと接することも少なくなかったが、とても緊張と不安でたくさんの二週間研修が始まった。私は参加する前に「できるだけ多くの人と関わる」という目標を持ってこの研修に挑んだ。この目標は正直バリに行くときだけの目標ではなくIWCが決まった時から自分の中で持っていた目標だった。だが私はこの目標を日本での研修の時には達成できなかった。日本での研修は自分も含めたみんなが心を開いていない感じがした。私は体調不良で事前研修最初の日研修に行くことができずに、更にみんなとの距離が遠くなった気がしていた。さらに正直私は二週間だしそこまで深く仲良くなろうとするほうが間違った考えなのかと思うこともあった。私は二週間ずっとこうなのかととても不安でさらに緊張感が高まっていた。そのままバリに到着し、一日目にディアナブラ大学の学生と会ったが、今までとあまり変わらない感じがした。ご飯は癖もなくとてもおいしくてとてもなじみやすい食事だと思った。二日目はプリンビンサリ村に向かった。プリンビンサリではたくさんの子どもの迎えに来てくれ重いキャリーケースを運んでくれた。この日にホストファミ

リーの部屋割りが決められ、一つ年上のありささんと部屋が一緒になった。正直私は同級生ともそこまで仲良くなれていないのに先輩なんて少しいやだなという気持ちだった。さらにお風呂はシャワーしかなく水しか出ないし、トイレは紙を流せないし本当に慣れないことが多くて二日目は日本に帰りたい気持ちがまだ強かった。その中でワークは始まった。まずワークにはみんなでおそろいの作業着を着た。誰かがみんなのために大きい石を運んだり、疲れていそうな人に声をかけて元気を出したり、グループであるからできる行動などが目に見え、ワークが始まってからはみんなの仲が深まっていくのがとても分かった。そしてワーク中はどのタイミングよりもインドネシア語を学生から教えてもらえる時間だとも思った。みんなが同じ目標に向かって行動するからこそお互いに協力したいという気持ちが芽生えるを感じた。私は協力して何かを成し遂げるということをインドネシアで学んだ。例えば、ワークのほかにみんなで自分たちが食べたご飯の食器をグループに分かれて洗うということをするようになった。さらにこの話をチャブレンが持ち出したとき当然のようにみんなが「いいね」といえる環境があることがとてもいいと思った。そしてインドネシアでの生活は人生で初めての経験が多かった。まず人生で初めて教会に向かった。歌を歌ったり、チャブレンの話に笑ったりと、想像していた厳かな雰囲気とは違うことを知れた。短いズボンやサンダルをはいていけないなどの服の規制などがあり新鮮だった。さらにバリに着いて一回目の洗濯をした。日本の洗濯機がどれだけありがたいものか分かった。手で洗うのは汚れも落ちないし、においも落ちない。想像以上にしんどいものだった。そしてご飯の時間に毎回歌っていた歌を私が手を挙げて前で歌うことになった。日本にいたら絶対手を挙げなかった自分が、積極的になってきていることに気づき少し成長を感じた。この瞬間少し遠くではあるが自分の目標に初めより近づいている気がした。私が子どもと遊んでいるときにインドネシア語で話してくれたが、私が理解できずにいるとジェスチャーや表情などで一生懸命伝え

てくれる姿を見て、私はインドネシア語を話すことができるわけでないが子どもも学生も一生懸命言いたいことを理解しようとしていたり、伝えようとしているのが言語は便利ではあるが完璧に伝わらなくても心のコミュニケーションはできるということをも身をもって実感できた。これも私にとっては初めての体験であった。ごみ拾いを子どもと一緒にした。アスラマは毎日、子どもたちによって掃除されているはずなのに、アスラマのあちこちに散らかっているごみの多さに驚いた。まずお菓子のごみやペットボトルごみ、さらに衣服なども落ちていた。私はこんなにごみが落ちていた理由は子どもにごみをポイ捨てする習慣がついているからだと考えた。このごみ拾いで子どもたちにごみを拾うこと、捨てないことの習慣がつくといいなと思った。だんだん綺麗になっていくアスラマと増えていくごみ袋を見ると、とても達成感があった。さらに一緒にごみ拾いをした子どもたちが私とするごみ拾いがとても楽しいと言ってくれて、私は子どもたちが一緒に過ごす時間を楽しんでくれているのだと感じて言葉にできないくらいうれしくなった。休憩時間に近くの売店でインドネシア学生と話す機会があった。その時、同時になぜ私はこのIWCに応募したのかや自分の目標を再確認した。はじめは帰りたいとしか考えてなかったIWCだったが今の私は残り日を数えて惜しい気持ちになっている瞬間があることに気づいた。こうなれている自分自身の成長を感じたし人とかかわり方も変化していると感じた。さらに日本にいた時の自分と比較することが多くなった。まずインドネシアに来てから交友関係が広がった。まず日本の研修ではあまり話さなかった人と雑談などができる関係になった。さらに二日目正直満足していなかったルームメイトだったが一週間もたたないうちに打ち解けられた。初めてのインドネシアで様々な生活の違いなど小さなことだが二人で乗り越えようと話したり協力したりしたことの証拠として仲が深まったのだと思った。そして、ルームメイトと夜に「バリに住みたいな」という話をしたときに、改めてお互いがここでの生活を楽しんでいるのが分かったし、人と

同じ気持ちで生活をして物事を共有できるうれしさを始めて感じた。アスラマの子どもから手紙や贈り物をもらうこともあった。子どもたちにとって貴重な遊び道具である人形などをプレゼントしてくれたことはすごく大きな愛情をもらったように感じた。そして手紙には「DON'T FORGET ME」などを書いており子どもたちもだんだん近づいているお別れに気づいて悲しいのだと気づいた。私はさみしい気持ちよりも今楽しいという気持ちを持ってもらえるように接する努力をした。そして私たちと一緒にごみ拾いをしたおかげで遊んでいるときでもごみを拾っている子どもの姿が見られて私たちの起こした行動が子どもたちにとって意味のあることだったと思えてとても嬉しくなった。私は最終日に近づく中、朝のミーティングで自分のいままでの活動を振り返った。私はバリに来て本当にたくさんの学びと経験をさせてもらったと感じた。まず、私は今までの自分の固定概念を恥ずかしく思うことがあった。それは生活方法などに関してである。いろいろな考え、人、生活が存在していて、こうでなくてはいけないということや思い込みは本当によくないということに気づかされた。例えば中学校での交流会は三年生の一クラスのみでさみしい感じかと思ったがみんな仲が良く、どこからもさみしい感じがなくむしろ親密な仲が築けているように見えた。次に、参加したみんなが周りのために重労働をしてくれたり、誰かのために積極的に行動するということを経験をした。これは毎日のワークで協力することがどれだけ意味のある事がわかるし、それが分かるのもみんなが一生懸命取り組んだ結果だと思う。アスラマ最終日、ワークでプレートを完成させるだけの作業は楽ではあったが少し寂しく感じた。お昼から泣いて別れを惜しんでくれる子どもがいたり何をしても近くにきて名前を呼んでくれたり半ば無理やりでも遊びに誘ってきたり、本当にみんなが愛おしかった。子どもたちが学校から帰ってくるとすぐにわたしたちの方へ走ってきてすぐに遊んだり手紙を書いてくれたり最後まで時間をいっぱい一緒に使おうとしてくれる感じがした。後悔の無いようにたくさんの

時間を子どもと使い、お話したり本当に今までの中で一番充実した感じがした。別れを惜しんでくれるのもこの短い二週間という期間の中で全力で向き合ってた結果だと思った。そして、自分たちだけの力で成功しているわけではないということも学んだ。例えばほとんど完成しかけているブロック塀を見て自分たちが運んだ石をきれいな壁に造り上げてくれる職人さんがいてこのワークが成り立っているということを改めて感じた。離村式では私たちのワークでの思い出や子どもとの思い出を写真で渡し、ホストファミリーへの感謝の気持ちを手紙で伝えた。それまでも感謝はもちろんしていたが、この時私はここに来てホストファミリーに恵まれて、子どもたちや村の人や関係者すべてに恵まれているからこのように安全で幸せな生活が送れていたのだと気づいた。気づいたのは遅かったかもしれないが、このように気づくことができたのも私の成長であると思う。最後に、私がアスラマでの活動で学んだことは素直に生きるということだ。私は今まで周りの目を気にして自分の感情や思ったことを言えなかったが、自分の意見を言えるようにもなった。今までの自分の意見に反対される恐怖心や自信のなさというものも薄くなった。これは自分の成長でもあると思うが、自分がどんな意見を持っていたとしても受け入れてくれるだろうと思える環境があったことにすごく感謝している。さらに、自分の夢などを人に話す時には叶わないなどと思われるのが苦手得意ではなかったが、ここの子どもたちははっきり自分の夢を持っていて意志をもって生きているように強く感じた。子どもたちに教えたことはたくさんあったけれど、私自身も子どもたちから学ぶことがたくさんあったと感じた二週間だった。この二週間で学んだたくさんのかけがえのない出来事は日本で生活していくうえでも一生大切にしていきたい。

成長できた14日間

経済学部 1年次生 布藤 理沙



IWCに参加するきっかけ

「何かやらなくちゃ」これは私の大学入学時に思った気持ちだった。私は受験に失敗したショックで桃山学院大学に入学した当初はかなり落ち込んでいて、何からしていいかわからなかったが、だんだん私はこの大学でしかできないことをやってみようと思うようになっていった。ある説明会でこのIWCのパンフレットを見たとき、自分にはできないと思った反面、これをやり遂げられたら自分がもっと変わるのではないかとも思った。実際私は、中学・高校で発展途上国の子どもたちを支援するプロジェクトに参加していたこともあって、このIWCは自分にとって新たな挑戦でもあった。そして私は努力の甲斐もあって、第33回IWCのメンバーとなった。日が経つにつれて準備することが増え、どれも想像よりハードだったが、それは私たちがインドネシアで成功できた土台となった。

実際に体験したインドネシアの姿

インドネシアに着いた時、私はドキドキとワクワクが止まらなかった。しかしうまくやっていたらどうか、インドネシア人・インドネシア人学生と意思疎通できるだろうか、という不安もあった。デンパサール空港に到着してすぐ、私たちは二週間生活を共にするディアナプラ大学のインドネシア人学生にあうべくホテルに直行した。その

道中での景色はテレビで見るような発展途上国の姿だった。バイクの数は日本と比べられないほど多く、また運転も雑で驚いた。頭に荷物を載せて歩いている人や、ドアのない商店。どれもこれも日本とは違い新鮮だった。そんなこんなでホテルに到着し、インドネシア人学生六人と出会った。夕食を食べながらたわいのない話をしていく中で、インドネシア人学生は日本人学生に対して優しく接してくれたり、英語が通じなければ何回も聞き直してくれたりとしているうちに、たった数時間で私たちはお互い冗談を言い合える仲になっていった。そのとき、英語ができない私でもいざとなれば何とかできるということを実感した。そしてあるインドネシア人学生は、私に「今日初めて会ったのに、まるで昔から知っている感じがする」と言っていたことは今でも覚えている。同じアジアでも国が違う私たちがこうしてこの機会に出会えて一緒に活動し過ごせたことは一生の思い出だ。次の日は、プリンビンサリ村へと向かった。待ちに待ったプリンビンサリ村のアスラマに到着すると、そこにはたくさんの施設の方々や子どもたちがいた。私は事前研修でアスラマのことを勉強しているなかで、アスラマの子どもたちの大半は貧しさが原因で親元を離れてここに来ていることを知っていたため、自分の殻に閉じこもってしまう子どもたちが多いのではないかと考えていた。しかし、それは間違っていた。アスラマの子どもたちは元気が有り余っていて笑顔が素敵で、ハイタッチや握手をしてくれたり、「what's your name?」と小さな女の子がたどたどしい英語でコミュニケーションをとってくれたり、子どもたちも私たちのことを歓迎してくれているんだと驚いたと同時に嬉しかった。そして事情により、私は二つのホームステイ先で生活することになったが、どちらの家も優しく迎えてくださったおかげで、安心して過ごすことができた。普段からみかんや水を出してくれたり、雨が降ったときには洗濯物を取り込んでくれたり、毎日ホームステイ先に帰ると声をかけてくれたり、最終日の朝には早くからピサン・ゴレン（バナナの天ぷら）というインドネシアの屋台料理をわざわざ作って

くれたり、感謝してもし尽くせないほどの恩をもらいすごく充実した日々を送れた。しかし私は、トイレとシャワーが日本とまるっきり違うもので驚きを隠せなかった。まず、トイレは水洗ではなく横にある大きなバケツのなかの桶を使って水をすくい流すというスタイルで、シャワーは冷水しかなく、毎日凍えながら入っていた。トイレ兼シャワールームはアリや蜘蛛がたくさんいて最初は大きなカルチャーショックを受けた。だが、人間が慣れることができない環境というものはないという名言があるように、私は二・三日も経てば自然と慣れていった。また、プリンビンサリ村では大量の虫やハエ、ホームステイ先までの道中にはたくさんの番犬がいた。私は幼少期に犬に追いかけられたことがトラウマで極度に犬が苦手だった。実際何度も犬に吠えられたり追いかけられたりすることがあり、最初はホームステイ先に帰れないこともしばしばあったが、一週間も過ぎると犬に吠えられたり、追いかけられても動じることが減り、犬に対する苦手意識がなくなって、虫も今では触れるようになるほど成長できた。そして、プリンビンサリ村で暮らしてみて気づいたことがある。それは、村の人は知り合いでも知り合いじゃなくても、たとえそれが外国人であっても、挨拶をしてくれたり話しかけてくれるということだ。第一、日本ではありえないことだ。しかし、プリンビンサリ村では当たり前のことだった。まだプリンビンサリ村で生活し始めて二・三日しか経っていない頃の昼すぎに、私はホームステイ先に忘れ物をして取りに帰っていた道中に、村の人から「selamat tidur（おやすみなさい）」と冗談であいさつされ、「selamat siang（こんにちは）」と答えと村の人が賢い！と褒めてくださったり、「where are you from?（どこから来たの?）」と話しかけてくれたりと、日本だったら通行人に話しかけられたことがないからこそ、心が温かくなり幸せな気分だった。

ワークキャンプの一番の思い出と印象に残っている話

ワークキャンプの思い出は、主にワークと毎日の子どもたちとの交流だった。ワークは職人さん

が主体となって私たちはそのお手伝いをするという形でセメント、石やブロックを運んだ。日本ではあまり経験できないからこそ新鮮で楽しく作業できたし、疲れているときは互いに「semangat!（頑張れ!）」と励まし合うことで、ムードが常によかったと感じた。そして、職人さんたちはいつも休憩も取らずに一生懸命黙々と働くのを見て私はすごく感動した。日本にもインドネシアにも今や世界中に多くの建物が建っているが、よくよく考えてみれば、それを建てるのには何百人、何千人もの人々が汗水垂らして働いているのだ。このワークでも同様に私たちだけでなく、日曜日であるにもかかわらずわざわざ手伝いにきてくれた子どもたち、そして先生方や職人さんといったさまざまな人たちのおかげで完成することができたし、これを通して私は普段からたくさんの人に支えられて生きていると実感することができた。

子どもたちとの交流は自分が一番輝いていた時間だったと感じる。先ほども述べた通り、この村に行くまでは子どもたちは自分の殻に閉じこもっているのではないかと心配していたが、着いてみて実際一緒に遊んでいると本当に元気だし、笑顔が絶えない最高の子どもたちだった。子どもたちは親が近くにいないが、上級生が下級生にマナーや行儀を教えるというのを知らず知らずのうちにやっているの、遊ぶときは遊ぶ、掃除するときは掃除する、勉強するときは勉強するという風に、小さい子どもでもマナーを守って行動しているのを見たときは感心した。そして、毎日アスラマにいけば、遠いところにいたとしても大声で声をかけてくれたり、一緒に遊ぼうと手をつないでくれたり、とにかく疲れる暇もないくらい遊んでいた。特に、最初ここで子どもたちと遊ぶときには名前を覚えるのに必死だった。人間は誰だって名前を覚えてもらおうと嬉しいし、名前を呼ぶことでグッと距離が縮まると思うからだ。だから私は暇さえあれば顔と名前を一致させることを意識して遊んでいると、子どもたちもだんだん私と遊ぼうと言ってくれて嬉しかった。そしてお別れの時には、たくさんのプレゼントや手紙、子どもたちが自分のことを忘れないでと言ってくれたこと、泣いて

別れを惜しんでくれた子、私のためにしてくれたすべてのことに感動したし、もう一回行きたいと強く思った。

また、私は館長さんと話す機会があって、その時に聞かせてもらったある話が印象深かった。このアスラマで最年少のギルという男の子は、日本人の学生からも人気があり毎日大量の花をくれた優しい子だ。館長さんによると、その子には実は10人もの兄弟がいるそうだ。しかし、ここにはフェニとサニーという2人の兄弟しかおらず、ほかの兄弟はみんな別々のところにいると言っていた。このアスラマの子どもたちは、結構そういう境遇の子が多く、実際子どもたちの部屋をのぞかせてもらったときにも、ここにいない兄弟について話してくれる子がいた。正直、自分がその立場だったらと考えるとつらいのはもちろん、悲しいし、だが何もしてあげることでできない現実というものがあることに気づかされた。

今後の人生にどのように活かしていきたいのか

私はこのIWCで自分の座右の銘である「何もかもはできなくても何かはできる」ということを実践できたと思う。日本にいたら気づけないこと、わからないこと、考えなかったことを見つけられたし、挑戦してみることの重要性を知れた14日間でもあった。自分が経験したり学んだりしたこと、新たな出会いや発見は誰にも奪われることのない一生の財産となり、それがまたいつの日か自分の持ち味になるのではないかな。ボランティアとは何かをしてあげるとか何かを与えるとかそういうものではなく、自分の可能性や存在意義を発見したり、互いに学びを与え合うものなのではないかな。そして、最後にこの経験を糧に、私はまた新たなボランティアをしてみたり、英語向上のための勉強をしたり、今できることを見つけて最大限努力していきたい。

国際ワークキャンプを通して感じたこと

国際教養学部 2年次生 菊池 安梨沙



私が国際ワークキャンプに参加したいと思った理由の内の一つは、ボランティアを経験することで、どのような気持ちの変化が表れるのか、人の役に立つとはどういうことかを知りたかったからである。そのような目標がある中で、私が国際ワークキャンプに参加して感じたことは、主に四点ある。一点目はみんなの優しさから学んだ「ボランティア」、二点目は人の気持ちの「温かさ」、三点目はコミュニケーションをとる上で大切なこと、四点目は自分の環境への「感謝」である。

みんなの優しさから学んだ「ボランティア」

私たちは、プリンピンサリ村にある児童養護施設、アスラマの敷地を囲う塀を作る手伝いをした。ボランティアワークは、ワークキャンプ三日目の朝8時から始まった。山積みになっている多くの石を土台に使用するために、バケツリレー方式で1列に並んで運び、力に自信がある人は1人で運んだ。石を運ぶだけではなく、運んだ石を積み上げて固めるためのセメントをバケツに入れたものや、セメントで作られたブロックをバケツリレーで運んだ。そして、15分に一回ほどのペースで少しの休憩を挟み約3時間ワークを行った。いざ始めてみると、石を運び出して5分も経たないうちにすごい汗をかき、思っていた以上の体力を使い、疲れを感じた。正直これを約2週間毎朝すると考えると、身体も気持ちも持つのかと不安に

なった。しかし、学生たちは思っていた以上に大変だとは言っていたが、ネガティブな発言は耳にできなかった。ワークをしている最中もインドネシア人の学生と交流している人が多くいた。例えば、「この石は重い」だとか「軽い」、「普通」だとか、「頑張れ」、「気をつけて」という単語をインドネシアの学生に習って、石をバケツリレーする時に、次に渡す人に声をかけあったりしていた。私は、お互いに頑張れと声をかけあっている仲間を見ることがすごく勇気づけられ、私も負けていけないと思った。私は、ポジティブに考えることができる仲間とワークができて、このメンバーとなれば約2週間頑張ることができると思うことができた。また、遊んでいる時に足を怪我した学生や、重いものを持ちすぎて腰を痛めてしまった学生たちは、ワークが出来ない中、自分たちには何が出来るのか考えて、ワークをしている人とは別のことに取り組んだ。私はその姿をみて、みんなは本気でボランティアをしたかったのだと思い、その人たちの分まで一生懸命心を込めてボランティアを最後までやり抜きたいと思った。みんなは、ボランティアをしている時だけでなく、アスラムの子どもたちとの交流会では、桃山学院大学の学生やインドネシアの学生が、ダンスや武道を披露している時や、私が手洗いの仕方を子どもたちに教えている時も、みんなが良い雰囲気の中で楽しくできるように、自分の発表ではない時も盛り上げてくれた。日本食パーティーではアスラムの子どもたちや、スタッフ、ホストファミリーのために作る食事を作っている時、みんなが常に自分には何が出来るのかを考えていて、野菜を切る係など自分の決められていた仕事が終わっても、料理長に次は何を手伝え方がいいのか聞いていたり、ずっと頑張ってくれている子がいたら交代してあげたりしている場面をよく見かけた。私はそういったみんなの優しさから考えさせられたことがある。「ボランティア」とは、単にお金を貰わずに重い石を運び、壁を作ったりする体力仕事をすることや、種などを植える農作業をする行為の事ではなく、もちろんその行為も重要だが、重い石を運ぶ時や疲れてきた時に、頑張れと声を掛けたりする優し

さや、仲間が頑張っている横で、自分には何が出来るのか探したりする積極的で協力的な姿勢が「ボランティア」というもののなのかもしれないと感じた。

人の気持ちの「温かさ」

私は、インドネシアでたくさんの人から「温かい気持ち」をもらった。ホストファミリーや学生、アスラムの子どもたちから毎日挨拶をもらったこと、アスラムの調理員の方々は、私たちの見えないところで毎日朝昼晩美味しいご飯を作ってくれたこと、自分たちが活動しやすい環境を作ってくれた先生方やアスラムのスタッフの皆さん、ワーク中の学生同士の頑張ろうといった励まし合いの言葉、仲間が怪我をしている学生を心配する姿、そしてアスラムの子どもたちには、たくさんハグをもらい、笑顔をもらった。もしかすると、これらの温かい気持ちを与えてくれた人々は、自分では何気なく、小さなことだったかもしれない。でも私にとっては大きなことで、すごく心が温かくなった。私はこの経験を通して、自分にとっては何気ない言葉や行動でも、相手にはすごく意味があって、意味の無い言葉や行動はないのかもしれないと感じた。だから私は、自分の言葉や行動に責任を持つべきだと思った。そして、自分の言葉や行動で人を幸せにすることも出来ると思った。私は、国際ワークキャンプに参加する以前よりも、誰かを幸せにしたい、誰かの役に立ちたいと強く思うようになった。

コミュニケーションをとる上で大切なこと

私は、改めてコミュニケーションの大切さを実感した。私は、インドネシア語はもちろん話せないし、英語も少ししか話せない。国際ワークキャンプに行く以前は、インドネシアの学生と2週間一緒にいる上で、言語が分からないのにコミュニケーションを取れるのかと、仲良くなれるか不安であった。しかし、実際にインドネシアの学生たちと話してみると、インドネシアの学生たちは下手な英語を聞き取ろうと熱心に聞いてくれ、私が聞き取れなくても諦めないでケータイの翻訳機な

どを使って、一生懸命伝えようとしてくれた。何とか伝わった英語で笑い合うこともできた。アスラマの子どもたちも、小学校低学年になると英語が話せない子たちもいたけれど、気がつけば一緒に走り回ったりして遊んでいて、コミュニケーションは言葉だけではないと思った。言葉が通じなくても、一生懸命伝えようと理解しようとする態度で気持ちが伝わることもあると気づいた。しかし、仲良くなるにつれ、もっと仲良くなりたい、もっと相手の気持ちを知らりたいと思うようになった。そうするには、やはり更に英語力をあげるべきだと思い、国際ワークキャンプに参加する以前よりも英語に対する熱が上がった。

自分の環境への「感謝」

私は、自分の環境にもっと感謝しなければならなかったと思った。プリンビンサリ村の生活では、トイレにトイレットペーパーがなく、お風呂は水シャワーだけでお湯はでない、食事をする時はハエが飛んでいるので落ち着いて食べられない、クーラーなど便利な電化製品もあまりなく、貧困で大学に通いたくても通えない子どもたちもいる、家が貧しいため両親と暮らせない子どもたちもいる。しかし、私には両親がいて、大学にも通えて、日本には便利なものが溢れていて、何不自由なく生活できている。そのような贅沢な生活にすら文句を吐いてしまっている自分がいた。プリンビンサリ村で2週間生活をして、そのような自分が恥ずかしく情けなくなった。そして、自分が生活させてもらっている今の環境にもっと感謝をしなくてはならない、感謝したいと思った。

私は国際ワークキャンプに参加して、ここに書いた主な4点だけでなく、たくさんのことを経験し、感じる事が出来た。私の目標であった、ボランティアを通して得られる考え方や気持ちを知ることができ、協調性の大事さも更に実感することができ、インドネシアの文化も肌で感じて体験することが出来た。私の人生にとって、この国際ワークキャンプはとても大きなものになった。このような貴重な体験をさせていただくことに、関係してくださった方々に本当に感謝したいと思う。

インドネシアでの気づき

社会学部 2年次生 百瀬 千夏



はじめに

私にとって国際ワークキャンプに参加することは挑戦だった。なぜなら、集団行動が苦手であること、人見知りであること、自主性がないこと等、苦手なことが多いと自覚していたからだ。これはどうにかしなければ、と長年ずっと悩んでいた。また、昨年旅行でインドネシアを訪れ、美しいパティック（インドネシアのろうけつ染め）に感動していたこともあり再びインドネシアを訪れたいとも考えていた。インドネシアを訪れることができる上に、自分の苦手なことも克服できる良い機会だと感じ、この国際ワークキャンプに参加する決意をした。事前研修ではしおり係を担当しており、しおりを作ることに専念していた。その中で、同じしおり係としてレイアウトのほとんどを作成してくれた馬場さんの姿や、ミーティング中、子どもたちが過ごすアスラマの規模や部屋の広さが具体的にわからない中でも、積極的に意見を出しているみんなの姿を見て、主体的で尊敬すると同時に、一緒にワークキャンプに参加できることに對して嬉しくなった。そのおかげで緊張しつつも楽しい気持ちで出発日を迎えることができた。本報告書では、第33回国際ワークキャンプで経験したことを基に、「インドネシアの文化および生活について」というテーマで日本とインドネシアの共通点や相違点をまとめる。

食事の片づけから気づいたこと

ワークキャンプ中、私はいつも食事を食べ終わるのが1番か2番だった。そのため、食器と食べ残しを片づけるための器を置いておくようになり、食後に炊飯器やおかずの入った鍋を片づけるのも手伝うようになった。そのこともあり、イヴ（おばさん）たちがいるキッチンに出入りする機会が増えた。毎日片づけを手伝っていると、最終日にイヴからわざわざ日本語で「ありがとう」と言ってもらえた。自分から始めたことでお礼を言ってもらえるのが、こんなにも嬉しいとは思っていなかった。ワークキャンプに参加する際の目標であった自主性を、少し身に付けることができたのではないかと思えた経験だった。そして、毎日キッチンを出入りしているうちにあることに気づいた。キッチンに立つババ（おじさん）の姿を見たことがないのだ。そんなことかと思われるかもしれないが、その点は日本と共通しているところではないだろうか。男性が外で仕事をして、女性が室内でケア労働をするという性別役割分業はインドネシアでも根深いように思えた。また、イヴから子どもたちについて話を聞いた際、「女の子は年上が年下の面倒を見ているけど、男の子は年上が年下をいじめたり、使い走りになしたりするから同じ年齢の男の子同士を同じ部屋にする」という話をしていた。子どもたちは、毎日子どもの世話をするイヴたちの姿や、職人として働くババの姿を見ている。これは男性の仕事で、これは女性の仕事、というような価値観を内面化していないだろうか。その価値観が子どもたちの行動にも、少なからず影響を与えているように思えた。私たちはワークキャンプ中、男女関係なくワークを行い、食事の後片づけを手伝い、子どもたちと関わることを努力していたように思う。しかし、日本もジェンダー規範の強い国であるから、自分たちの気づいていないところで「これは女（男）の自分がやるべきことじゃない」と、自分を抑圧してしまっていたかもしれない。それでも自分が得意なことや、やるべきことは、性別は関係なくやって良いということを少しでも示せていたら、私たちにとっても、アスラマの子どもたちにとっても

幸せなことだろう。

合気道を通じて学んだこと

9月1日にプリンビンサリ村を出発した後、高校生、大学生が過ごすアスラマに訪れ、交流会を行った。その際、少し時間が余ってしまい、通訳をしてくださっていたスィクラマさんに頼まれ、私の特技である合気道の技を披露することになった。しかし、私としては、空手、柔道という世界的にも有名な武道ができるメンバーがいるのだから、日本でもあまり知られていない合気道は見せる必要はないと考えていたため、合気道で着用する袴も持ってきておらず、頼まれたこと自体にとっても驚いた。交流会終了後、気になった私はスィクラマさんに「なぜ合気道をするように頼んだのか」と尋ねた。するとスィクラマさんは、「バリでは、子どもをバイクでさらったり、女性を狙ったりする犯罪が多いから自分で身を守るように対処法を教えてあげて欲しかった」と話してくれた。インドネシアを訪れてから親切な人々ばかりに出会っていたため、そのような犯罪が行われていることが想像できなかった。合気道というのは護身術として知られている。胸元を掴まれたとき、後ろから手首を掴まれたときなどの際に、どのように動けば自分より力の強い相手から離れることができるのか、あるいは倒すことができるのかを追究しているため、身を守ることに特化した武道だといえる。日本で合気道を習っていることを話すと、「女の子でも身を守るようになるし安心だね」と言われることも多い。日本は確かに犯罪の少ない安全な国なのかもしれないが、犯罪の被害内容によっては「夜道を1人で歩いていたらだ」とか「そんな服装をしていたからだ」等のパッシングを受けることも多い。そのため、パッシングから身を守るためにも自己防衛を求められることが少なくない。しかしながら、インドネシアを訪れ、互いに支えあって生活しているアスラマの人々を見ると、自分の身は自分だけの力で守らなければならない、という考え方をしているようには思えなかった。インドネシアで過ごした2週間、周りの人と助け合いながら生活するのが当

たり前だという信頼感と安心感が満ちているように感じていた。それでも被害者側に自衛を求めなければならぬのは、それだけ犯罪件数が多いのだろうか。人も車もバイクも多い国であるから、助けを求めている人のもとへすぐに駆け付けるのが難しいのだろうか。それとも、インドネシアでも被害者へのパッシングがあるのだろうか。日本とインドネシアでは事情が随分と違うので、より学んでいかなければ分からないが、私が見たインドネシアとはまた違った一面を、合気道を通じて知ることができた。これからの勉強へのモチベーションになる貴重な経験だった。

まとめ

結論として、インドネシアワークキャンプに参加して良かったと心から感じている。ワークキャンプと一緒に参加した学生をはじめ、引率してくださった先生、職員の方々、現地で支えてくれた方々、アスラマの子どもたち等々、本当にたくさんの人にお世話になった。感謝してもしきれない。たくさんの人に出会って、たくさん人の優しさに触れることができたからこそ、どんな人たちがどのような環境でどのように生きているのかを、より真剣に考えられるようになった。勉強することは、その人たちを少しでも知るための手助けになるものなのだと、改めて痛感した。また、普段大学生活の忙しさに飲みこまれていた私にとって、ワークキャンプの中で、ミーティングをくり返し、自分を見つめなおす時間をとれたことも貴重だったなと、しみじみと感じるようになった。これからも忙しい日々が続いていくが、インドネシアのジェンダー事情や犯罪事情など学びたいこともできたので、精一杯勉強をして、再びプリンビンサリ村を訪れたい。

初めての海外

国際教養学部 1 年次生 馬場 絢子



はじめ

8月21日～9月3日までの14日間、私はインドネシアのバリ島にあるプリンビンサリ村に滞在した。私がこのIWCに参加しようと思った理由は、大学生になったらいろいろな国に行ってみたいと考えていたからである。しかし、今まで海外に行ったことがなかったため、比較的簡単に行くことができる大学のプログラムに参加しようと考えた。たくさんある海外プログラムの中で、ボランティア活動に興味があったこと、将来教師になりたいと考えており、そのために子どもと交流する機会がたくさんあること、日本とまったく異なる文化を経験できることに惹かれ、参加したいと思った。大学生活が始まってすぐに第33回IWCに参加するメンバーとの初顔合わせがあった。しかし、誰1人として知っている人はいなかった。言葉が通じない、まったく知らない土地で、2週間という長い間、一緒に過ごさなければいけないメンバーが誰も知らないという状況は、私にとっては絶望的だった。当時は、とにかくメンバーと仲良くなろうと必死だったことを覚えている。しかし、学年も学部も違う人ばかりで、火曜日の昼休みに行っていた事前研修でしか顔を合わさないメンバーも少なくなかったため出発時に他のメンバーと十分に仲が良いというわけではなかった。初めての海外で、初めてのホームステイといった「たくさんさんの初めて」の経験に対する不安と、自分に

とって未知の国に行くことができる、新しいことに挑戦できるかもしれないという大きな期待が入り混じっていた。

インドネシアという国

このIWCに参加する前は、場所もあやふやでわからないほど、私にとってインドネシアは観光地であるという知識以外未知の国だった。しかし、事前研修でインドネシア語や人口、宗教、文化を学ぶにつれて、インドネシアは東南アジアに属する開発途上国のひとつで森林が多い国というイメージをもったが、具体的には想像できなかった。現地での取り組みなど楽しいことだけではなく、狂犬病やデング熱など、発病すれば死ぬ可能性がある病気にかかるリスクが日本よりも高いと知り、行きたくないと思った時期もあった。

実際にデンパサールの空港に着いてみると、空港はとても広くてきれいで日本とあまり変わらないように感じた。しかし、一步空港の外に行ってみると、そこはまったくの別世界だった。まず驚いたのは、自動車とバイクの数である。空港の前という理由もあるのかもしれないが、たくさんの車とバイクが渋滞を作っていた。日本のように交通ルールが厳しくないのか車線を気にせず走ったり、当たり前のように何台もバイクが歩道を走っていたりと少し怖さを感じた。ヘルメットをつけずに運転していたり、制服を着た女の子が運転していたりと日本では絶対に見ることができない光景ばかりだった。私たちが乗っている小型バスの横ぎりぎりを、4人乗りをしたバイクが猛スピードで通り抜けていった光景は今でも忘れられない。

ホテルまでの短い道中で他にも、信号待ちをしている車の間を通過して、光るおもちゃのようなものを売っている人がいたり、町の至る所にインドネシアの国旗が掲げられていたり日本との相違点をたくさん発見した。しかし、異なる点ばかりではなく、ピザハットやケンタッキー、サークルKといった日本でもなじみ深いお店も多数発見することができた。日本と異なる点を発見することで海外に来たという実感が増す一方で、まったく

知らない世界にきてしまったのではないかという不安もあり、見慣れたお店やものを見つけることで安心している自分がいた。

ホテルに到着し、一緒に活動するディアナ・ブラ大学の学生6人が私たちを出迎えてくれた。インドネシアの学生はとても英語が堪能で、たくさん話しかけてくれたのに、聞き取ることができなかったり、答えたいけど英語がわからなかったり、同じ大学生なのにどうしてこんなにもできないのかととても悔しく思った。それでも拙い英語やジェスチャーを使い、時にはケータイの力を借りながらも楽しく夕食の時間を過ごした。

翌日、日本総領事館を訪問し、最近のインドネシアの情勢について教えていただき、その日の夕方頃にプリンビンサリ村に到着した。児童養護施設の子どもたちと聞いていたので、元気がなくて暗いイメージを持っていたが到着した私たちを出迎えた時、素敵な笑顔で挨拶してくれてとても驚いた。日本にいたときには、私はインドネシア語を話すことも理解することもできないので、言葉が通じない子どもたちとどうやってコミュニケーションをとればいいのかすごく悩んだ。しかし実際はそんな心配なんてまったくの杞憂で、子どもたちの方から私の方にやってきて話しかけてくれたり、手を引いて遊んでいる輪の中に連れて行ってくれたりと積極的で、反対に私が戸惑ってしまうくらいだった。

子どもたちは人懐っこくて、挨拶をすれば必ず返してくれるし、学生たちに「あなたの名前は？」と聞いて回って、何度も繰り返し呼んで私たちの名前を覚えようとしてくれていた姿が印象的だった。

子どもたちとの遊び方は様々で、バレーやバスケット、サッカーといった馴染み深いスポーツをしたり、インドネシアの歌に合わせた手遊びを教えてくれたので、それを覚えて一緒に遊んだり、鬼ごっこのようなことをして遊んでいる人もいた。その中で驚いたことは、アスラマの子どもたちがアルプス一万尺という日本の手遊びを知っていたことだ。日本語の歌詞を覚えて遊んでいるのをみて、日本から遠く離れた土地でも共通の遊びがあるこ

とに驚き、日本語を少しでも身近に感じられる遊びがあることに嬉しさを感じた。

村の人はとてもフレンドリーで、日本で知らない人から挨拶されたら変な目で見られてしまいがちだが、村の人々は私たちの挨拶に必ず笑顔で返事してくれた。村で過ごす時間は、いつも時間に追われている日本で生活と違って、とてもゆっくりと流れているように感じた。

印象に残ったこと

アスラマでの活動中にとても印象に残った出来事がある。私はいつものように子どもたちとボール遊びをしていた。子どもたちの中では特にボールで遊ぶことが人気なのだが、ボールの数が少ないため、1球につき子ども5～6人と遊ぶのは当たり前だった。年齢も性別も異なる子どもが混じって遊ぶので、みんなが楽しめるようにと気をつけていたが、1人の幼い男の子にボールがあまり回らず、そのことに対して泣き出してしまう場面があった。そこで、その時ボール遊びをしていた学生が私1人で、慰めようとしたがインドネシア語が話せないで、ただ通じないとわかっていながらも日本語で声をかけることしかできず、困っていた。すると、周りで遊んでいた子どもたちがやってきて、その男の子にボールを渡したり、何もできない私の代わりに声をかけてくれたのだ。そのおかげで、男の子は泣き止み、またみんなで楽しくボール遊びを始めることができた。私はただ声をかけてくれた子どもたちにお礼を言うことしかできなかった。アスラマでは子どもたちの喧嘩が起きた際には子ども同士で解決すること、年上の子が年下の子どもの面倒を見ることが当たり前になっていてとても驚いた。アスラマでの生活のひとつひとつに子どもたちが将来自立していくための工夫がされていた。

話し合うことの大切さ

メンバー仲良くなることが出来たのは、毎日行われたミーティングのおかげだと私は思う。毎日夕食後、図書室に集まり5～6人の班になってその日のプログラム・活動で感じたこと、今日一番

の思い出などを班ごとに話し合った。人前で話すことが苦手な私にとっては、最初の頃はこの時間がとても嫌いだった。しかし、他の人の感想を聞くことで自分の知らなかった出来事を知ることが出来たり、同じ物事に対しての見方や考え方が違ったり、どんな風にこのワークキャンプをしていきたいのかなどを知ることができ、自然とより深く話し合うようになった。ミーティングの時間だけでは足りず、他のメンバーと日中の空き時間やホームステイ先に帰る途中に話し合ったり、帰ってからもその日出た意見について同室の愛さんと真剣に話し合ったことは、今でもとても良い思い出である。始まったばかりの頃は、メンバーそれぞれが思っていることをお互いに打ち明けられるような関係になるとはまったく思っていなかったで、これまでの日々を通して自然と親密な関係になっていたことに驚きと嬉しさを感じた。

まとめ

今回IWCに参加したことで『百聞は一見にしかず』という言葉をもっと実感した。実際に行ってみることでより理解が深まり、また違った発見が出来るということを今回の活動中に何度も経験したからだ。何より大切に感じたのは、協力することの大切さである。今回のプログラムでは、日本とインドネシアの学生のどちらかが欠けていれば成功はしなかった。しかし、どの取り組みも大きな失敗無く成功することが出来たのは日本の学生は頑張っって伝えようとし、インドネシアの学生は理解しようと努力するなどお互いの協力があつたからこそではないかと思う。

さらに今回の活動における2週間は私にとってとても長い時間だと思っていたが、実際に過ごしてみるとほんの一瞬だった。そのように感じたことから、残り3年半の大学生活もあっという間に終わってしまうのではないかと考えるようになり、これからの大学生活の過ごし方を真剣に考える良い機会にもなった。これらの経験を活かし、これからの大学生活をより充実したものになりたいと思う。

MY MEMORABLE EXPERIENCE

I Gusti Made Dwi Wahyudi Wibawa



At first time I signed up to participate in IWC program, my intention was not for practiced my Japanese, but it was fully for holiday. However, when I arrived in Blimbingsari my first intention gradually changed. I was forced to learn Japanese and speak Japanese because all students were speaking Japanese. It made my interest to Japanese language is higher and trigger me to improve my Japanese until now.

The second reason I participated in the program to have new friends from Japan. I never imagined what kind of activities and works we would do during the international camp, because I haven't participated in volunteer work. The third reason I participated with this year's IWC because I want to learn more about Japanese people and the culture

This is the first day of IWC I'm very excited to meet Japanese friend for the first time, but I scared because I can't speak Japanese fluent and I only know a little about Japanese language. I really nervous when the first time I shake hands with Ko Chang, and I don't know what should I say. When we ate dinner Mr. Suikrama gave an instruction for Indonesian student to blend in with Japanese

student, again I'm so confused what should I say, what I should I do, and I decided to just be myself, just be brave. I feel the change within myself, when I brave the situation turn my nervous into ability to interact with Japanese student.

The second day we visited Japanese Consulate General, it was my first time to stepped my feet in at the consulates office. It was interesting but I almost didn't understand what we were discussing there. Went to Blimbingsari is not my first time because I am familiar with the area. Because of the long trip, I was observing everyone's sleep faces and it makes me realize that I will stick together for few weeks with them and I will try my best to spend my time with my new friend. Through observing at people's faces in the car cause me not forget even one of them.

The third day, we started the volunteer work, I imagined when we work it will be dirty so that we have prepared to bring training pants. I'm very happy because Japanese student so kind with me that's make me comfortable to talk and interact with them. I'm very happy when we moved the rocks to build a wall, we made 1 line and we moved so many rocks. The moving rock was not only the rock is moving, but we learned about Indonesian and Japanese vocabularies. It was really hard but I'm so excited to know more about Japanese. Not only learning language, but I also learn how Japanese do their job, I surprised when I was at homestay, I saw Ko Chang use a work clothes, because all Indonesian student just use shirt with training pants to work. I do realize Japanese are wearing work clothes when they are working, and they will wear other clothes when they are not working.

The most pleasant day during IWC on the

exchange party was held. I surprised when Taiyo called my name. I was confused what will Taiyo say to me, Taiyo want me to be MC in exchange party, that is really surprised me because I think my Japanese and my English not really good but I don't think too much. I said "yes I can" to Taiyo. Kento, Taiyo, Clara and me decided to practice MC at 2 o'clock, there was funny moment before I go to orphanage, I almost late so that I took bicycle because I will be faster to arrive but I don't check the bicycle and the brake is broken. When I go out from my home stay I almost fall when riding bicycle because the bicycle go so fast and I can't control it, that was so funny and I can't forget it. I'm so nervous when the exchange party ready to started, I scared I can't do my best, I finished the exchange party and I success to be MC with Clara, Kento and Taiyo. I'm so happy.

The Sunday service after breakfast we went to Church, that was the first time I heard Japanese sermon, that's awkward but very interesting. After church we have a free time with our host families, before I spend time with host families I go to fotocopy with eric after that I go to Ami and Kathleen's house, when I arrive there I can speak a lot with Ami and tell many things with Ami and shared many story and common things with her. She is like my sister so that sometimes I call her sister not her name. I remember when Indonesian student play basketball versus Japanese that was really exciting. The next day I got a different volunteer work again. We teach an elementary student. After breakfast we went to elementary school, we were divided into 4 teams. My team was Yuya, Taiyo, Ai and Mei we teach karate and ninin baori. When I teach I remember when I was in elementary school. I feel very happy

because the children although they live in village and live in the orphanage they are always happy, I proud of that, different like me, my life is better than them but I always complain and feel this is not enough. After we teach an elementary student I introspected myself to always be grateful to what we have and I should always thanks to God for always blessing me.

Next day, we went to junior high school at Melaya to teach again but we ride truck, it was a new experience for Japanese student but for Indonesian especially me it is not my first time. There is value I got when we in the truck, it teach us to be a simple person. When we arrived at junior high school Melaya, I'm very concerned to the situation, because there was only one class left and it was a third grade, I was disappointed. This is the only class in the school, there are no first grade nor second grade. It was because the school has no enrollment. This class was the last class the school will teach. Its very sad to know the reality, but all the children was very happy to see us in their school, all of them happy no one sad it's made me very excited to teach them and bring a happiness to all of them.

We prepared to make a dinner for all children in the orphanage and host families. We make a Japanese food, all of us have a different job, my job was sliced the vegetables for the 'Kare' I sliced the vegetables with Mio, Risa, and many people, I forgot their name. It was my experience making a Japanese food. I'm happy can make a food for all of children because when all of them ate and show their happy face that's make our effort was worthed and we feel very valuable. I was very happy when the host families ate their dinner, all of them say it was very delicious. Again, I introspected myself to

always be grateful for what I have.

I really sad when I realized the IWC was almost done. The last night at Blimbingsari, many memories that I have made in Blimbingsari with all of the IWC member, I will miss our togetherness, many activities we did together until I feel like have a new family and this family made me learn many things about life. The last night we at Blimbingsari there was a farewell party for the host families, the farewell party was so simple for me but meant a lot, the Japanese IWC member made a letter using Bahasa Indonesia and I like the spirit that they show when wrote letter.

Last day on IWC, I can't sleep well because I always thinking about IWC will going to be ended and I don't want IWC is done because I really like to meet the Japanese student because they are so kind and always care to me. We went to the Synod GKPB office to evaluate about the program whether in the orphanage or others. Finally, student farewell was the last event of IWC, I was really sad and I didn't realize that I cried. The feeling of togetherness and gratefulness struck me and I don't know when will be happening again with my Japanese and Indonesian friends.

I never expected the IWC will be the greatest moment for my life, but the chance given by the participated in the program changed my life, my perspective, and how I think. I learn many things on IWC, I learn how to always grateful for what God has given to me and not to always complain if there is any problem but we must give the solution and solve that problem

Last, I hope Undhira can make a better promotion, clearer information and persuade the students because I think the students didn't know much about IWC. Please give the

student a lesson about Japanese language maybe 1 week or 1 month before the IWC started. Give the clearer information what must the student prepared to bring to IWC.

Indescribable Feelings

Luh Ayu Puspita Dewi



When the first time I heard about IWC program, I feel really excited that I have to join this program because I can have friends from other country. This is my first time joining international program, there will be a lot of experience and lesson that I will get. Language, culture and knowledge about small things in Japan. For me, there is a lot of fun knowing the culture of other country.

The first day was very stressful because it was the beginning of meeting between Indonesian friends and Japanese students. The first thought was, how can I communicate with them? What if the Japanese students would not accept us? But apparently, they are so friendly even our language is different. We are struggling to understand each other, using body language and sometimes with google translate.

Then in the fourth day, when we have schedule to teach the children in Elementary school. We were separated in teams and each team set the games that will be played with the children. Besides us, the children feel

really happy and excited at that moment because we can play together. Tired feeling is gone coincide this togetherness.

And a day before farewell, when all of us spend the most time with the children, accompany the children, play with them. Everyone knows that was our last time together, so everyone uses their time well so that there will be no regrets.

In this program, the reality passes my first expectations. Besides experience and knowledge, I got new friends that becomes a new family also. They are really kind, really friendly, cheerful. They help others with pleasure if they know we are in trouble. They also willing to share about discipline, neatness, and usual hygiene in their country.

Give more information and clearer about IWC program to Undhira students. Includes detail information about activities in the IWC program, preparation that we have to do and Japanese training for the selected students for few weeks before the program.

Valuable Experience

Putu Eric Darhendra



This is my first time to follow such activity, I have new friends especially different

countries is very interesting for me. So my reason chose to participate in this program is to increase my new experiences, hopefully after join this IWC program I would like to participate in another activities similar like this.

I am writing my daily activities as bellows:

Day 1 (21-08-2019)

The first day is where the day I first met my friends from Momoyama Gakuin, a tense day and fun because I can only speak a little Japanese language but student from Dhyana Pura University keep trying to communicate with friends from Momoyama Gakuin University and the result is that our communication still good because each other is very enthusiastic.

Day 2 (22-08-2019)

The second day, the activity started with breakfast together and continued with the journey to the consulate of Japan, communication with friends from Japan getting better. They are friendly, funny people and also enthusiastic in knowing and learning Indonesian Language. Then we continue the journey to Blimbing Sari village to starts our activities. When we got there the village was good, the people were friendly and there were lots of funny children in Institute Widya Asih.

Day 3 (23-08-2019)

The third day begins with activity Opening Ceremony IWC 2019, this is the first time we have started work. I have Takuya from Momoyama is my room mate, I learn many lessons of Japanese, we know each other's daily lives and it was very fun. Continued with arranging bricks together at work, the team from Dhyana Pura and Momoyama more

compact and getting to know each other better.

Day 4 (24-08-2019)

The fourth day continued with returning to work, it was a little tired but thanks to friends who always cheering up their spirit and make me excited again. At night we continue with an Exchange Party. We enjoy the event of showing performance from Japanese and Indonesian student. Event that displays performance from team Momoyama and team Dhyana Pura, we very enjoy this event because here we learn each other culture.

Day 5 (25-08-2019)

The fifth day the activity begin with going to church in the village area Belimbing Sari for pray together. On the fifth day there are not much activities, here we spend more time together with friends from momoyama, dhayana pura and also with children Panti Asuhan Widya Asih. This is the moment I will never forget, on the fifth day I gather with some friends from Momoyama and also Dhyana Pura in one of the house family accompanied by Verran and Ami. There we share laugh while tasting typical food from Bali that is Rujak, with Veran, Ami, Adi, Mei, and also Puspita. And I get a chance to invite my friend from Momoyama that is Ami to get around the village use the motorcycle belongs to one of the residents that I borrowed. It was the best moment that I will never forget.

Day 6 (26-08-2019)

The sixth day we continue with gardening activities. Very exciting because Dhyana Pura students can teach students from Momoyama how to farming. And continued with the activity meeting about our next activity that is

teaching elementary school children although we no have experience teaching elementary school children but we still optimist and keep spirit in preparing everything.

Day 7 (27-08-2019)

We go to one of an elementary school, welcomed with enthusiastic and very happy children. We divided students into team, and we are team A that are Ami, Kento, Takuya, Arisa, and I. We start teaching children together of how to make decorations from origami paper, children are very enthusiastic and happy.

Day 8 (28-08-2019)

Today we continue to teach Junior high school, very exciting moments, we ride the truck together to go to Junior high school, very exciting and fun because can see happy expression from Momoyama friends eventhough the sun blaring on our skin.

Day 9 (29-08-2019)

The activities start with cooking together. We cook for the invited host family to have a dinner. The day seems fly so fast.

Day 10 (30-08-2019)

We begin with meeting evaluation, talk to each other about memorable moment and what things must be fixed. After meeting during the day we continue to work and continue for make use the remaining time with friend from Momoyama and also children from panti as much and memorable as possible.

Day 11 (31-08-2019)

In the morning we go to the Village Ambyarsari to see the process of making special fermented drink from Bali that is called

tuak and also see the process of making Balinese palm sugar. We continue the day by working and writing each other name from both countries that we have been working on this program. Then in the evening, we continue with a closing ceremony with the Host family, I feel very sad, happy mixed into one feeling. I feel this way because for eleven day we stay in Blimbingsari and tonight is the last day.

Day 12 (01-09-2019)

The last day we were at Village Belimbing Sari, we all said goodbye to host family each other, and continue the journey to go to Panti Asuhan Widya Asih Denpasar. There we enjoyed the days leading up to the last day with friends from Momoyama Gakuin which will be soon depart to return to Japan, the sadness feeling begin and I try my best to keep it cool at all times even I am so sad to let go the Japanese. The friendship of all students mean a lot to me.

Then we continue the journey go to Beach Temple Tanah Lot, there we are from friend of Dhyana Pura given a chance to invite friends from Momoyama to see the beautiful view Temple Tanah Lot. After that return to Hotel Puri Saron for meeting and rest.

Day 13 (02-09-2019)

This is our last day together, we accompany Japanese students to do shopping in Mall Bali Gallery, then in the afternoon we gather together to say goodbye to each other. Japanese friends give each other letters to Indonesian friends, there we were really sad because we have to be apart but understand we have to continue with our life and studying. I hope to see them again.

I am really thankful to participate in this

program, I changed my perspective after the program of how to be thankful, how to cherish each other when the other feel down, learn many valuable things through the language, through the activities, and how we are not taking the given talent/skill to bless others, and the last one is paying attention to the very details.

My conclusions and suggestions are preparation for Japanese language it should start from a month before the activity starts, so that we can prepare with small vocabulary.

The Widya Asih foundation food portions for children and also nutrition from food which needs to be improved, and we need to teach children to throw rubbish at the designated place.

Here is my best picture during the program that I value the most.

The Most Unforgettable Experience

Fortunata Pascalia Clara Bethesda Sigit



The main reason I joined this year's IWC was to practiced my Japanese, now I'm learning Japanese but I never practice my speaking skill. The second reason is I want to have new friends from Japan. Before, I never imagined what kind of activities and works we

would do. Because I never participate in volunteer work that's why the third reason I participated with this year's IWC was for have more experience.

2019年8月21日（水）

初日に、私たちはホテルに集まりました。後で、土曜日交流会のためにパフォーマンスを練習しました。あの時は私たちの最初の練習です。

練習後、私たちは桃山の学生の到着を待ちました。本当に緊張しました。

7時ごろに全ての学生、先生、スタッフと晩御飯を食べました。私は愛ちゃん、龍馬くん、之介くんとたくさんのものを話しました。アニメ、マンガ、ドラマ、などのような。日本語で話すことができました本当に嬉しかったです。

後で、ミーティングした。ミーティングで各学生は自己紹介をしました。

2019年8月22日（木）

二日目に、私たちはプリンピンサリに行きました。アスラマに到着した後、私たちは子どもたちに歓迎されました。子どもたちはすぐに私たちを遊びに誘いました。子どもたちはとても可愛くて優しいです。

IWC中のルームメイトは愛ちゃんとあやちゃんですけど、ミスコミュニケーションがあったので、おばあちゃんの家泊まったのは私と愛ちゃんだけでした。

晩御飯を食べた後で、図書館でミーティングした。

There is a funny story on the second day. After meeting, we went back to our house. When I took shower, I cleaned my make up first. But when I'm going to wash my face, suddenly the electricity at grandma's house shut down. I was so panic at that time, it's very dark and my mind going wild. I imagined that ghost will suddenly appear in front of me. Then, I heard grandma's room opened and she turned out the electricity. After that I went back to my room and the reason the electricity

shut down was because Ai used her hair-dryer and the voltage of her hair-dryer weren't compatible with grandma's electricity capacity.

2019年8月23日（金）

三日目に、私たちはボランティア仕事を始めました。仕事前に、IWCの開会礼拝を行い、最初の石を敷きました。私たちの仕事はリレーで石を動かしました。

仕事のときに、桃山の学生とたくさん話しましたのために本当に嬉しかったです。

石を動かしながら新しい語彙を勉強しました、そして私も佑也くん、之介くん、美緒ちゃんにインドネシア語の語彙を教えました。

昼御飯を食べる後で、日本語を勉強するだから私は図書館に行きました。それから美緒ちゃんが着ました、私は美緒ちゃんにインドネシア語を教えました。その後、佑也くん、芽衣ちゃん、之介くんと理沙ちゃんは私たちに加わりました。

彼らに日本語を教えることができてとても嬉しいです。

いつものように晩御飯を食べる後で、図書館でミーティングした。

On the third day, a funny thing happened again. When I'm going to take a bath, I saw my wrist and realized that my watch wasn't on my wrist. I was so panic and told Ai that I forgot my watch. Ai helped me by announced it to other IWC's members, asking if they see my watch. Then, I decided to go back to Asrama and Ai decided to follow me to the Asrama. For information, the distance from grandma's house to asrama is a little bit far. During our way back to Asrama, I touched my pants pouch and felt like something was on my pouch. Then I checked my pouch, AND MY WATCH WAS ON MY POUCH. I told Ai and she was relieved because I didn't forget my watch.

2019年8月24日（土）

4日目は一番楽しい日です！昼御飯を食べる後で、私は他のディアナブラの学生と一緒に交流会のパフォーマンスのために練習しました。練習中にたくさんの面白いことが起こりました。

昼休み後で、私はアスラマに戻りました。アスラマで私は健斗くん、大陽くん、アディとMC之交流会のために練習しました。

後で、安梨沙と手洗いのビデオのMCを練習するために図書館に行きました。

それから交流会がやっと始まりました。ウダヤナの学生がいましたから私はほんまに緊張しました。聴衆は子どもだけでなく、ウダヤナの学生もいたので、とても緊張しました。

交流会中に全てが順調に進みました。MCとパフォーマンスがスムーズに実行しました。

MCは難しいですが本当に楽しかった。

2019年8月25日（日）

朝に私たちは協会に行きました。協会の後、ホストファミリーと一緒に活動していました。私は服を洗濯してから愛ちゃんとあやちゃん一緒に庭を掃除しました。

掃除中、あやちゃんは「Gemu Fa Mire」を演奏しました。本当に吃驚した。あやちゃんは「Gemu Fa Mire」は好きと言いました。

晩御飯を食べる後で、私、美緒ちゃん、アディ、佑也くん、エリック、大陽くんはAKB48とJKT48について話しました。

2019年8月26日（月）

明日の学校訪問のためにゲームの準備を始めていました。明日は小学生とフルーツバスケットをします。その後、之介くんとバドミントンをしました。とても楽しかった。今日は子どもたちとたくさん遊びました。私、みなさん、子どもたちとドッジボールをしました。子どもたちと遊ぶことができてとても幸せでした。

2019年8月27日（火）

7日目は学校穂門の日でした。私たちは小学生

とフルーツバスケットを遊んでたらダンスした。本当に楽しかった。昼休みときに、私はモニカちゃんから思い出本をもらいました。モニカちゃんはとても可愛くてやさしいです！モニカちゃん大好き!!

2019年8月28日（水）

8日目は一番面白い日でした！私たちはトラックで中学校に行きました、そしてそれは私の最初の経験です。中学校にいたとき、フルーツバスケットを遊びました。中学生はとても面白かった、私はたくさん笑いました。後で、私たちは中学校の近くのアスラマに行きましてから小さなツアーをした。

2019年8月29日（木）

この日に、ホストファミリーやアスラマの子どもたちと晩御飯を食べるのために私たちは一緒に料理した。カレー、BBQとインドミを料理した！料理後で、私、キャスーリン、子どもたちと推測を遊びました。プリンビンサリには数日しか残っていなかったので、私はとても悲しかったです。

There is a funny story too in this day! At afternoon break, I was slept at room 3 with some of the students. I slept in one bed with Kathleen and Adi. Meanwhile Risa, Chinatsu and Mei were in other bed. The funny things was I slept under Kathleen and Adi feet, and Adi accidentally hit my neck.

2019年8月30日（金）

プリンビンサリで8日目。朝ごはんを食べる後で、私たちは各グループで評価を実施しました。評価中、私は他のディアナブラの学生とアイデアを交換しました。IWCの最終日に評価結果を発表します。

晩御飯前に、私はモニカちゃんから人形をもらいました。本当に嬉しかった！ありがとうモニカちゃん～。

ミーティング後で、ディアナブラの学生は一緒にラーメンを食べて、話して、笑いました。マジ楽しかった!!

2019年8月31日(土)

9日目。私は愛ちゃん、あやちゃんと非常に早く起きました。黒糖を作る過程を見るのために6時にアンビアルサリに行きました。9日目はプリンビンサリで昨夜です。私たちは閉会礼拝をして、ホストファミリーと晩御飯を食べて、子どもたちと遊びました。

晩御飯後、私はエヴァちゃんから人形をもらいました。本当にありがとうエヴァちゃん!!

2019年9月1日(日)

IWCの最後の晩です。私たちはTanah Lotに行きました。後で、ホテルに行きました。

ホテルにいる間、私たちは会議室の建物で評価を提出する準備をしました。後で、私たちは一緒にコンビニ歩いた。夜に、私は全ての桃山の学生のために手紙を書きました。

I tried my best to write the letters with Japanese and I hope they could understand my letters. LOL.

2019年9月2日(月)

それはIWCの最後の日です。私たちはディアナブラに行きました。ディアナブラでディアナブラや国際プログラムについての説明を聞きました。それから、Gedung Sinodeに行ってから評価の結果を提示しました。夜に、私たちはMatahari Mallに行きました。一緒にショッピングしてから晩御飯を食べました。食べた後に、私たちは手紙を交換しました。悲しすぎ (T_T)

空港にいる間、私は之介ちゃんと龍馬ちゃんとたくさん話しました。そのご、ディアナブラの学生と桃山の学生は分離しました。みなさん、さよなら!! また来年～ (・ω<)☆

I used to dislike children, because for me children are very annoying. But after I joined this year's IWC I started to like kids. From this event too, I learnt to be more grateful about everything I have. When I saw the kids sleep in their room, my heart hurts. It hurts

because I think about their lives that are totally different with my life when I was a little kid. When I saw them studying, I felt rebuked to be more diligent on my study. I'm very happy that I've made a great decision to joined IWC.

I think it would be better if two weeks before IWC there is a Japanese lesson for the members from Dhyana Pura, at least twice a week. So we can speak basic Japanese with the Japanese students.

Best Experience

Veranata Kathleen Teller



First time I heard about Work Camp program, I said to myself that I have to join the program. I have my own expectations about what am I going to do in IWC. I thought I'm going to help to make small buildings in a small village with Japanese Students for 2 weeks and that's sounds interesting. I want to have the experience. The chance is here and I have to take it. I hope I can learn a lot from Japanese Students in this program.

Here comes the day. I met the Japanese students and I'm so happy because everybody looks excited and friendly. We just need 2

days to know each other and become like family. We play together, laugh together, work together, helping each other, learn together. Even we can't speak with the same language but it doesn't stop us to communicate. We are still one, as a family, at least that's what I feel.

I have 3 main things that I will always remember. First, I learn about orphanage. There are many things that I can learn from the children. I learn that even you start a hard life its doesn't mean that you will have a bad life. The children make their own beauty in their life. Make their own path of life.

Second, I feel like I am the part of the family. At the first time I worked, its feel weird because I never do really work, we use small energy like sharing the fatigue together. All of them really kind. They put others before themselves. They always help others even they are not really sure whether they can help or not but they try to help. Like while we work, they are willing to be more tired so the other friends can rest for a while.

Third, based on the experience, every person in IWC looks cheerful. I think, we have something, like dark side that we don't want to show. Close it so tight, so the others can't see. That's why we look so cheerful all the time. But I think, sometimes you can share what you really feel to others. You need to know happiness without hiding anything. Real happy. We are here, together, to learn together and help each other.

Once again, I really happy to have this memory in my life. I learned a lot in IWC. I feel more grateful after the work camp. Thank you so much for the memory.

Last, I hope Undhira can make a better promotion, clearer information and persuade the students because I think the students didn't know much about IWC. Its very

unfortunate to missed IWC. They have to know that they can have the most important experience. I think is possible, Widhya Asih can tell us when we can join the children activities like Lunch time or Dinner time because I feel I want to have more time to accompany the children.

Best Experience

Matius Lende Bili



I heard about Work Camp program, I said to myself that I have to join the program. I have my own expectations about what am I going to do in IWC. I thought I'm going to help to make small buildings in a small village with Japanese Students for 2 weeks and that's sounds interesting. I want to have the experience. The chance is here and I have to take it. I hope I can learn a lot from Japanese Students in this program. Here comes the day. I met the Japanese students and I'm so happy because everybody looks excited and friendly. We just need 2 days to know each other and become like family. We play together, laugh together, work together, helping each other, learn together. Even we can't speak with the same language but it doesn't stop us to communicate. We are still

one, as a family, at least that's what I feel. I have 3 main things that I will always remember. First, I learn about orphanage. There are many things that I can learn from the children. I learn that even you start a hard life its doesn't mean that you will have a bad life. The children make their own beauty in their life. Make their own path of life. I feel like I am the part of the family. At the first time I worked, its feel unique(?) because I never do relay work, we use small energy like sharing the fatigue together. All of them really kind. They put others before themselves. They always help others even they are not really sure whether they can help or not but they try to help. Like while we work, they are willing to be more tired so the other friends can rest for a while. Based on the experience, every person in IWC looks cheerful. I think, we have something, like dark side that we don't want to show. Close it so tight, so the others can't see. That's why we look so cheerful all the time. But I think, sometimes you can share what you really feel to others.

You need to know happiness without hiding anything. Real happy. We are here, together, to learn together and help each other. This is us who don't know tired of doing activities for two weeks to build a moment together in widya asih.

Once again, I really happy to have this memory in my life. I learned a lot in IWC. I feel more grateful after the work camp. Thank you so much for the memory.

I hope Undhira can make a better promotion, clearer information and persuade the students because I think the students didn't know much about IWC. It's very unfortunate to missed IWC. They have to know that they can have the most important experience. I think is possible, Widhya Asih can tell us when we can join the children activities like Lunch time or Dinner time because I feel I want to have more time to accompany the children.

through these photos I will not be able to forget the most beautiful memories with friends from Momoyama Gakuin University. Thank you very much.

第33回 IWCをふりかえって

第33回国際ワークキャンプ団長
チャブレン 宮 嶋 眞



本年は例年行われてきた、ワークキャンプの実施形態が変更（18日間から14日間への日程短縮、事前研修を金曜5限から、火曜の昼休みに行くこと、日本語プログラムの中止など）がなされたので、そのことによる変化や影響などにも触れるレポートとしたい。

4回目のIWC

私がこのキャンプに参加した最初は、ワーク開始30周年記念となるキャンプ（2016年）で、私自身も初めてで気負いもあったと思う。しかし、回を重ねるごとに、そうした余計なものが取れて、キャンパーのやる気を育て、その気持ちに寄り添うという方向に進んできたと感じる。今年も昨年と同様、キリスト教センターの年間テーマ「一歩踏

み出す勇氣」をキャンプのテーマとして掲げた。参加メンバー一人ひとりが、自分の世界から勇氣を出して一歩踏み出し、新たな経験、新たなチャレンジをしてほしいという願いは、かなえられたと思う。

このテーマは実は聖書に深く関わる言葉でもある。

旧約聖書の出エジプト記第3章。預言者モーセが神と出会う場面です。モーセは神の山ホレブで柴が燃えているのに、その柴が燃え尽きないという不思議な現象に気づき、「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう」と道からはずれて進みます。その結果彼は主なる神に出会うのですが、この道をそれる（ex 外+hodos 道）がそのまま出エジプト記の英語の名前Exodusになっています。道を外れることで神と出会う、自分が歩いてきた道から一歩踏み出すことで神に出会ったという預言者モーセの体験です。それは、エジプトで奴隷としての生活を続けていたイスラエル人が、そこから脱出し、砂漠での体験を通して「乳と蜜の流れる土地」カナンでの自立した生活へと一歩踏み出す歩みをはじめたことにつながります。

今年もワーク参加者それぞれが、自分の歩んできたいつもの道から新しい道、道の外へ一歩踏み出す（踏み外す？）ところからキャンプが始まったと言えます。

学生チームの選抜

参加申込書に書かれている志望理由を読むと、本当に色々な志、目標を抱いて参加者は応募してくれているのだと毎年思う。桃山受験の前から、IWCを目標としてしっかり持ってきてくれた人もいれば、友達に誘われるままにやや軽い気持ちでという人まで、。。。でも志望理由は色々あっていいと思う。

今年は96人の説明会参加者の中から、25人が応募してくれた。筆記試験による判定を経て、選ばれたメンバーは16名（男女8名ずつ）。結果的には1,2年生だけとなってしまった。当初リーダー的な存在としての3,4年生が一人もいないということについての不安が無いではなかったが、後述するように、それぞれの学生がしっかりと自分の役割を果たし、年齢が近いこと（先輩がいないこと）で遠慮なく意見交換が出来るグループとして成長できたように思われる。

事前研修

「根っこワークス」穂久氏の一日研修は、今回で3年目を迎え、講師の方もこちらの意図や学生の雰囲気などをよく理解していただいて、適切なチームビルディングのプログラムが実施された。事前研修が始まってすぐの土曜日に丸一日の研修として行われた。一人のメンバーが体調不良で参加できなかった。一人だけ乗り遅れてしまうのではと心配したが、参加メンバーの気遣い、サポート、そして彼女自身の持ち前の明るさもあって、その後うまくチームに溶け込めたと思う。

当日のプログラムは、チームで積極的に話し合い、協力しないと達成できない課題ばかりであったが、メンバーは最初こそ少し引込み加減であったが、次第に積極的に協力し、しかも辛抱強く取り組んでいったので、多くの課題は講師の想定をはるかに超える速さで、制限時間内に達成されていった。そのことを褒められることで、メンバーはさらに勢いづいて課題達成に取り組んでいたようである。

夕暮れになり、一人のメンバーが戸外での活動中に落し物をしていたことに気づき、室内に引き上げようとする前に捜しはじめた。本人は一人で捜しに行こうとしたが、あるメンバーの提案もあり、全員が捜すのを手伝い始め、その結果落し物はすぐに見つかった。この出来事は、とても印象的な出来事で、今年のチームが、お互いのことを思いやり、支えあう意味を理解し、実践してくれるだろうという確信を私に与えた。

事前研修は毎週火曜日の昼休みという限られた時間帯で行われた。今までは金曜5限90分間あったものを、昼休みの30分間にしたので物理的に時間が足りないことも予想され、引率側としては大変不安を感じた。それで、夏休み期間中の合宿を一日増やし、3日間とした。宿泊は従来どおり一泊とし、残りは一日研修とした。理由は、例年宿泊した晩は、夜遅くまで話し込んで睡眠不足になり、翌日の活動に影響が出ていたからである。インドネシア語の授業はこの合宿の三日間だけだったが、今年は1年次にインドネシア語の授業を受けていたもの2名がおり、また、短期間で、しかも出発直前の集中講義ということもあって、学生たちのモチベーションも高く、結果として、例年とあまり変わらないレベルの出来であったように感じた。今までは三ヶ月の事前研修中に90分授業を7回から10回、一週間に一度というペースで行っていたが、今年は格段に時間も回数も少なかったにもかかわらず、例年と同じ程度に日常の表現をマスターできたと感じられたということは、学習するにあたってのやる気や集中力の大切さを感じ、講師の先生に今まで本当に申し訳ないことをしていたと反省させられる。

結団式については例年、夏休みに入る前の事前研修最終日に行っていたので、結団式後に合宿が行われるというかたちだったが、今年は、いよいよ出発という合宿の最終日の昼休みに行った。学生隊長からの呼びかけで、一人ひとりが、キャンプでの目標を折り紙に書いて、礼拝でささげ、実行委員長の村上あかね先生から励ましの言葉をいただいて、より気持ちを高めることができた。

滞在期間の短縮とその影響

初めに述べたように今年から18日間のキャンプが14日間に短縮された。毎年参加している私にとっては、短くてあつという間のように感じた期間であった。しかし今年の参加学生にとっては、もともと初めての体験で比較の対象はないのでそのようなことはなかったと思われる。ただ、キャンプの中身が充実していることのゆえに、感想としては例年と同じように「あつという間」だったようだ。

現地プログラムの中で大きな変化としては、高等学校、看護学校を訪問して行われていた日本語授業が中止になり、残った小学校、中学校に関しても、交流中心のものに変わったということ。これに伴って、日本語授業の事前準備をせずに、アスラマ（施設）での交流会での出し物（ゲームや演舞）などを流用しながら、プログラムを組み立てることにした。学生の事前準備の負担は大幅に軽減されたが、日本語教師になることを目標として、このキャンプでの学校での授業体験を期待する学生には、やや物足

らない結果になったかもしれない。また、中止をした現地高校の関係者からは「なぜ、なくなったのか」と残念だという反応も聞かれた。

手洗いなどの健康・衛生指導については、毎年継続して行うということを昨年の実行委員会でも確認したため、しっかり準備をし、動画（覚えやすいように、インドネシア語の歌つきのものをHPから探し出した）を用意し、子どもたちに見せて練習した。また、キャンプ隊長が実演する手洗いの8場面の写真による指示カード（ラミネートカバー）をつくり、手洗い場に貼り付けるなどした。

ワークに関しては、作業する現場は移動したものの、昨年の活動とほぼ同じで、アスラマと隣家との境界のブロック塀づくりのお手伝い（基礎の石運び、セメント運び、ブロック運び）をした。また、子どもたちの日常のおかずに供するための野菜作り、種まき、苗植えなども行った。最後に、子どもたちへの好影響を願っての、アスラマ内のごみ拾い、周辺道路のごみ拾いも行った。学生の指摘にあるように、大人が捨てていると思われるごみも多数あり、大人たちから悪習慣を断つ運動をしていかねばならないと考えられる。子どもたちにはよい模範だったようで、ごみ拾い翌日にも、独りで自主的にごみを拾っている姿が見られ、学生たちも喜んでいた。

現地の人々との交流

今年は特に、色々な現地の人々との交流が盛んだったと思う。子どもたちとの交流はもちろんのこと、ホームステイの家族との交流も、インドネシア語の学びの時間が少なかったにもかかわらず、例年よりも深まっていたように感じる。学生が積極的に近づくよう努力し、家族との時間を大切にしていた。閉村式においても、それぞれの家族が別れを惜しんでくれる様子からもそれが感じられた。

インドネシア人大学生との交流についてであるが、プリンビンサリ村に入る前日に日本人学生の希望を聞いたところ、インドネシア人学生（6名参加）とペアでホームステイをしたいという希望者が6人以上あり、それだけ積極的に交流したいという意思表示があったのはとてもうれしいことだった。ペアではなかったが、インドネシア人1名、日本人2名という3人一組のグループでのホームステイにして、学生の希望に対応した。今年の学生の交流への前向きな姿勢を垣間見たように思う。

もう一つ特筆すべきは、ワークとしてブロック塀造りをお手伝いしていたとき、そこに数人のブロック積みの職人さんも一緒に働いていたが、暑い中汗を流して働く職人さんに学生の側から声をかけ、共に働く人として自然に受け入れていたことがあげられる。そのおかげで、職人さんとも和気藹々と仕事ができた。それで、職人さんのほうからも、休憩時間にヤシの木に登って、実を切り落とし、学生たちにヤシの実ジュースをご馳走してくれるなどの気遣いもいただいた。ワーク最終日には、出来上がった塀をバックに、一緒に記念撮影するなど、今までになく和やかにワークが行われたと思う。

また、キャンプ中盤から後半にかけて、ボランティアで、子どもたちの食事作りの手伝い、配膳や後片付けなどをアスラマの台所に入らせていただいた。最初はボランティアで始まったが、全員がやりたいということで毎食4人ずつの当番制にした。台所に働くイブ（おばさん）たちとの交流が深まったのはいうまでもない。そして日本食パーティーのときには、肉や鶏の下処理などを今度はイブたちが一緒に手伝っていただくなど大変助けていただき、大好評の夕食が出来上がり、写真を一緒に撮りあうなどの楽しそうな光景も見られた。

ふりかえり

夜、一日の疲れがどっと出る時間であるが、夕食後約一時間、毎日ふりかえりの時間を持った。各自ふりかえりシートに記入し、それをグループで分かち合った。学生たちからの提案で、日本人3グループ、インドネシア人1グループに別れ、それぞれ母国語での分かち合いを行った。そして最後の15分程

度、全部のグループが集まり、お互いのグループの中での代表的な意見、特にみんなに分かち合いたいことなどを発表しあい、それをそれぞれの言葉に通訳してもらった。インドネシア語に翻訳するときはスィクラマ氏、日本語に訳すときには森田先生にお願いした。それぞれ母国語への通訳であり、通訳する側も半分の時間となるため、負担が軽減されたのではないと思う。

日程の短縮によって、エヴァリュエーション（アスラム母体の教会・財団に、キャンパーが気づいたことを報告する会）の準備の時間も2日かそれ以上あったものが一日だけとなった。

それでも最初に約1時間、メンバーが独りになって、自分のキャンプでの有り様をふりかえる時間を設けた。朝から晩まで、メンバーや、子どもたち、ホームステイの家族に囲まれて過ごしていた参加者にとっては自分を見つめる貴重な時間となった。エヴァリュエーションの組上に載せる項目は、1) アスラムの生活の中でよいと感じた部分 と 2) 改善すべきではと感じた部分 の2項目にしぼり、それぞれについて各自が気づいたことをメモし、4グループで整理し、それを両国学生が相談してまとめ、最後にインドネシア語と日本語の文章として完成させた。短い時間であったが集中して出来たと思う。

アスラムの歴史や普段の生活を十分理解しているとはいえない学生の、限られた観察や情報に基づく判断で、ある意味部外者の勝手な意見という面がないではないが、それでも2週間真剣に接した子どもたちの様子や、アスラムの現況から気づいた、学生の精一杯の意見を届けることが出来た。報告の場には、今年は4年ぶりにバリ・プロテスタント教会の主教さまが出席してくださり、ウィディヤ・アシ財団の総主事、アスラム担当部長とともに、学生の発表に熱心に耳をかたむけてくれ、予定時間をオーバーするほどだった。従来、英語による発表をしてきたが、参加者によって語学力の差があり、語学が弱いものにとっては、エヴァリュエーションそのものへの参加が難しいことになり、その時間を無為に過ごす場面も見られた。とりあえずは、両国語でそれぞれが思い切り自分の思いを分かち合い、それを両国の代表する学生が英語のコミュニケーションで纏め上げるという形は、少ない時間の友好的な利用方法だと思われる。このキャンプが始まった当初は、英語の語学力も高めるという目的もあったと聞が、この短期間で、何を優先するかという点で、今後も課題になると思われる。

朝の集い

以前は朝の礼拝として、チャブレンによる祈祷や感話、歌を中心にしたものだったが、最近は朝の集いとして、寝起きの身体を動かして目覚めさせるプログラムと、短い講話などで一日のはじめに思いを巡らせるプログラムを約15分間行ってきた。昨年までこの時間はスタッフが交代で担当することが多かったが、今年は、キャンプ前半はスタッフが、そして生活に慣れてきた後半は学生に、自分の体験や気づきを話してもらった。怪我をした学生が、葛藤を乗り越えて、自分のワークでの活動の仕方を新たに見つけた話、自分の生き方について、大切にしている言葉の紹介など、スタッフとは違う身近な学生自身の話に参加者は真剣に聞き入っていたように思う。また、集い前半の身体を動かす目覚ましプログラムの部分も、数人が率先して体操をしたり、合気道部の女子学生が、男子学生相手に合気道の紹介をするなど、多様なタレントが用いられて豊かな経験のときとなった。まだまだ、男尊女卑の風潮が残るインドネシアで、男性がいても簡単に女性に腕をひねられて悲鳴を上げるシーンなどは、帰り道に立ち寄ったバドゥンのアスラム（高校生、大学生が滞在）での合気道実演も含めて、インドネシアの女性に勇気を与える一場面だったのではないだろうか。

文化探訪

文化探訪プログラムも日程短縮の影響を受け、例年見学していた、パロンダンス、キンタマーニ高原訪問、タンパクシリン、ゴアガジャなどを文化探訪を行う日がなくなり、プリンビンサリ村からデンバ

サールへ向かう移動日に午後の数時間タナロット寺院を訪問するにとどまった。それでも今年の参加者にとっては、貴重な見学の機会で、ヒンドゥー教の寺院の儀式に参加し、楽しい経験であった。

昨年からはまった、在デンパサール日本総領事館への訪問は今年もプリンビンサリ村へ行く前（出発二日目）に行われ、千葉広久総領事による約30分の講義を受けることができた。総領事自らお話いただくのは初めてで、ご自身の4年目に入った任期中でのさまざまな経験や、日本とインドネシアの経済交流状況まで丁寧に語っていただきました。学生たちも真剣に聞き、講義後の質問も多数出て、総領事も楽しそうに答えていただくなど、これも予定の時間をオーバーするほどだった。

私にとって印象的な出来事

それはプリンビンサリ教会での日曜礼拝の説教を担当させていただいたことである。もちろん初めての経験で、Hetty牧師から金曜日に依頼を受け、急いでひらがなで原稿を作り、スウィクラマさんに、インドネシア語の通訳をお願いした。その日曜日に定められていた聖書の箇所が、ちょうど隣人愛に関する箇所で、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」とのメッセージを行った。隣人を愛するということは、キリスト教会のメッセージとしてはよく語られるのですが、その前に付いている「自分を愛するように」、という部分は意外に見過ごされている気がしていたので、もっと自分で自分自身を「いいね!」と褒めて励まし、自分自身を生き生きとさせることを通して、隣人と関わっていきましょうという話をさせてもらった。これは毎日の学生への語りかけでも強調してきたことである。後日、何人かの村人と出会ったときに、「あの話は良かった。」「イイネ!」と返され、道ばたですれ違う人に説教の反応を開けるなんて、なんともうれしい気持ちだった。村人のほとんどが集まる教会でお話しさせていただくことで、キャンプに来ているわたしたちの感謝の気持ちも強く伝えることができたので、話せてよかったと思う。

最後に

今年は参加学生に本当に助けられたキャンプだった。私自身の学生に対する信頼度が、事前準備を通して高くなったせいだと思うが、学生スタッフに出来るだけ多くをゆだねるようにし、それに応えて学生たちがゆだねられた責任を果たし、規律も保ってくれたこと。また、言葉の壁はあっても、現地の人々との交流に素直に積極的にとりくんでくれたことなどが、より豊かな結果を生んだのではないだろうか。

最初の募集の段階から、色々と助けてくださったキャンプ実行委員会のスタッフ、チャベル事務室のスタッフの方々への感謝も申し上げます。来年度も、より良いキャンプができるように、スタッフ、今年の参加学生（今度は参加者をリクルートする側になる）も協力をお願いいたします。

以上、感謝して報告とさせていただきます。

写真はプリンビンサリ教会にて、提供：森田良成准教授（桃山学院大学）



一緒に礼拝したバプア教会の主教さん一行と共に

「安全地帯の外に出る」こと

—第33回IWCに参加したみなさんへ—

国際教養学部 森 田 良 成

IWCの期間中は、みなさんに日誌をつけてもらっていました。毎晩これを読ませてもらうのは、引率者たちの楽しみのひとつでした。ディアナプラ大学から参加していたクララさんは、この日誌を最初から最後まで日本語で書き通しました。彼女はある日の目標を、「自分の安全地帯の外に出る」と書いていました。自分がすでに知っていることや簡単にできることの内側に留まっていなくて、その境界を越えてあえて外に出ていこう、初めてのことやできるかどうかかわからないことに挑戦してみよう、ということです。



クララさんだけでなく、今回IWCに参加したみなさんは、実際にそうやって毎日を過ごしていたのだと思います。安全地帯の範囲も、そこから出るための方法も、それぞれ違っていたでしょう。慣れない外国語の会話で意思疎通をはかる、食べたことのないものを食べてみる、場を和ませるためにあえて三枚目を引き受けて笑われてみる、子どもたちとめいっぱい遊び続ける。それぞれのやり方で未知なる世界に自分をさらし、苦労や不安をあえて経験することで、何かをつかんでいったのだと思います。

インドネシア語や英語が流暢でなかったり、海外旅行自体が初めてだったりして、思うように行動できないことがたくさんあったでしょう。それでも、ギターを弾けるとか、合気道を長年やってきたとか、きれいな字が書けるとか、ジョコウィ大統領に顔が似ているとか、みなさんそれぞれが持っている何かを最大限に使うことで、その場を盛り上げたり、誰かをサポートしたり、気持ちを伝えたりできたと思います。

僕は写真が好きなので、重たい一眼レフカメラをいつも持ち歩いて、あちこちでそんなみなさんの写真を撮ろうとしました。いい感じに撮れたと思ったものもありましたが、みなさんがケータイを使って子どもたちや仲間と楽しそうに自撮りをしているのを見ると、いくらカメラが高性能でも結局かなわないだろうなと思いました。みなさんの写真には、その瞬間のそれぞれの思いや、一緒に写っている誰かとの距離の近さや、僕には見ることでできない表情などが、もっとダイレクトに、生き生きと写っているはずだからです。

「外国語ができなくても、ほかの手段を駆使してコミュニケーションはできる」ということを、みなさんは実感できたと思います。これはもちろん、とても大切な事実です。ただ、インドネシア語でなくとも英語がもう少しできたなら、例えば英語が堪能なヤティさんやワルシさんに、アスラマや子どもたちのいろんなことを、より深く、直接教えてもらえたかもしれません。「外国語がもっとできたら、もっと違ったコミュニケーションができたはず」ということも、同じくらい忘れてはいけない大切な事実だと思っています。

キャンプ最後の夜、グループに分かれての振り返りの際に、スィクラマさんはディアナブラの学生たちに向かって「日本の学生たちは、これから変わっていく」と言いました。ディアナブラの学生たちは、「キャンプがもう終わってしまう」ということに氣を取られていたのか、「これから」というスィクラマさんの言葉に驚いたようでした。

キャンプの期間はこんなに短い。それなのに毎年、帰国した後の日本の学生たちは、これをきっかけにもものすごく変わる。外国語やそのほかのことを真剣に勉強するようになる学生もいるし、他人との接し方や、生き方そのものが大きく変わる者もいる。

あの学生たちは、キャンプの短い期間に、たくさん「くやしい」思いをしたはずだ。ふだんならば何でもないことがうまくできなくて「くやしい」、誰かに気持ちを伝えたいのに思い通りにできなくて「くやしい」。インドネシア語でこの言葉をどう説明したらいいのか、本当に難しい。辞書の説明を読んでも、まだよく理解できない。「くやしい」というこの気持ちを、日本の学生たちはきっと忘れない。だから、キャンプが終わったあと、これからものすごく変わっていくんだ。

スィクラマさんは、ディアナブラの学生たちに発破をかけようとしていたのでしょうか。でも、スィクラマさんが桃山学院から毎年やってくる学生たちを高く評価していることや、今年参加したみなさんにもそうした気持ちを抱いているということが、十分に伝わってきました。

IWCを終えて帰国したみなさんは、それぞれの「これから」をどう過ごしていくのでしょうか。IWCの経験を、一時的な非日常の出来事にして、日本での生活から切り離してしまわないでほしいと思います。アスラマの子どもたちとの出会いにどのような意味があったのかは、みなさんの「これから」が決めるのだと思います。子どもたちに対してすてきなお姉さん・お兄さんであり続けたいならば、お世話になった人たちへの感謝を忘れてはいけないと思うならば、日本でのこれからの生活においても「安全地帯の外に出る」つもりで、いろんなことに挑戦してってください。IWCの経験をこれからの日常と地続きのものにして、今はまだできないことや理解できないことから自分を閉ざさずに、それぞれの「これから」に自分を開いておくことを忘れないでほしいと思います。

第33回国際ワークキャンプ（インドネシア）に関わって

学部事務課 村 上 諭 司

私は、桃山学院大学で働いていながら、国際ワークキャンプ（以下IWC）に、今まで、存在だけを知っているという状況であり、関わる機会はないと思っていた。しかし、様々な状況が重なり、担当者、引率者の一人として関わる事になった。そんな中で、IWCというプログラムの面白さや役割について気づき、また、IWCについて考える機会を得ることができたので、そのことについて書きたいと思う。

まずは、IWCが33回も継続されているという実績である。他大学を見渡してもこれほど長期間に渡り、国際ワークキャンプのようなプログラムが継続されているところは、他に聞かない。なぜこれほど、長期間に渡り、継続されているのか。おそらく、このプログラムに参加した学生たちの考え方の変化や、帰国後の生活態度や授業への向き合い方などへの影響が大きいからだと思う。今後も、関わった教職員の一人として、学生たちに推奨したいと思うし、継続させていきたいと思っている。そのためにも、これまで以上にこのプログラムを発展させていく必要があるとも思っている。

今回、参加した学生たちは、16名。2年生10名・1年生6名で、3、4年生の上級生はおらず、1、2年生のみでの構成であった。初めてのボランティアという学生が多数であり、しかも、初めてのボランティアが海外で経験するという状態であった。ボランティアについて学ぶ、経験するというに加え、海外（インドネシア）にも触れられるという非常に貴重な経験である。また、先輩もいないため、「教わる」という事は望めず、全員で協力しながら自分たちで取り組んでいくという状況である。そのため、全員の成長具合は、非常に速いという印象であった。個人的には、だからこそ、もっと多く学生たちと関わっておけば良かったと後悔している。「保護者的立場で、見守れば良い。」「事務的な処理をこなし、サポート役に徹すれば良い。」と勝手に決めていた自分への後悔である。これほど、いろいろ吸収し、すぐに実行しようと積極的にプログラムに関わろうとする学生たちだから、例えば、SDGsといった世界に関わるような事柄や過去のIWCの事などきっかけをもっと多く提供することが出来ていれば、今以上に面白い変化がみられたのではないかとこの事である。これは、贅沢な悩みであり、いまさら言ってもしょうがない。と思わされるほど、今回の参加学生たちは、「良い」と感じている。（少し親バカな感じはするが・・・）。本当に、学生たちと関わるのが非常に楽しみである。なぜなら、今後も今回の経験を糧にして、成長していくのではないかと期待を持たせてくれるからである。

それは、アスラマの子どもたちやスタッフ、インドネシア学生との関わり方は、相手の事を思いやりながら、短期間で良好な関係を築くことができたかコミュニケーション力や優しさ。みんなが楽しめることのできた交流会や日本食パーティーを開催する企画力や運営能力。毎晩のミーティングでの反省点を改善に結びつけようとする積極性や修正、改善能力。ワークを頑張る忍耐力。みんなと仲良くできる協調性や元気や明るさ。などなど、まだまだ粗削りではあるが、様々な可能性の片鱗が見えたという事である。

このように学生の可能性を引き出してくれるプログラムであるからこそ、長期間に渡って継続しているのだろう。参加学生やIWCのことを褒めるのは、これぐらいとし、課題、反省等についてもふれたい。

正直、プリンピンサリ村のアスラマに到着して感じた第一印象は、ここは我々の活動が必要な場所なのかというぐらい、過去に活動された方々や様々な方々の支援の跡があり、設備も整いつつあり、むしろ、過ごしやすい環境である。今後も、同じ場所で活動が続ける場合は、現在までに整えられた設備等

をメンテナンスする事が必要だと感じた。新しいうちは、問題なく使えるが、期間が経つと劣化や故障する。そういった場合に修理したり、補強したり、リノベーションするというのが出来るように技術を伝えたり、定期的にメンテナンスをしに来るといった事が必要で、提供したら終わり、古くなって壊れたら、新しいのにするのではなく、大事に使い続ける方法の支援も重要だ。持続可能性が大事。このことについては、学生たちだけでは難しい。企業等から、修理技術やメンテナンスといった技術面のサポートを。学生たちは、ボランティアワーク、特に畑仕事など人手が必要なワークを中心に行い、その他は、子どもたちと交流することや帯同教職員と共に持続性やリサイクルなどといった知識や情報を提供できる授業や講義を行うといった内容にするなど検討が必要。今までは、ないものを建てるといった提供目的が多かったが、今後は、提供されたものを活かす方法、発展させる方法など現地でも、改善できる仕組みを提供していく段階になっているように感じている。他にも、今回のように1,2年向けのプログラムとし、他のプログラム等へ繋がられるようにするといったことも考えられる。このことは、過去に参加された方々や関わられた教職員、コーディネーターとして長きに関わってこられたスィクラマさんを始めとするインドネシアの方々の協力があり、熟成されてきたプログラムであるが故の贅沢な悩みでもある。

IWCはきっかけにすぎない。このプログラムに参加して、学んだこと、感じたことを今後の人生に活かす事が重要である。それは、学生だけでなく、我々、教職員たちも同様である。様々な学生をはじめ関係者等に、影響を与え続けるプログラムとなるようにしていければと思っている。

最後に、無事に帰国でき、そして、学生たちが日々頑張っていく姿を見ることが出来ていることに感謝いたします。



国際ワークキャンプ報告書編集委員

中 川 皓 汰

平 野 隆之介

大 野 佑 也

原 田 健 斗

長谷川 大 陽

大 川 芽 衣

中 村 彩 美

海 津 龍 馬

佐々木 琢 弥

滑 田 愛

尾 坂 惇

福 留 美 緒

布 藤 理 沙

菊 池 安梨沙

百 溪 千 夏

馬 場 絢 子

第33回 国際ワークキャンプ（インドネシア）報告書

発行日：2019年12月

発 行：桃山学院大学 キリスト教センター

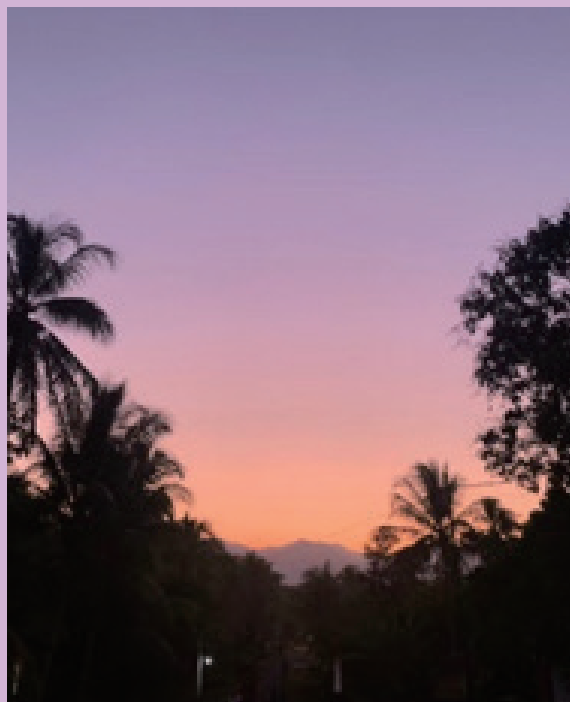
編 集：国際ワークキャンプ実行委員会

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野 1 番 1 号

TEL. 0725-54-3131（代）

印 刷：和泉出版印刷株式会社



桃山学院大学
St. Andrew's University